



210.58
Ka9562k
0



0
複写



川路聖謨文書第三



川路聖謨文書第三



川路聖謨文書 第三

目次

一 寧府紀事

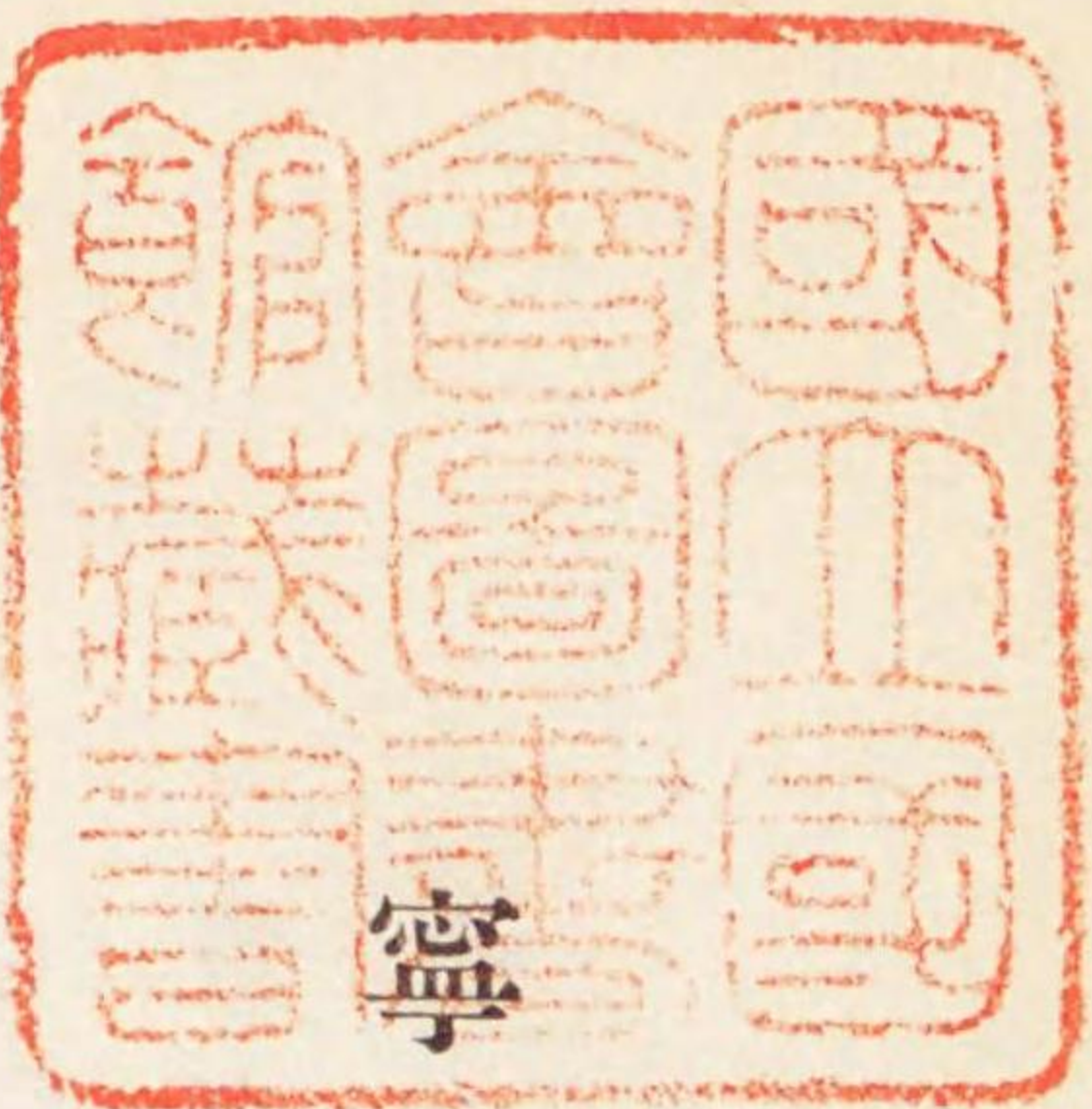
第二

自弘化四年正月元日
至同治十二年晦日

目次



212626



府紀事 二

弘化四年丁未正月元旦 晴未明微雪

初春のあしたくまなきころもて千世も長閑にとしを重ねむ
 月と日をあたにはせしと立歸るはるのはしめに先ころせむ
 日々に新になしてあら玉のとしのはしめのころ忘れじ
 春日山松の梢に昇る日も霞みてけさは句ふはつ春
 磯ちとり八千代よふ間に明初てみなもと霞む佐保の川つら
 天の下ときはかきはの三笠山松も萬代よはふはるかせ
 谷風に氷やとけしはつ春を聲にしらする鶯の瀧
 けふよりは袖ふりはえてかすか野の雪解の澤にわかな摘らむ
 立歸るとしのしるしも浅みとり若くさ山にはる風そふく

門にかゝる松と竹とに豊としのしるしをみせてはれし白雪

などゝ出まかせを記すうちに今朝五半時揃といふことなりしか遅くて江戸の年始御禮のこととおもひ出るうちに表よろしとのこと家來申出て即大書院に出る與力同心の禮畢三之間に出る立なから郷同心共々禮受る畢又大書院に歸る惣年寄共はしめ町代見習迄禮として出る舊年よりおさとはしめみな健にあらはつはる勇さまし○ひる後より萬歳職のもの來る表々居間の次に簾をかけ其外に用人壹人給人二人侍坐して簾のうちより奥のものすきみすること也これも以前の例也萬歳四人立なからつゝみもちて歌ふなり江戸よりは又一段のひなふりのもの也其體田舎ものゝまめ藏に似たり家來等かのしめ着て着坐するもおかし

○二日 晴 五半時を供揃に東大寺へ 御宮二月堂を觀音八幡春日兩社に參る着服大紋風折烏帽子也以上いづれも白銀壹枚又は金貳百疋獻備也夫々大乘院殿に參ることゝは攝家門跡なれ共取次のもの長袴白無垢にて

下座敷に出内清殿と申所に家士坊官等に逢新春を賀申上る無間も御逢被成候由に上段之次に出る蓬萊の御祝ひひつみの事也 出夫々御門主御盃被下之御手つから御肴被下之かへ有之候家司の盃を納にわたす家司の御禮申候而退去也大乘院九百石也攝家門跡なれ共御内ゆたか成レは御家來共多し夫々内清殿にのみそを雜煮并御酒御吸物被下之夫々興福寺境内中院屋に參り 御代々様之 御位牌拜禮いたし畢一乘院宮に參る御同所は親王之御門跡に被爲渡千五百石に被爲在れ共近頃御寺務に被爲成久敷御寺務不被遊故御家來共あまり立派ならず其上宮之殊に御聰明に興福寺二萬石之御裁斷向とも至る潔清に御直裁なれば家來共潤ひ少しと人はいふ也御同所にあらは取次之もの出迎なし公帖之間に北面之さふらひ共の會釋いたすことゝに取次之もの長袴に取迎居御宸殿の案内いたす無間も家司坊官共罷出新年を賀義申述る内御門主御逢と申事に御書院に參る進獻之太刀折帟を披露等あり御門主御手つから御昆布被下之永日參り候様

と之御意に御上段之御ふす間は閉る直に同所にもみその雜煮并御菓子被下之坊官は筆頭之もの白き格衣のときものに紫のかさねあかものを着し家司一人直垂着用也歸りには下坐敷までおくる也關東と違ひ攝家門跡と宮門跡の差別大にあり衆徒大乘院殿一乘院宮さまと申す也一乘院宮には御廊下にて脱劔にて御目通也大乘院には御盃被下候節も帶刀御肴被下候節御側にて參る時計脱劔也一乘院宮はさらにも不言大乘院殿も近衛殿を御住職歟なれ共奉行參れば少々も御またせなく御目通被仰付也一乘院宮は年始計の御目通なれ共大乘院は寒中暑中共に參り候度こと直に御目通被仰付御辭下さるゝ事也兩宮共參殿の御挨拶之御使者は直に被下事也いにしへをおもへは關東之御威光にこそかくも御丁寧には被遊るゝこと恐入おもふ也兩御門跡は銀馬代太刀一腰奉る兩御門跡は矢張同様に被下也關東には上野にも玄關に式臺と下座敷あり兩乘兩門とも玄關に式臺なし式臺はもとなきものなるに武家に御駕籠代を敷置敷臺

と成夫々下座敷といふもの一段出來候か西築地門跡玄關にも敷臺はなし大ふくとてうす茶に梅干と昆布の入しを年始には被下也關東にも大家の賀儀にある事のよし也

○三日 晴 奈良町人共之禮受る出入町人共は表居門獨禮并惣禮あり小書院獨禮の町人あり惣町人共最寄之村名主共穢多村之名主年寄共迄大書院也尤百姓町人は椽頬穢多は白洲に出る○夜に入而謠初之式あり表居間二之間三之間まで燭臺をつらねて居間正面へのしめ麻に刀を爲持出る二之間に用人給人共出る三之間の方々三方は土器をのせのし昆布の肴を近習之もの持出わか土器をとるをみると奉行所出入之能役者金春清之丞弓八幡をうたふかへありて老松を謠ふ三獻之時高砂を謠ふ酌之もの帶劔立膝に二之間之式居之所に居る高砂をうたひ畢而大夫は土器を遣す近習之もの肴をとり與ふ畢而ゆるりと申辭を遣し奥に入以上之規式中奇代之珍事に出逢事かとおもひ禪學の坐禪を稽古をいたし居りし也され共四

海波しつかにてといふ謠はきゝし也馬の耳に念佛よりはよし○大夫の横
麻上下一具金百疋酒肴吸物共用人やに遺す也けにも又一の珍事に過
料三貫文位の事なるへし

○四日 くもり けふはならの市中の寺社の禮受る日也これも表の居間
にて出入の祈禱所の類をうくる其外は大書院也○けふは兩御隱居様の年
始に御膳上ルよつて少々酒を給ふる也わか酒の禁年限立しうへに奈良に
引越ころは母上と御はなしに因り酒給たり奈良に來りての後は夏少しく
直し焼酎をのみ或は何か廉立たる時用ゆることに成しか九月のはしめを
禁酒せしに九月廿五日のつげを聞しのはしはし快睡りかねてこまりし
まゝいぬるときに猪口に三ツ四ツを度としてのみきしかるにこそ廿
五日にてふくもはてければ 御宮へ誓て年中に年始に御膳上るときにか
きり一度與力共の酒のまするとき酒をのみ二月いなり祭には與力共を別
段に料理なとくれ例の能ある故に其日并春日祭禮畢りて其日はかり以上

は猪口にて小ならは十に壹合五勺位大ならは六ツ七ツ位其外都筑など
參り候事あらは其時又禮酒を以唇をうるほすに至るは兩御門跡に酒給
るとき其餘は藥なりとも不呑酒のめとの異見は少も用へからすと極たり
ためしみるに藝の出來かた大にちかふ也

○五日 くもり 居間にて晝高福院さほ山眉間寺の禮受る夫々小書院に
て寺院の格に禮受る大書院は遠方の寺社なり名にきこえたる寺などに
十四五はかりにみゆる小坊主などあり戒行はしばらく差置經もよめ中間
敷みゆる

墨染の袖は名のみにうらわか大和の寺を衰にける

○六日 くもり又晴又雪しくれの如し 御用狀來る○太郎嫡孫承祖の願
御老中方御附札有之相濟御禮等之義は新右衛門取計吳可申と之義申來る
先以安心に至其旨家來共の申渡家來共一同恐悅申出る○新右衛門日記に
内鈴法寺か美人になれて三年吉原にかよひ詰たるとのことこの入用夥こ

となるへし岡清か遊女に遣ひし金二百兩餘也この人五十俵三人扶持の貧人ももし岡清かこときもの二十兩の御用金被仰付ことあらは必天下騒動すへししかるに右へ通也又二百兩の金を五六年に溜よといふとも工夫の可附ことなし何事も誠をつくすには妙のあるな^{る脱}へしけにも徳をこのむこといろを好むかことくならは不思議も多かるへき也○十一月四日奈良には地震なし江戸は近頃の地震のよし京地大地震の時もならは知らぬ位にて伏見より甚敷ありしところ^へに來り一度か地震かとおもひしことあり其後會^へなし地震のなき國なるへしこれらの事水旱共に患ひなきなと帝都のしるしなるへし○同日に太郎か三才の祝ひとして神社まうてのこと審に御書記し忝候實に彰常かことおもひ出てみな泣也彰常か畫像のことお千ゑの御心附のよしいかにも御尤也新右衛門幸三郎等共に父上に早くわかれまいらせしかとも十歳以上にてみなよくしるところ也おちゑの新右門御養父にわかれしは遺腹のことなればわか父の顔はせいかにと

常におもふとみえし孝行の至りよりおし廣めて太郎敬次郎をして孝ならしむ感服のいたり也人は實地をふむものは味別段なりこれも又涙をかし○十一日太郎か祝ひとておしけ來りけるに太郎か歡ひの體同人は辭わからねともいと^へ歡ひてあるくふりいたすよし等の日記等^脱いたり泣ぬものなしこゝに^へしするすも涙なり○茂兵衛か助實の刀貳百五十金に所望のものあるよし前の日記に^へしするす大鶴の笛より下直のものなるへし昔鎌倉殿のころ高直の刀求めしものを謀反にあたる^とていたくいましめ給ひしこともある也右とは反せしことなれ共彼等か身分に^へは賣るかたそよかる然るにうらぬといふも又一奇也○林祭酒の物故おしむへきのかきり一齋は高年聖堂の學問遠からず絶へし可患のかきり也右に付新右衛門か親のあるものは進まむよりも入りつとむるかたとの論敬服々々われも韋弦にかえて服膺すへしいにしへの人親のためには賤しき官をも不辭して歡ひしを打返しておもへはこゝろあるへきこと也○精姫君様御縁組のことに付牧よ

りの内狀御尤の御挨拶いつれへや親次第たるへし○本多中書の寺社奉行に被爲成新右衛門被參享保の頃の普請に而至る麓末乍去大名普請なりとの事左もあるへしいにしへは表向の雪隠は甲冑指物に而被參候様必一間四方なりしと聞也江戸の御城もしめは御玄關前に船板式でありしといふこと落穂集にありしかとおもふ也○五歳に而善書の奇童の書被遣忝候與力共なとへ^てもみせ候處みなく感心いたし申候わか父上の戒に三十三間堂の半堂射手幼年にて多く扇面しるせしものに名の舉りしものなしと仰られき信に智言也われよつていふあまりめさましき役人弱年よりよき御役をつとめたるものおもひの外に早く結構になりしものみな災也小學に若くしてよく成し官人高才ありて文章をよくするの類を以不幸のもの也といひしは戒のみにあらず實事也新右衛門か親人のいましめ尤也蘇東坡兄弟のときもあれ共多くは事ならぬ也○つるの新右衛門御歌忝候道中八日限に而二十三夕かかゝりしもの二十日の着とはけしからぬ延着也味

千柳の句に
それこり
函谷關に
圭出來に
と妙也水
漏はふるく

かはらしとて大騒にて遣したる也當地の飛脚やよく糺すへしあまりの事也○幸三郎日記沿海指掌圖は測量の時伊能勘解由か手に成しものか別段に撰か或は世にある折本に而海岸をしるせしものか○近藤氏の一條驚駭○五輪の鏝おしかた毎度ながら忝候され頭の鏝に御讓受にいたし度候統景の刀の價たゝの如し新右衛門に讓候協差の如きすく刃ならば青江受合なるへし直胤まで青江也と申せし也○風聞は可恐もの也學者に而一を聞十を知と之虚説悪しく申候も又如斯つまりみな齋東野人の語也昔きそ山中に小屋に妖怪出候由に風聞甚敷山よりきその宿場迄参りたるに所々宿々の者共某か夫も兄弟も参り居候妖怪に食れは不致哉なといひ妖怪の圖は餘國にも参り江戸にも見たり三人虎をなし曾參人を殺すのはなしと同しことにあいつはりの實事と成りて大こと也よつていふこのほと又々通鑑を見はしめしに孟子は子思の直弟子のことくいろくの説をあげあれ共よくみれば年歴いか様しても五十年も違ひ孟嘗君か客の函谷關に而鷄の聲

あり世に堯舜の
御曆ありは左
り時を恒りか
もに恒りか
傳はふ以し
見は夜明星不
と漏るを注し
水と濁るを注
か切ると覺る
大か鶏の可頼
とみてか可頼
この

をまねたらは外の鷄みな鳴たりとは八ツのとり七ツ六ツ夜あけととりの
生つきにて同しとくらにてもみな別々になくにも氣をつかぬそらこと吳
起は曾子か門人と云も年歴ちといかあるへきか秦の始皇帝は呂不韋か
隠し子なりといへ共十二月めに産れたりといへは可疑のかきりにて孔子
の公山氏弗キツの呼にいらせられたるなといふことも孔子没し玉ひ百
年はかりの末に出來たる論語なれば無疑とはいふへからすといふ類を通
鑑中をあけみしに正月元旦已來よほとあるかことし風聞の間違ひ今には
しめぬ賢者のわつらひと成不肖者の幸ひと成こと多かるへし○幸三郎近
來貧と申ことを戒たるとの論いかにも敬伏のこと殊にざるをいくらはり
直してもうちにかろくあれは夫より破を生すとの論微妙の至言に宋明
大儒先生の語類等へ加へるとも恥かしからぬこと存候右に名僧と成才力のあ
ほと出來たるへしわれ去年与風六祖の慧能か無筆に名僧と成才力のあ
る大智識の上にてたち妙論をいふをみて大に感服し眞西山か心經の増注を

明程篁墩か書しを母上の法華經をよみ給ふことくみて少しく覺あるかこ
とくおもふ也幸三郎生質に巧なく生のまゝのこと多く欲少ければ利口に
て豪傑に私智多きものよりは遙に早く道にいるへしと別感心いたす
也達磨西來不立文字といふこともあり朱子か文集にも減去文字工夫○冥
目靜坐卻得收拾放心○知文字言語之外眞別有用心處○學問根本在日用間
などみゆれば必しも學問は書物をよむにかきる事には決あらずいか
に妙理をとくと一日の行跡にかけて不都合なれば博學者の趙括にて少
も役にたぬ也心經補注は安積祐助佐藤捨藏佐久間修理などへみせしか
初一覽したりとて殊に賞したりはつか二冊也韓本を淺野中書所持也借
用してみるへし佛氏の説に勇猛精進といふことあり可恨は幸三郎に此事
少しこのことなければ道にはいりかぬる也われには右之四字は幸三郎よ
りあり其かはり幸三郎に見合すれば私智ありよつて別道にいらぬ也
幸三郎か病はあさくわか病ひは深しよつて療治よほと嚴敷ても幸三郎に

はまけるなるへし

○七日 くもりおりく晴又雪ふる 春陽之祝儀居間は儒者與力共は大書院にて五節句の如し

○八日 くもり又雪ふる四十度の寒さ也 このほと經書之内いろく疑ヶ所ありて儒生に尋ぬれともおもしろからす南都に儒者蘭學者日本のことに明なること夏蔭かときものあらはうれしかるへし疑敷可論ことあることに江戸をおもふ也又あゝ彰常かあるならば同人よりして諸儒へも問しむへきをと落涙する也この四日に貞助男子を出生せり名をこひければ長生殿裏春秋富といふ富の字を以富之助と名附遣して

春秋にけにもとみけりあら玉のとしのはしめに生しみとり子

みとり子は子の日の松を友としてはると秋とをよみもつくさし

けふ人に被頼けるものを數枚しるしてわれらにも帑をよこさするものゝあるは 君の御恩さて幼年の時至極の手習きらいを教玉はりしは父母の

御恩とおもはず涙を流し候ひし也且は手習をひまの時せぬを今うらむ也

○九日 くもり けふは春日一社の千鳥三位代の者はしめにて神主社家共の禮受る社格に而諸大夫はみな布ひたれを着用す夫より以下はみな大紋也烏帽子にかけ緒なし衣紋つきみなよろし○こゝの與力羽田鎌左衛門といふもの至而眞實にて出精なる人也二老なれ共みなこの男になる也あまりに感心せしかはそのことをしるして

青丹よしならを治るつるきたちわか身にそへて力にそ思ふ

とよみて夫に直たねの一刀を添て遣したり至而眞實のものなれば落涙してよろこひたり○けさ馬場の馬のりに行しみちの畑に龍助か黒つむきの羽織に緋の衣類にて一刀を帶し鋏を遣ひ居る農業出精はよけれとも其なりはいかにといひしにいやなくさをとると答しかやかてかたまに七くさをうへ中に春日野にてきのふ子日せし小まつをうへ歌をよみて出せり其短尺をみれば

春日なる神のしめたる野の小まつひきしも君かめくみなりけり
とありこの男よく何てもする男也花をいけ茶をよくし尺八など上手之由
狩野家の畫も少々はかき人にたのまれ人物の三幅對などかきしもみし也
書物はあまり出來すこの頃日ことに出て五經の素讀し易を講を聞たかる
故に一交ツ、講し遣す也

○十日 くもり きのふ夕かたより曉はかけ雨法隆寺什物に神息の刀あ
り二尺二寸はかり須彌山の彫あり大和に有有名のもの也とそけふ恭敷も
ち來りてみせたり焼刃はなく少々うつりのこり居る也中心はつき身のこ
とくに銘又よろしからず從來の寶物にせともいはれすしとしるに刃を畫かきあり
定の間違かとして貞助にみせしに天下の珍刀を拜見したり難有とて引たり
もち來しは儒者をたのみて一覽に出したる也儒者歸りて貞助を呼出し尋
ねしにわか鑒定の通いひて符合せり汝何故にかくは賞せしといひしに此
ほと奉行所に目利ありよからぬといふと大和中に有買ものなしよつて

何品によらす容易のことはいはす所持刀ならば必賞することに定めしと
いふ江戸の良工かこの意味常にあること也いつのむかしにか刀をすりか
えられたるもの也シンカ子はかりに刃及され三ヶ所あり壹分か價もなき也
○十一日 くもり けふは與力同心惣年寄町代之もの共門番人郷同心山
番之もの共迄料理たうへさすること也與力へは盃遣し昆布するめの肴と
り遣す出入之町人共にも儒者醫者迄御役所は拘り候もの共は不殘に付都
合にては八拾人餘也與力は目の下壹尺の鯛のやき物にて用人のひくこと
也○臺所の世話するもの酒の爛は酒屋かするといふ類也江戸ならば料理
やの板前ともいふへきものひる飯を給るにはつかに香物二切レ位の事也
此八十餘人之もの共下口壹人もなければ共強られて酒をこほすなといふも
の壹人もなしよつてのみて揃とはいらぬ也椀方之もの疊をあけて椀を
根太板の上には洗ふなとよほとこまか成事也江戸なとより人おとなしく
物を麓末にせぬは不思議也一體佐渡なとにくらふれば人氣至るよく僞少

し御使番等を参りても随分治る也

○十二日 晴 七半時の出立にて出京いたし關東にて三ケ日之御規式無御滞被爲濟候恐悅申上のため也十一里なれとも近し七時に京着いたす○かこにのるとて

かりそめの旅の門出も竹芝に永くわかれし子を忍ふかな

月も日もたひとし聞けはたひの世の旅ねのなかに旅ねするかな

木津川の堤の上にて雲雀を聞て

鶯もまた聞ぬ間にあけひはり雲井にはるをしらせてそなく

無間も鶯の初音を聞ければ

鶯のはつ聲す也ひはりにや驚されてはるをしりけむ

田面の氷をみて

むら／＼と風にやつれしくものをかけしはかりのはるの薄氷

京都へ來てみれば北山比え其外みな雪にてならよりさむし

あなさむしひえ北山の雪ふかみはなの都はかすみたになし

かくしるし湯あみ夜食たうへても日いまたくれす

○十三日 晴 のしめ麻にて所司代に参るけふは所司代に而寺社之禮受させらるゝ日也供立は江戸供之通也所司代三四日已前を風邪に而けふの禮もなしよつて御逢もなし伴金左衛門に謁江戸にてのはなしなといたす新右衛門のうはさなといふこゝの人は必新右衛門様はいかゝあらせらるゝやといふはみな同じ所司代近頃は御風邪度々ありて御名代の申渡等いたすに困ると遠江守など話せし也全御用なき故却る英氣つよき御人故病ひを生するかとおもふ也しかし一體の風聞に而は何もなし不快に而被引候こと去年兩三度もありしか也新右衛門より御機嫌伺等には決而不及義と存する也午後遠江守かたに被招候而大に馳走に成しかし例之通酒をやめたれは大食いたし歸る○旅宿は刀の鑒定を乞人或は畫師など來る○夜に保之といふ歌よみ著述の書にたにさくを添て旅宿の主人を以目通を乞ふ旅

宿の主人歌よみとみえて昨夜も所々のよみ歌なとみせし京都も公家をはしめ骨折て日本のことをよむものは内實みな眞淵本居か流によるといふ也歌も以前の二條家といふものとはみえず保之といふものは芝山殿の門にありて此卿隠居せられしち屢本居か僑居へ行て日本のことを問ひ給ひし故終に保之も本居宣長か門に入て眞淵か流をくむといふ也いろ／＼とひみしに覺よくあまりこまる體もなし京都に歌よむものは多かれと六國史なとよむもの少なりといひき著述のものに言靈舎とある故にことたま家とおもひて聞みしに果してしかりことたまのこと萬葉集人まるのうたにことたまといふことみえけれと必今の人のいふことくなることの祖ともきこえすわれ兼而疑ひ居しかは菊桔梗のことたまをとひしに異國のまゝを用ゆことには言たまなしといふよつてへみたかたら蛇鷹きさ象なとのことたまをとひしに兼而審にせしことゝみえてたかは高より轉しとらはとしの意きさは牙によりていふなと詳にいひきわれよつていふわか

朝に鷹といふものなかりしにむかし大和の國にて捉得てあやしのととりとしてとし老たる人なればとて武内宿禰に御尋ありしにしらさりけるを百濟の人しり居てこはわか國の鷹といふものなりとて養ひ立て雉をとりて天子の御覽にそなへ奉りければ夫々して隼人等の官もありしかときく夫迄はしらぬとりに名のあるへきはつなければ菊桔梗のことくたかとかはやふさとか定而百濟の人のいひしまゝを日のもとの名になりしなるへし梅をむめうめと云も藥の烏梅の一轉せしにて錢をせにといふも是又センの一轉せしにてへみの反鼻の轉今以きその者はヘンビといふ也かゝる類いくらもあるへし日のもと唐音のまゝ漢音梵言を用ひニアマ斑ラマタ猿ラマシ以上は梵言とかいひ石灰クキツ杏仁ズアンは唐音のまゝといふにはあらずや其外百濟のこと多かるへし譬こゝに西の國と日のもとの間にある海水をくみて是はいつれの水とわかつかことし陸羽再ひ生るゝともかたきことにて今のめりやすかつはこはせかすてらなともこゝろせねは日のもとの

語とおもふも數百年の後には必出來るわけなるか源氏物語のうちに王家
統といふことをわかむとほのとかよみしと覺へしこれらの辭も唐音めき
たり既に眞淵宣長等もいはす二三十年來江戸其外にもことたまといふこ
と多出來しはいかなることや日火緋ヒヒといふ類端シハ橋シハ箸シハ神シカ髮ミカの
類みなことたまといふことあるかことしなしとはおもはねも脱カ事々物々必
辭を以わかちたらむには其はてくゝるみしの辭を神の御ことなりといひ
て鳥獸のことを神のつたふることゝ強而いふにいたるにの弊はあらずや
唐土の字にこゝろに甘きを舌にのせて憩といひ天地人の柱といふ意に
王といひ其外この類古く説文などに云こともあれと夫より牽強して王安
石か字説のときこともあれはことたまのこといかなるへきかなと物語
の序に段々とひみじにたしかのこともなし保之といふもの短尺をつまら
ぬ筆に尊朝親王風に見事にかきうた共萬葉其外のことよく闡誦する體
にては京地にても少き程の人也見通り乞ものなれはみゆるしあれとて旅

店のあるしか家來にとり成せしもいつはりとはきこえねともことたまの
ことはいかゝあるへしや尤旅宿にてはしめて逢ひしことなれはいかにも
穩に聞てまつはへいゝとわかいふことくして定説なければ日のもとの
ことを好める人に糾究させは論のつくること多かるへきかいかゝあるへ
きこれらのことにて夜ふくるまで物語せしかいろく古書共のこと教く
れて硯を傍に置てかきつくることも多くありきこのうち家來の若きもの
共かあの老叟はくるよりかへるまで大長坐のうち始終やちまたくとい
ふ也八股のおろちかこしから下の穿鑿よりも甚しわれらは股一ツにてこ
とたるキ一足といふこともあるにとて宗次郎等かあくひましりにて帚木
をみたひまでさかしまにしてかこちしといふもおかしき也
○十四日 晴風 拂曉京都をたちて五過にふしみへまいる豊後はしの上
より河つらをみるに霞わたりたりいにしへのことおもひて
柴船の今も霞に沈む也あさけのとけきうちの河つら

なといひて夫々例の先年市川など参りし大池のつゝみを行こと一里也この池段々に大きくなりて今は海のことくに成る良田の年々に水中に没する歎へし淀川を浚へは忽に干かたと成へしにしへ大和よりこのわたり湖水のことく成りしを所々の川筋よく出来て良田に成しか又かく成しといふものもある也眞偽はしらねとまさしく良田とはなるへき地とみゆ可惜のいたり也前々々之例にて奈良の奉行へ繼場にてさかつきを出すことよしわたしもありにも金貳分は遣といふわけ故年始の出京はもの入多しけしからぬ事也われは肩輿のうちより出しこともなけれと六尺などには酒くさきもある也京都にてはとし玉のわけか正月には所司代町奉行等々中間らに壹兩貳分ツ、都合にては遣す出京の度々は半減也これを下馬金といふ也長崎奉行は三兩ツ、也といふ也七ツ半時過に歸宅十一里といへ共近きかことしこれを日つけにせぬ人もある也

○十五日 晴 禮受ること例の如し○きのふ歸宅してみれば正月六日附

之江戸より母上并新右衛門之書狀來るよし家來共申聞る十三日着之由也いつれも御機嫌よく御加年のよし恐悅の御事也○ゆてたる玉子あり物せむとおもひて戯におさとへうて玉子置つる君かこゝろいかにといひしに問へと答へす中にくちなしといひて早く仕舞しも大笑也

○十六日 くもり この頃伊奈遠州話に以前矢部駿河堺奉行之時

いふもうしいはぬもつらし武藏鑑かゝるときかと奉存候

といふ公事人と歌にて尋答ありしこと北村季文か境のうら風といふものにもあれと駿河か終をよくせぬ故につくりことのことく云なれとも實にありしことにて夫は目付同心といふものに風聞糾をさせ置て訴訟人の氣分を察し取計ひしことには無相違よし也このことをわれも偽也とおもひ人にもかくいふなれと實にありしことこのよし也駿河か冤罪を洗ふためにしるす也遠州は境奉行にあつまひらかにしり居るのはなし也○この頃京

都にてのはなしに足利家の御子孫の四國へ行て阿波の家來分同前に成られ居られしを阿波公方と俗に唱候由此人三十年前はかり以前に阿州と争ふことの出來てかの國を去りて足利家建立之縁に而等持院に參り居候由家來も十四五人もありけれとみな夫々にちりわかれて今は一人もなくかの人はしめは持傳の寶器をうりて世をわたられしか夫も盡て今は元家來の支波某細川某といふもの植木屋になりて日ことに百錢を得てよるに成いにしへの體に而袴羽織を着し臺所之世話などかはるゝいたし遣すよし也支波も細川も名高き家の血筋かもしらすいかにも奇特なること也是は御藏奉行之神尾安太郎かかの人十五六年前に貞宗の刀をうりしとの話より前の事をも申せし也事實ならば兩人之家來は立派成御褒美もの也日本にはかゝること多し足利家のみるかけもなくなりし人を尋出して太閤殿下の養子たらしむことをのそみ乞れしに血筋もさたかならぬもの也とて許容なかりし也太閤殿下の御氣分に而養子たらしむことを望み乞はれ給ひ

し程なる夫を亡國の餘燼もなきまでになりし足利家の血筋等のことを以拒れしといふも亡國の君には聞も及はず士氣也六朝五代の人々に引競みて日本の士氣別段成ことをしる也

○十七日 昨夜雨夏の如し今朝風 昨夜根本地かきの醫師奈良見物として參りたりとて根本自書之奉札持參いたす無疑ものに付夫々宿等申付遣す○昨日儒者來りて禮のことを論するによりてわれいふは近く譬ふるに日本人に而も東西南北はしりて船をのる也乍去大洋へ出ては方角よくわからすよつて覆没する也西洋人は南北極の出地と東西の天度とに而天の大成もの三四十里前後ところへ番附をしたるわけ故いかに吹流されても直に立もとる也今敬誠仁などといひては大海のことし中々方角のしれぬ事也然ルを禮記の玉藻にあることく頭のかたちは直とあれば先頭を直くすれば克已復禮の一ツ故則仁にたとり附也是敬も誠も即坐に得るの術かとおもふよつて禮をおもしとすと答へき

否聞度事は
附此しるし
あるへし事
なき日記に
はなし

○十八日 晴又雪大にさむし けふ根本よりの醫者に逢ひよほと話等
いたし食事いたさせ相返す境奉行の家來に今なりし内藏之介方の書狀を民
藏よりもらひ歸る○きのふ龍介のかたにて歌よむものうちよりたりとて
梅花久薰といふ當坐の題を越して歌を乞とりあへす

冬こもり今ははるへのななき日にさかり久しくさくやこの花
とよみ遣したりおりふし雪ふり出ければ ならの大人たちのつとへる日
に雪のふりければと端書して

けふの雪といろあらそひて言のはのかをれるはなも木々に咲蘭
とするしたりしか當坐の席に加りしことくおもはれては迷惑に付清一か
たにさくにして龍介へ遣しけり

○十九日 くもり折々雪けしからぬさむさ也 正月己來召捕候盜賊共十
四人今日入牢申付ルうち十四歳之再犯ものかしらに十二歳之もの
盜せしあり可憐もの共也尤非人也賈銀札を眞物と少も不違をつくりしも

のありこのもの所持之内に聖徳太子の百萬塔或はまか玉夥あり盜物かと
尋みしにみな贋物つくりて人を欺しものといふ尤眞物もありわかちかた
しよつて罪人にみわけさせたり江戸などに此贋物多あるへしまか玉は瑪
瑙等を損せぬ様に火にてあたゝめつくり百萬塔はふる木を以作り障子の
棧にある塵とりて塔の水かけ置漸々に右をちりをかけしものと云みな廿
匆位にうりしと云名人の手きは驚歎せり

○廿日 晴のとかに成 けふは興福尼院の 大猷院様の 御靈屋に參る
こゝは大和納言秀長卿の娘の住職せしをあらはれとおほして 御朱印給
ひしか 御靈屋もあるなり惣門の外に寺役人籠箱に平服中門迄先立いた
す中門は役尼貳人先立也夫々本堂の前に住持出迎いたす 御靈前に案
内いたすこゝにては雜煮を出す家來末々迄も出る例也住持は 勸修寺宮の
娘也され共奉行の同間は不入例にて是へと云て同間は入也役尼三人に
給仕する也いにしへをおもへは互に雲泥を隔つことゝ密に 上は御恩を

難有おもふ也夫々眉間寺に參る 聖武帝の 御陵ある歌によむ佐保山也
至る見はらしよしこの住持惣門の外に出迎ふこと例のことしこの住持
なら中の學識ある清僧の聞ある老僧也東大寺を學頭をするといふ也前
も追々記す通歌よみに書をよくす兼る物語せむとおもひしかはいろい
ろとはなしみるに甚味ありならの七大寺の衆徒といふものは多く妻帶也
いにしへより然りやといひしにいにしへの僧妻帶の事ありとみえて東大
寺に曾祖父祖父父己と學頭せしことあり是はみな祖師の深意のあること
也よつていにしへは捨戒の僧ありて破戒の僧なく今は捨戒の僧なくして
みな破戒の僧也よつてますゝ偽りて佛法ますゝ衰る也いにしへは僧と
成て戒を持といへ共たもちかぬれば學文はすれ共表向て捨戒して女房をも
もち扱夫限に成も又持戒するもあり又格別の人に而始終持戒を立通すも
ある也今のことく幼年を出家させ賢愚を不論持戒さするといふは偽をさ
するかこときもの也とて夫々證を引てかたりきよつておもへは何とかい

ひし八坂の塔を祈しといふ僧に子ありといふことみえ日蓮か我一生魚肉
を不食妻子もなしといふことを誇良にいひしなと今よりはわからぬ事の
昔はよほど高慢なることかともおもふ也近く中坊を三代目の中坊美作守
といふは興福寺を出家に而尊教院の住職たりしか慶安の頃中坊飛彈守卒
て歸俗して父のことく奈良奉行とはなりし也この人延寶のころまで居た
れは近きことにて其外板倉伊賀守なども禪僧かとおもふ也・鷹見十郎左衛
門隱居國勝手之由申越候子細相分り候は、御申越可被下候

○廿一日 晴至るのとか也 ひる頃父上は庭の築山へ行てさ保山かすか
山のかすみを御覽ありて興に入らせられて筵を敷て御酒ありこのほと母
上は手の御痛なさるよし故我每天もみてあけしに大にこゝろよく被爲成
てかくも成しくるゝに酒のみてはいかにもわれに對してすますとて禁酒
なされたりよつて藥効ももむこともよくきゝしとみえて大に効あり右故
酒のむものは此ほと父上はかりに而おりゝおさとか小猪口にて二ツ半

分を度として折々御相手也酒はよほとこのさひれ也

○廿二日 曇 この頃御役所之舊記をみるによりて與力共か所持之古記録をもみるに南都奉行は已前興福寺盛にて大和を過半領せし頃同寺の衆徒々筒井順慶中坊法眼などいふ人つとめて其内中坊美作守といふ人寛文の頃よき奉行とみえて寛文三年御役 御免願けれ共御老中々勤向辛苦之旨尤至極なれ共當年の春日神事薪能は御たのみ被成間可相勤旨 御意に付御頼の廉に右之御用を繼上下にて勤たるよしみゆいにしへは人才を重し給ひしことみるへし其頃の御仕置物をみるに十二年に死罪五十四人かありいにしへはよく治まりしとみえし也軽くとして去年一年に死罪の者三十人に近し今は細に吟味する故に却而大惡のものはのかれて入墨再犯に二分か三分の事に死罪に成もの多き也去年のもの共に亦も賈金銀を拵其外實に重體に可憎ものは少き也去年も長吏共へこの度々のやしり切はあれ共召捕ものはみな可憐ものなるはいか成事かといひし

高砂 孫太郎
實盛 右京
定家 但馬守
軒端梅 八中坊長
五郎 兵衛助
蘆刈 主馬
西行 櫻馬
柏崎 但馬守
羽衣 新左衛門
左近 但馬守
果月 孫太郎
源氏 供養
但馬守

に長吏共いたく恐れけるよし夫故にやしり切の重科人を召捕來しもある也上方は長吏といふものに吟味をさせ其下はみな番非人にて番非人といふものはみな盜人の上前取也よき盜人の捕れぬはつ也○寛永廿年正月廿五日中午坊長兵衛宅に一乘院大乘院の兩御門跡を御むかへ申して御馳走せしことあり其日記に於中坊長兵衛亭柳生但馬守能被相勤一乘院大乘院御成能十番あり内軒端梅は長兵衛甥五郎八源氏供養は兩御門跡の御好みにて但馬守勤之とあり朱にて實は一乘院大乘院御和談に付施行也とあれは兩乘の争としふるくありしこと也この但馬は嶋原陣の頃も居られたる劍術堪能の但馬守なるへし正月廿五日の日の短かきに能の十番あるにていにしへの能は今よりも必下品にあわさのはやきものなるへし足利頃のおほはんふる舞の能などの番數も至多き也○ならに芳山といふ所ありはな山とよむ也春日山つゝきにてうくひすの瀧のある所也はな山といふ故僧正遍昭か居しはな山にも似たりこの頃よくみれば興福寺の衆徒六方か

たの支配山にていにしへは方山といひしにサを加へて芳山と成それを一
轉してはな山とよむ也江戸の新堀をにつほりとよみ日暮里と字をかえひく
らしとよむ類にて文華ひらけたるよりの偽也名所古跡に多ことなるへし
○廿三日 微雪 春寒甚しきのふより二十度寒し人のあたる筈也
○廿四日 晴 昨夜惣年寄到着いたす今日届物差出す 母上より被下候
鮭即刻とし出し謹み拜戴見事なること驚入申候味ひことによし大魚別段
なること半切にて給あまり申候 母上の思召かとおもへは新右衛門より
御丹精之體をも申越難有御事にあむさく〜と給候も無勿體しかし拜見の
みにて可止事にもあらずとて笑ひし也其外宗保作陵王の甲冑少もいたみ
なく相届くこの甲冑は見場はよからねとわか好みにて宗保存命中也われ
の所持とおもひ力を盡してきたえしと常にかたりければ秘藏の品也久々
にのみると宗保かことおもふ也こゝろ強きことし一笑也其外新右衛門幸
三郎等之書狀鍊作よりも同斷或は朋友等數十通故記すにいとまあらず雁

皮帔相届このけい帔にあらず白帔也所々より海苔來り御殿よりは 御上
り之御菓子來る少しながら勾踐の一樽の醪之例にならひて茶を煮候而與
力老分之ものは爲給候積也

○廿五日 くもり 御用日公事對決四ツ一ツは即日入牢に成○ひると夕
に拜戴の鮭を給る味よろし奈良に來りて殊に甘美なるかとしめつらし
き故もあるへけれと別段の大魚故あふらの多なるへしなと〜おもひ候○
根本の狀をみるに太郎か漸に口をきくとて新右衛門をはヲ、藤左衛門の妻
をレコ〜といふ類數ヶ條みゆみな西洋譯語のことし彌吉に似て口うとき
なるへし一ツの幸ひなり啞にあらずは口うときは君子の道に近きの一ツ也
○廿六日 晴 きのふ夕よりはる雨にてけき晴たり霞もはる雨もしくれ
も歌にいふことし上方之故なるへし・昨年の日記十二月晦日迄之分不用
に候は、便に御越給へよくとち置へし佐渡一年の分二冊きその分一冊あ
り奈良の分何冊になるへしやみな悉可集置とおもふ也○松永か墓所の石

をとりて多門山の城を築きしことはいひ傳はかりかとおもへは左にはあらすならの井上町に横佩右大臣當麻中條ひの御父の石塔ありしを毀ちほこひ行かむとせし時に俳諧師蘆中齋心前といふもの悲みて

曳のこす花や秋さく石の竹

心前

といふ發句せしによりて毀さりしと也此石塔短尺ともに今以德融寺にあるよし古記録にみゆ

○廿七日 雪ふる きのふとけふのさむさ大にちかふ也○吉野山巡見の義伺出るはなの頃二月下旬之由也みな行たかる也龍口幸助といふ雇の近習など召つるゝ積也

○廿八日 はれ 月なみの禮受ること例の如し○一兩日已來幸三郎が之鱸を給味よろしこゝには鱸といへ共みなすけと也眞鱸にあらすよつて殊にめつらし

○廿九日 晴 學問所の出精するものなきことを歎きて昨年中にも出席

多きもの貳人の褒美をとらせたり壹人は與力の末子也きのふ御用部屋に而被仰渡を覺しかといひしに何もしらすといふ夫はいかにといひしに紅の菓子のみをみ居たれば其外のこととはしらすと答へしとおもしろき事也○晦日 くもり 興福寺中院屋におゐて 文恭院様御法事有之に付先格之通長袴にて參拜○與力共か御仕置伺事案出せしにかるた博奕とある故に元來かるたは博奕にあらず既に何十文以上に候はゝ博奕に淮するといふことのありて評定所などにてはかるきかけの寶引よみかるたは博奕とは不申賭錢により差別あることよし加筆いたし遣し候處關東にてもかるたを博奕を唱候由に寄場のことをしるせしものに都あかるた博奕に候はゝとあり候歟に而根岸小田切り頃の書物の古き抄書にみえ候又安永の頃牧野大隅守か町奉行之時通一丁目太郎兵衛外三拾七人之もの答に相成候義を覺書にいたし候もの有之其申渡に今般めぐりかるた札と申候新規之博奕に相用候品を商賣いたし候段と有之候されはかるたを博奕にあ

らすとは難申歟といふ故によくこそ穿鑿はしたり予以前夫ほとにはしら
さりき乍去三奉行にてめぐり博奕かるた博奕なとゝは不申元來かるきか
けの寶引よみかるたと申せしものは今の兒女子か春のうたかるたにするむ
へ山風をあらしといふらむといふ句を第一として月歌戀ふなとゝいろ／＼
の號を附てかるた札の多少を附勝負をあらそふことあり然ルに享保の頃
いたく博奕を御制禁ありて誹諧のけい物といふことにまで紛敷事いたす
間敷里は町觸も有之世に知るところ也よつて今いふむへ山にも錢を以す
ることを禁せらし^{れ脱}なるへし然ルに夫はまた百人首の歌は用ひけるを安
永度にいたりうたを不用してあひ印の類をつけてかるたに用ゆることの
被用て大隅守か懸りにて咎にも相成しなるへしはしめは百人首をよみて
とる故によみかるたといひしを歌をよめぬ者にも出來ること品出來
てふせ置て引へかすかことくにして合印を改みて夫をはめぐりといひし
なるへしめくるはやねをめくる衣類をめくるの類にて卑諺なるへし夫故

に古くはよみかるたと言なから近くはよみといふはなくてキンコテンシ
ヤウなと唱のみなめぐりと云てよむことのなきにてすむことの行ゝな
るへし夫は前句附より冠り附となり夫を字をきり出して夫は錢をはるこ
とを三笠附といふに至る類なるとおもふ也つまり事に寄て錢を攫するの
具にて賭をする上は劔術にても槍にても同じことにてかけま^グ孔子ま^シ
にても惡敷すれはみな博奕の具にせしといひきかせければ然らば博奕は
錢をとることの名かといひし故に論語孟子にみえしは今の圍碁のことな
れ共莊子に博塞して遊ふといふことのありしかと覺へし陶侃か樗蒲は牧
猪奴のいひしところか今の博奕といふものに似て全の圍碁にはあらぬか
ともおもふ也かく云序故に申すかかるたといふ辭西洋か唐土の辭に似た
りしかればふるく異國の名を用ひて歌かるたを用ひしを開けたるに従ひて
異國のものをも用ひしか馬といふことなど元來博奕にからにていふ名なり
其外遭厄日本紀事のうちに日本人のめぐりをするをコロウインかみて

わか國よりわたりしといふことのありしかとおもひし歌ならば色帯短尺の外はなきを方寸の帯を以扱ふは異國のものかもしらすと答し尤みな以上は空覺のはなしなれば誤あるへし書物をたゝして答ふへしこゝには書物のなくきゝてしらへさする人のなきにこまるといひてやみき評定所勤の時かく細密の論せしことはなきに不思議なることにおもふ故新右衛門かわらひくさに記すなりこのほとこの與力の三十以下位のもの共至出精にて御仕置の議論を持出し品々理くつをいふ故にかゝることもある也○歌かるたのこと古くあらは源氏物語或は春曙抄などにもあるへきにあるかはしらねと覺へすあるならば源氏にかならずなくてならぬもの也今も京都など其外貴人は歌かるたをツイマツといふかと覺へしツイは對マツは待にてかみしもと一對することをまつわけかいかにかゝあるへきかるたのこと并猪口といふことなど外國の辭に似たり猪口も盃土器の外の名也チヨホは樽ト蒲を用ゆる故に漢語のまゝを用ひし也白魚のチヨ

ホも二十一尾ある故篋の目二十一あるによりかくいふ也丁半といふものは骰子ニツ三ツチヨホは一ツ故白魚をかくいふか○評定所留役に留役風ありこれ儒者に書生風のあると同じ留役に留役風ある故に仕來くつれす儒者に書生風ある故に仁義地におちす留役に留役風ある故にことにおし附理くつあり儒者に書生風ある故に今日のこととうとし一得一失也われ篋博奕とかるたの辯別せしは又しも留役風を出せしと深く恥ちおもひければ一旦は書面を直したれ共文段の末のことに既に公儀にて御貪着なき故に今まで濟來り候事に可有之候直し候は不宜候先格を通たるべくよくこそ押返して言出たれ出精の程深く満足するよしを委細にするして如元何文かけのめくり博奕と直したり日々氣を附なからくせはとかくに止まぬもの也可恐こと也事は違ふなれ共伴團右衛門か加藤嘉明か方に居し時汝は采をもつことのならぬやつと被申水野日向守を東照宮の鍵を持ては大名にいたしかぬると御意のありしことを常にこゝろにかくれ

ともやゝもすれは馮夫か虎をうつくせ出て一騎前のことをしてはこゝろにはつる也漢の名將の衛青は匈奴をはらひて地をひらくこと千里なれ共其ことをみれば沈靜謙遜にして汲黯のこととき賢者に下りたるのみにてはたらきはなし和李廣は漢の飛將軍とて虎とみて石にたつ矢のことの類今もかたり傳ふることの多けれ共いつれもはつかに小將のわさのみにて多くは一騎前のこと故一尺の地をひらき天下のためになりしこともなかりし也下役を出しものはつとめて手を下さす心を遣ふやうにすへきことゝみつからいましむる也

○二月朔日 けふは巽にあるいなりのまつり也のしめ麻上下家來はふくさ麻にて庭上の木戸より南のさくらうゑある馬場通を行ていなりの參拜いたす今日いなり警固の同心貳人御入用方之同心壹人用人給人近習中小性供いたす也庭内の事成に隨從のもの七人也是遠國之故也獻備もの百疋

也御役所附之町人共よりいなりの奉納之酒野菜共よほどあり酒は壹斗も其餘もあけることよしみな懸り同心共うるほひ也相應なる煮しめ八寸の重に而夫々の遣すよほどのさわき也與力共も酒并立派成さけ重を奉行に差出右に付金貳百疋遣す先例也庭さきに馬見所かてらの物見ありその前の假屋出來て市中の者よりいなりの奉納のはなを生る家來之内新介平吾など活はなのことは功者に付慰にかりて活しよし也けふは兼而禁酒を休む積故庭の芝原か或は右之見物所春日祭の時の高麗縁のたゝみを敷立派に成たればそこに酒可給とおもひしに九時を俄に烈風大雨にてみたひまで電光地をてらし迅雷鳴わたりければ中々其沙汰に不及儒者よひ古人を評し經義を論して日をくらせりけふは強飯一石余ふかし蜜柑二分程まき遣すことにて右之手傳として町人共來るこれにも酒給さするみな先格也幸ひしにて七時頃雨やみければ同心共取計に而御普請小屋の鋸屑をもち來り馬場の敷てそこにみかむ赤飯等を投與へし也昨年の冬は

多人數なりしかけふは百人はかり漸也日くれて御隠宅に御參詣用人共御先立いたし雨天故近習中小性共御手をひきかさしかけ奉りて御參詣也○夜四頃になり宅狀來るみな御機嫌克と御事に十一日御返事也太田備後守殿御隠居被成候を被爲召候御目見と事恐悦御事也この人温厚長者なりしか先年俄に御隠居われなどは殊に親敷かりしかは惜み奉りしに目出度事也

○二日 強雨又晴又よほと雪ふるきのふは夏の雨の如くけふは又雪けしからぬ事よつて下女などに少々の病人ある筈也おさと一昨日ける時候よからぬ故か正月中に二度ける也しかしきのふは快かみをゆひていろくの世話いたし平日也けふは少々つかれたりしかし臥ほと的事ならず○太郎いたつらをするよし手荒に徒して驚はかりにて早く止はよし子供の更にいたつらせぬは病者かおろかものか多き也しかし嚴敷制止ありたしある人の密にかたりしは一乘院の宮は御幼年の節日蓮宗の本

山の御住職のつもりにも御客分同前の小僧にていらせられしにけしからぬ御いたつらにて講中の町人共糞汁をかけとなされ大にあはれ給ひけれ共王孫の御事故すへき様もあらずけふは返し奉るへしあすは返し奉るへしとて困り居けるうちに先一乘院宮の薨去に付御取返しにて御住職ありし也今もその時の町人等に御機嫌伺に出るものあるよし也門跡中に誰も及ふものなく關白殿下といたく御感心のよし也御勤行もよろし家司共か取扱にて美童を御近習に奉りしにけしからす御意を損し早速御暇になりしよし也可惜御人也奈良中にも上野にも此位の僧あるましみな人の歸依するも尤也○けふ旧記をみるに槍術のかまやりといふものは寶藏院胤榮か少々はかり十文字とかまとを遣ひ得しに關東より高野春日へ詣に來れる成田大膳大夫と名乗し旅人を止宿させてそのものより教を受しよし也晩年に至り表九本眞位六本總十五本のかたを以弟子を取立松永かたへ被招て十二人を相手にして勝しより世に名高く成しよし也此人慶長十

二年八月廿六日行年八十七歳にして没し其次の住持その時十五歳にて胤舜といふか繼けれ共鍵の出來されは同寺の從者猪兵衛苗字はなし從者とカ至つたなし中間位胤舜の後見にて教へ此人の代に初苗字はなし從者とカ大猷院様の上覽に備へし也この人うらのかたを作る五本六本合と號す十一本也正保五年正月十二日六十六歳にして卒し今の院主又やりをよくとあれはその頃記し置しにて其末へ元祿十四年胤清行年六十六歳にして中風にて卒するよし附札をして置たりされは以上之趣は古き書に二代目を去こと不遠ことなれば偽はあらし胤榮十文字鎗を寺へ残すつもりに金房隼人正實をして作らしむとありこのやり今なし正貞のきりものゝある鍵一本あり予所持の鍵と合せみるに同作に中心より穂かまとも一毫の大小を遣はす作りありしこのやりをみしは舊年の日記と合せみるへし元書には成田と胤榮竹刀をとり立向ひしはかりにて十文字を捨て教を聞かむと乞ひしとあり成田か歸りを送りしに門外百歩はかりにして晦跡せし故胤榮奇之

とあれ其末に胤榮成田か恩を謝せむとして關東へ下り尋ねけれともしものなし胤榮益奇之とあり前に消失せしことくかきたるは文華に人には無紛あやしきこともなければ關東へ行て尋ねし也胤榮かみか月のかけをみてかまをつくるなといふ今わか流義にいふは取にたらず三倉に唐よりわたりし鎌やりすやりあり是より工夫せしものなるへきか

○三日 くもり 穢多に似たるものに甲州に力者中國に夙といふものありと聞しか力者は全陣中之鳶の者の類に甲州にも不限關西太平記などにも今も毛利家の仕來などあるへし夙は元來 天子の御子に癩病の御かた被爲在候か捨られて其寺等今以ならにあり血筋のよき穢多之類なり其次第古書物奈良にありけふ初と號すしりぬ

○四日 雨 御用日金公事裁評八日初對決の金公事七日本公事一口早ひるめしか八半時迄白洲に懸る○けふ薪能の日傭の前金三拾兩相渡驚歎内譯をよく聞にか六尺其外末々の日傭等惣人數九十八人七日分にて七百人程

ひるゝ夜の懸る也ならはいなかより日傭前ひろ買切也全江戸之松之内同様也何も高料にはあらず其外諸雜費はいまたしれす三四十兩かゝり七日之間のしめ麻に能をみつめとはよき御仕置也能をみるさへに公家衆は御仕置のうちと思はるゝといふはなしもあるに三拾兩四十兩かゝりては御仕置も御仕置立派なること也民藏か小わけ書を持たなから如虹息つきしも宜也けふは大雨也

○五日 雨 けふ万葉集をよむに人麻呂か石見國にて死せる時

かもやまのいは根しまけるわれをかもしらすといもかまちつゝあらむ

人丸の妻

けふくゝとわかまつ君は石川の貝にましりてありといはすやも

丹比真人か人丸にかはりてよめる歌

あらなみによせてくるたまをまくらに置我こゝなりとたれかつけなむ
こゝにいふ鴨山石川みな石見の山川也しかるに大和添上郡櫛本村

村に人丸つかありうたつかといふ審に前の巡見の所に記すこゝのこと藤原清輔鴨長明など疑はすされ共万葉集によれば議論もなき偽也しかれば偽も五百年六百年のことにはあらしたしか名所圖圖には大日本史を引て偽を辯し置しかなれ共此うたの事はなしと覺此うたによれば岩根しまきは岩根をまくらにする事にて石川の貝にましりといふことあらなみによせてくる玉をまくらに置みな石見國にて葬らすはかくはいはぬ筈也偽なることよくわかる也たしかに聞ゆるものかくの如し其余の名所に欺かるへからす○けふ兵要録をみるに十五より段々と水戦のことを論したり澹齋翁兵要録を書しは徂徠の鉛録より古し勿論西洋のことなどはおもひもよらぬわけなれともこゝろして認置けり新右衛門閑暇の時兵要録口義或は筆授之内一覽あるへし長沼流の軍學者にたよみみるへし口傳のことまた口義筆授にはある也口傳といふは一向にわけもなき錢取病のはなしなれ共口義筆授によれば夫もわかる也疵を論せず入用計穿鑿あるへし

○六日 雨又晴 此ほと鹿のことに興福寺の旧記をよみ三くたりはかり不分明の事ありてこまる故寫あやりとおもひ本書を持參候得可讀合と申せしにこまり無據持來れり旧記といふものも紛敷其上右之旧記を今般了簡にて所々書改しもの也大和第一の寺院にかゝる事有之寺の旧記等取にたらぬ事也○あひるのひな大きくなり親とりにさかり附て雄のひなの大きく成たるをいためてみるにたえずよつて子とりのかたは別にめとりと一つかひしてわかちおき親とりはあまり荒るゝ故にかこに入置ひなのかたを放ち置しにひなの雄親を慕ひてめとりをはなれひとり親とりの籠のもとに來りて不去頻に親を呼也あまりにて不便故親を出しみに親の子を啄みていためることきのふのとししかるにやはり親に附歩行也大に感ありて涙を流しぬわか方に飼ふあひるの孝なるにや元來あひるといふものはかくの如きかしられねともこの鳥希にかくの如くならば御褒美ものなりとて市三郎などへ示せし也

○七日 快晴至るのとか也 けふは薪能の初日也元來ならの地割をみるに興福寺を真中にして夫々四方の町をわりたるもの也大造に言へは興福寺はならの御くる輪にも御築地にも當る也其南大門といふは大手の如きところにて猿澤の池に臨みよほとの高みにて山々大和河内等なるへし波濤のうち廻したるかことく所々の寺社はうちつゝきたる耕地の内に海上に樓閣を構たるかことくみえよきけしきの所也其南大門の外に大成芝地ありて猿樂ある也其はしめは鎌足の大臣か母の追善供養のため興福寺に七日の大法事あり其時の衆徒を慰の雅樂ありしか流れて今も猿樂あるとなら人はいふ也今日を十二日迄也例年かくの如し青氈の如き芝地故何の敷物もなく能をする也樂屋橋かゝり等もなく大夫共衆人の往來する所にて能裝束する也これいにしへ振なるへきかこの芝地に居てみる故に芝居といふなるへし興福寺の衆徒共は南大門の正面石段の上に立なからみる也兩御門主は石壇の上に敷物ありみな屋根なし奉行之見物所は見附の

この埒に古口
を開けしけ
式ありはの
は能いふは
めるといふ
明もいふは
しめるとい
らの人もい
くらかには
くらふもい
くもいふは

大番所程にちとり置の板つくり也紫ちり緬のまくを打高麗へりのたゝみを敷五尺はかり高くしてあり休息所等金屏風にち出来あり奉行を見物所之脇と前の近習のしめ麻にち壹人同心共紋羽織にち前置をする也與力は土間のたゝみを敷見物する也埒を結其外はくらかけとて全にひな段の大成ものを作りて見物の雜人共上り居る也兩御門主并奉行之前へ不敬の譯なれ共是も又古よりのこと也奉行今日の供立は先箱にてだて道具二本鍵二本にち例のよやまかせ也わさく廻りみちをして南大門前をねり行也九半時之出宅にち夜五ツ半時に歸りし也凡の體先ツは御祭禮濟後日の能の時に記せることし一體奉行は取締一通の事故かくするには不及事なれ共是は中坊か衆徒よりなりし故なるへしならば今以中長といふ合印を用る是は中坊長兵衛かはづひ也といふ也このわけ故其頃の仕くせ大にのこり居る也しかしおかしき仕くせのこときことにち最初によく治り衆徒之内を奉行職になされたとはいふは深き 神慮あるへしとおもふ也これつ

まらぬ仕來に手のつけられぬ所也けふ同心共前置に居り其外與力共か出迎平服する體をみて藤堂高虎か話に士か士を仕ふ是時の仕合也とあり實にしかり代々の御簾本の方々は別段のこと我等かこときものは難有この下坐するうちにもあるへき也されは與力共をはしめ庵末におもふへからす且士か士を遣ふは難有事也と 御恩をおもひて落涙せし也この高虎の話同人の語録也開卷第一に寢家を出るより其日を死番と心得へしかやうに覺悟極る故物に動することなし是可爲本意とあり實に高虎などの説なるへしとおもひこのほとよみ居る故に前のことをもしるせし也役人も御役替の當日に必仕くじるへしとおもひ其一念少も日々不怠はよき役人にち易に危きものは其位を保つもの也とあれは無申譯ことはあるましき也○けふの能に付土地の體をみるに土地の者甚敷たのしみにちおもしろくおもふ體也今こゝへ芝居の江戸のことくなるものを聞らき一年もしてみせたらは能の見物所には必ずしめの巢をまうくるわけになるへししかる

をこゝのものは樂みてよる歌をうたひ江戸ならばド、イツとかいさみかいたこそゝりふしといふ所を謠をうたひなからあるき大工の小僧かめしかこの棒に熊坂を舞ふ親かたか叱る其親かたははなうたのかはりに高砂をうたひなから板を削て居たと珍敷事也この頃は中番か淨瑠り本なけれは謠本をよむ也いなり祭のとき出入之町人之内酔たるか羽衣を舞ふと小つゝみ大つゝみのかけ聲を飼葉や八百やなとかするといふわけ也江戸ならば立派なる人かよりもデックを歌へは井のはちをたゝきてこれを和するなとあるましきにはあらず一代の樂をつくり大成垣根をつくり其内にも樂ませこゝろをとらかすことをさせぬといふといふは深き智恵也けふの歸りは奉行につゝき用人と與力共みな四ツ供のしめ麻に而行列夫を數やり三十本夫を同心共みな川路の家の合印の箱挑灯ところ／＼にきつこう三ツ星の高はり也けしからぬさわき也日傭賃はかり三十兩のひかりいちしるしされ共騎馬ならぬみつつけの交替とにきやか成葬式とをかね

たることししかし一年に一度のこと故夫を見物とて興福寺の山内の道の左右夥數人也ド、イツは深川をはしまりいたこは下總のいたこデックは越後の新潟みな船頭うたなるへし

○八日 くもり夕雨 薪能の場所の參候三番叟すみ西王母の能なかはにて雨ふり出て止めに成こゝの能は雨ふり出て芝の半昏を敷三枚丈地より染上り候を度とし止ることのよし今も雨上りにはこれを以ためし夫ほとならねは銅のたらぬへ火をいれ芝上をひき歩行て能はしまるよし也けふは與力共傘を手に取ると止に成たり是は與力の傘を已前さしたるを六ヶ敷衆徒共の申せしかとも雨ふる上はさすとて六ヶ敷成よつて與力のかささすをいとひてとく止ることのよし也衆徒は決あさゝす敷物もなく立なから能をみる也かゝること一分違ても六ヶ敷奉行之挑灯の附かた等六ヶ敷ことあり文化の頃を所司代御預置也

○九日 雨 けふ古梅園を薄紅梅のはなをくるゝつらゆき梅といふ短尺

を附たりこれはむかしはつ瀬よりわか木取寄てその頃の例にて奉行の花のころ差出すことよし古今うた集にあるつらゆきかはつせにまうて、梅の枝折て○人はいさ心もしらすふるさとはとよみし梅の種なるへしこの梅によりて古梅園の號ある也古梅園には有徳院様より拜領の墨譜靈元院法皇の被仰付たる墨の形其外の古物あれは旧家なるへし俗稱は増井益五郎と申奉行表居間にて禮を受るもの也梅のけしきおもむきあることなればとりあへず

こもりくのはつせの春のいにしへを今も匂ひてさくやこの花と書て遣しけりこもりくはこもり國といふことにてはつせの枕辭也万葉に所々にみゆる也

○十日 くもり けふは晝は春日の神前能夜は薪能也○九時を神前能に出る例のよやまかせ也春日の境内に一乘院御門主の御待合所あり但馬屋といふ松の屋は將軍家但馬家は近衛殿の御待合のときもの也といふ今

は名のみ也しかし御玄關に翠簾をかけ惣高麗縁のたゝみ敷たるところ也こゝにて待居うち與力を注進に能役者共之揃たるよしを申即罷越右之道は肩輿にのらす大宮の前に御役所の出入之社人貳人淨衣に烏帽子中啓にて沓をはき出迎いたすそこよりわか宮の神前二町はかり前よりよやまかせに奉行歩行故これみてくれに鑓を投長刀もちの足脇をあゆむ驚前とり馬の足よりも甚し元來下乗するところ故に鑓爲持はあたらすこれも仕來也かゝるものをしらぬ事遠國奉行之勤向に多しこの邊は御門主にてもちりとりにめす所也みるもの山のこゝく鑓持等か尻をふる實に噴飯の極なれ共衆人堵牆のことくにみ居たれば笑を忍ひて行也若宮の御神前に平日神女等かつめ居るところ今日は奉行の出席所となる檜作り檜わたふき也 御神前と五間はかり隔つ 御神前には千鳥三位其外圓坐のを敷ならへ列居いかきの外には淨衣の社人共數十人並居たり其體神樂のうたにいふあか星にても可謠様子也可惜舞樂にあらすして猿樂也紅梅の咲亂

れたるに其もとに社人の並居たるみやしろは六尺四方はかりにて拜殿もなく檜皮ふきなる體いかにもいにしへふり也是は關東にはなき事也其五間はかりの御神前と奉行は向ひ合に而其間に而猿樂あればわれと顔を突合するかことくにてまはゆきこと也よつて語りなと手にとる如く也はしめて猩々の謠曲をよく聞し也海獸のことくに作りあり昔よみしこと故忘れしか後漢書の註にも詳にありしか山獸也近く左太仲か三都賦のうち蜀都賦に猩々啼てキンニツキこの字は忘れたり萬々^ヒ笑てカクセラルこの字もわすれたりといふことあり其外時^ト有猩々樹上啼といふ詩もありしかと覺へしか何故に海獸とはいひしや今とかくに猩々の畫になみを添ふる其みなもとほこれなるへきかこれも猿は聲のよきものにて右の蜀のみちの船路にそふみねにてなくを聞て詩によく作を日本には猿はあらず猴はかりなるを猿の字を用ゆる故に同物かと古今集にも猿巫峽になくといふ歌題にて歌のあるよりよくさるの啼ことを作れとも春日の山に今日などは

五十も六十もむれ居しを家來等はみし位なれとも鹿の啼とちかひ誰も稱するものなく歌の題にてきゝもせぬことをよむ類ひにて古くあやまりしもしるへからず猩々の謠曲も誤をまた傳しものかもしらぬ也○^{今日}けふ西本願寺ならに被參給人出迎に參る是も先例也町々に而一向宗のもの多ければ所々に而末廣かたの板へ青とさをはり其上に小判をならへて平服するもの多し穢多町に而さへも二十兩納しといふけしからぬ事也今周公仲尼か奉加帳をさけ歩行かれても儒者共穢多の十分一のことはいたすまし聖人もと無欲にて施を好みわれに必みやけあるへしとてまつかもしらす夫におもへは親鸞は利口もの也肉食妻帯と錢になるをは八宗九宗九のみのかうてんこんりうの賣僧共みなうらやみて公儀の御仕置をもいとはず日蓮宗などにも余宗に而も密に一向僧を學ふは多き也奉行には銀三枚用人は三百疋宛出迎の給人にしたく代まで被下と之事に而あみたまは錢ほと光るといふ流義故歎人々もよくくれる也元文二年の例也奉行も

酒一樽に干鯛をまいらす事也其上旅宿に参り謁見いたす其節御茶を被下是又元文の例也當年は所々大和遊覽に上かたはら錢をはき取給ひてさくらの頃吉野遊覽也さかりは同じ頃なるにわれも巡見に参りては村々の人馬難儀いたすべくと當年は吉野はやめにしたり西門の御かけにて三十兩はかり來年の送りたり其上前文に通なるほと人々の信仰するはす也一寸ならぬ來向ありても右に次第さても難有御事也○一向宗のこと昔は東照宮の神智にても御困り被成たることなりしか段々と御德にて道開ければ士以上には今は一向宗を主人に見かへるものはなきなり中坊駿河守話に同人日光奉行に時東門の日光に被参て外の國々のことくすへしとせられしか日光はさすかに神の御德を奉仰ておのつから身に染居はたれも一錢も出すものなかりしと也民を教ふるは常の無事の時に身に染させ置は大事にのそみ役に立也こゝろに主とするところあれば悪事には流れぬ也無事の時の民のこゝろはうちに善心ありて溜り水のことし夫を善

と欲とを以道を附る故に一向宗によく流れ隨ふなるへしよく常に教ゆるときはこの邪教になかるゝ患ひなかるへし常の教大切也九月の節句を見かけて菊を造る故に仕かたなし○西門にては穢多非人にあも浄土に彌陀の本願にて御引取なさるゝとて錢次第にては坐敷へ通し平人同様也と也よつて穢多共このほと附従ふこと雲の如し

○十一日 晴 きのふは 神前能七半過にすみ夫々南大門の薪能はしまる九時過迄かゝるへきところなりしか衆徒共かあまり深夜になるをいとひて祝言を用捨したりよつて四過に家來共歸りたり○昨日終日の能に勞れて無餘義今日は風邪也われ南都の能をみるにこゝをもつて根本とする故に四坐の猿樂共も参りこゝへ参らねは三番叟はならぬことなれ共みな名代のつもりにて土地のやとひもの也よつて禮儀甚わるし三番叟を長權頭か職としてするなれ共辻萬歳には遙におとりつゝみの音などは居候かたゝくよるの戸よりもかなしくつゝみの緒なと越中犢鼻のさなたに似た

り下には木綿の紋附にて事すめは能の場所にて酒又は團子などを賣るといふ也江戸などには翁三番叟は精進別火に御目出度御能ならてはなきといふ御法なるに前文之次第也狂言師共かする翁三番は江戸に似たれとも一ツの面はこへ面をいくつもいれすゝも同しくいれ來り坐へ出てより段々ひろひ出すと其内大夫か咄なるといふわけ也尤大夫も狂言師も兩人宛出て一度にする故に貳間に九尺の間へいりかぬる故なるへきかよつて面はこもち一人故かゝる不手際出来る也尤面はこもちか居附にて三番叟をする也其余右に准すれと一天四海にならの猿樂ほとこのことはなきとおもひ居る也○温泉の内に冷暖半々のところあり兩方共に魚のすめる也もし過ちにて互に所を替は死する也遠國奉行のこゝろこゝになきと人氣を傷ふ也

○十二日 くもり 西本願寺之御旅宿に參る面謁あり從來之世話よりこの度の挨拶等ありて手つからつゝれの錦のかみいれ烟草入を賜はり退坐

ありて菓子を賜はりたり右は前後の奉行之例にはあらずわれは調役のとき頼の故を以との事也歸宅後腹瀉に付能くは不出○ならの極樂院といふは御朱印地にて誰やらむ忘れたり空海とか行基とかいふ類の高僧のすみし寺に其時のまゝ庫裏本堂等尙存してよほとこのよき寺也其寺より今般助成の爲わらひ開帳いたし度と之書面を以願出る江戸にてはわらひ開帳といはゝ男女犢鼻を脱し衣をぬきて本尊にても爲拜ことくおもふへきこと也よく聞に左にはあらずたとへは弓削氏の旧物也とて帳を開きみれば大成すりこきあり光明后をいつき奉るといひて大成摺鉢をみするといふこととき古きくさ双帯にてみしとんだ靈寶といふことを實物にせしことゝみゆる也何分聞届かねて諭し遣したりいなかにはけしからぬことのあるもの也このほと東大寺の開帳にて二月堂并大佛などみな寶物をみせ例の三倉にある 勅封の外は來月よりはみらるゝことこのよし也しかるに大佛はむき出しの男故開帳にはわらひ開帳にてもする外なしよつて結縁の

ためとて大成足しをくみ大佛の膝の邊迄人をあけみする也是は旧例也よつて參詣の人々あらそひて大佛の體にある琴をとり行て護符にかゆるとの事也この二月堂といふは天平勝寶年間二月朔日十四日まで法會あり今もなほしかりよつて二月堂といふ也十三日には大松火をともして堂内を歩行也都るこの半月はかりのうち參詣の人々松火をともしつらねいは火を麓末にする法會のことし遠州の秋葉祭に松火に火を附て人のうちへ投込といふ類也決して火事にならず人の身につきてもやけとにならずといふ也きのふ父上様の薪能御覽に御出にて其歸るさに其體を御覽膽を潰し御歸り也凡二かへほどの松火を作り居たりとそ十二日の夜には其松火をともして堂内等持歩行可恐體なれ共決り火災にはならずといふ也され共元祿にはこの二月堂焼失せりその時のことを記せし與力共か日記をみるに火の中よりやけ鎮まりてのちとり出せしに本尊の觀音一てんの疵もなく手にもちし念珠のふさ迄もやけす空海かしるせし木板のたらに

聖武帝の震筆の經文等是又しかり其こと關東へ聞けあけしに桂昌院様々御普請成し被下たるよしを記しありし也空海か木板のたらには奉行巡見のときみする也字のところ残りて外は少しつこけ居たり其外のもの火災のけふりに逢ひしまの物をみせしかと覺へし也この堂にこの靈あらは本堂の火災なからしめむ様にはならずや本堂を焼て本尊等はのこし其靈をしめせしものか金井伊大夫か御小人目付の時日光大樂院の御焼失あとの灰をか立合に行しに灰のうちより法華經一部何のつもなく出しかたりきまことにや三嶋下野守か日光奉行支配組頭の時にて御寶庫に火のいりし時に人々あれよといふはかりにてせむすへなかりしに日光の神人下野守に向ひあと目はよろしくといひさま火の内へ飛入て東照宮の御指の御小サ刀等勝宗 宗光兩作りを取出したり今一度いらむとせしを抱きとめてみなくまでといふ辭も畢らぬに其御くらはやけ落しと下野守か語りし也我其ことを聞て神人はいかなりしと承りしに

御褒美として金子を被下候といひければ大坂の御天守の焼けし時中川氏築土に住すもと御腰物方也 東照宮の御馬印をもち御天守の上より飛下り即死して御馬印を全せし功に其子に三倍の御加増千何百石にか成被下候例もあるに國家にていにしへより死士を多く養ひ給ふ御ことなるに金子の御褒美のみてかの神人の朽果てむはいかゝあるへしとあるはなしの序に小田原の侍従へ聞へあけしに彼朝臣の内々おもふ旨のありしよしなりしかその二年前に神人は運つたなくして死せしと聞へて其ことやみし也ならの旧物七大寺のうち佛法最初の法隆寺は少も火災なく今なほのこり其外に焼ぬはなし唐招提寺薬師寺などは至近く焼し也元興寺の塔日本塔のはしめ是又人家のなかにて今につゝかなし

○十三日 雨 けふも薪能なしみなく大悦也雨のふり出すをみてけふはよき天氣也とてよろこぶもおかしき也民藏云このことはつか二日ならは人々争ひて行へきに七日といふにてかくの如しといふ電光の長くひか

り居たらむにはよはひ星といはるへけれとも一瞬の内故人々恐るゝ也味あること也

○十四日 晴 けふは能の畢なれば樽井町といふかたをわさく廻りみちにてよやまかせに御行也大笑也され共奉行を見物にて人多くいづる也奉行を風邪に御出席なければやたいみせの食物賣れかた半分也といふ也遠國のこと實に江戸了簡にては不行仕來の改られぬわけ也前に記す通三十兩日傭の前金を取なから日傭の挑灯もちなどはみなわかしゆなと也けしからぬことゝおもひて與力共のつるゝものをためしみるにみなしかり春日の御祭禮のとき數鎗を持ものけし坊主などを出すそれを巍々堂々たる御祭禮近國近江の者見物として出る所々遣ひさらに怪まぬと云風俗にて與力共か下女の四五人も遣ふといへは立派なれとも御祭并能の時に侍をつるゝに十一二才位の次男三男をつるゝ子供多きものは侍貳人もつれる夫は五寸はかりのかたあけ腰あけのある羽織をきて御三卿の貧きし御

けふマヌ來
る小なるも
一の貫八百文
尾

近習番のさふらひより遙に子供にて見くるしきのかきりなれ共從來それにて濟は子供もうれしかりて出る也徂徠かいふいにしへは前髪のあるうちは主人の草履を取前髪をとれば家老と成といふことく仙臺家にてはせじにて手廻り其外一キ半キの一本證文のものを多くつれたかるは近きことととかいふことの政談のうちにもありしかと覺へしか也この振合なれは江戸の與力もくらせる也五人の下女みなはた織女にてもち合にて馬をもち火事あればのる人もらぬ人もあり平日はもち山より中間か薪を乗馬につけてくる也みな笑へきかことくにて笑ふへからすこれいにしへの武士の風也與力といふものをと 御城より二里ツ、もある所にさし置れしは江戸の開けぬ時に前の風都合になりしなるへし友野霞舟翁の御話に杉なみの與力門前にて手負猪を切殺せしことありしといひしはさして往昔のことにてはなかりしとある老人のはなせしと也○きのふいかを求たり一ツ五匁也されと肉の厚サ壹寸ありて父子妻うちより二度の菜に成

一度五分ッ、也

也佐渡なら
は二十八文
なりとて中
番のいかる
もおかし中
もおかし中
番等はなま
魚を食ふこ
となればは
也

たり佐渡にてはいか十に三十三匁文なり味なく肉貳分はかり也壹人にて三ツを食ふへし十にて三十匁文もいか一ツ五匁のもいか也海の様子による也風俗地をかふればみなこの類なるへし廉頗か趙人を用ひむ事をおもひ戚南塘か江南の人を好めるなと韓信か市人を驅て遣ふといふよりは不足なるかことなれとも謂なきにはあらし○順右衛門かたにて昨夕出産よき男子をまうけたり其喜するへし至る安産也昨年彰常没し敬次郎生れ貞助順右衛門か方にち男子生る一生一死みなこの理也

○十五日 晴けしからず暖氣也 昨夜は蚊少々出る今日など往來は裕にて汗出る位なりと云○西門の學僧に大岩又鳳岩ともいふ人あり皆川淇園か弟子にて書を廣くよみしものよし也西門の末寺に住職して學僧になりしよし也この者常に歎して申せしはわれ今西門の僧と成たれば云ましき事ながら 御國恩のため友に物語也一向宗といふものは漢末の黃巾明末の白蓮に似ておそるへきことのある也 御國恩おもひて政にあるもの

この徒の力を減することなくは何その時には大害なるへしと常にいひけるとなむこの人はや死せしなるへし○甲州より月の雫といふ菓子來れりこの地にてはめつらしきものにてわか食せむもむたの事也とおもひければ 甲斐人かつくりし月の雫といふ菓を宮の御内人まで奉るとて といふはし書して

かけ高き雲井の庭に關なくは月の雫の甲斐やあるらむ

と記して爲持奉りしに 宮のことに 御感なりとてくさ／＼の御稱辭ありし也かしこきこと也是も關東のひかりを奉仰故にて難有 君の御恩也頃日も西門の家來をわか方の使者へわかなのりは何とよむと聞しかは珍ら敷御問也とて尋しに西門は我短尺を御覽にいれし人ありて 御感ありて名は何とよむと御尋ありしかしる人なかりし故に問と申せし故に答へしと也わか加冠の時母方之祖父高橋左大夫殿の加冠して給はり其時は實父の御名の一字とりて歳福とは申せし也しかるに友野先生の詩の草稿に

記すをみて万歳めきたる名也いつか改め得させむ詩の草稿には夫を用ひよとありてある時書經をよむときこの字を用ひよとて書嘉言孔彰聖謨洋々との字によりて名を聖謨字孔彰とこそ定めけれ夫よりは雅事は聖謨を記すこと也しかいつしか公の事にも用ひてある時御目付を奥の御用也いまこの名はかな附て出せとありしとき訓のことは前書のわけ故調へも置さりければ聖に敏の意あればトシ謨はハカリコトといふ字にて謀は思ひ明むるの意もあるか也はとしあきらと假名して榎迂大學頭かその坐にありしにみせければ笑ひてよかるへし／＼といひし故に其後は前のことくにとなふること也今のことく人にきかれことかましく勤むる人とならば昔よくしらへ置へきこととてわらひし也

○十六日 雨 儒者來り云大坂の御城御修理にて大成銅とやらむの立樋を取のけたるに其内を白骨と金五百兩出しよしにて盜賊の金を盗み屋根を傳ひあやまりて立とひの内を陥しなるへしと之風聞のよし今日又境な

る吉澤内藏之介方を文通あり同所に六十五歳の男子九歳の女子を強奸して大に陰門を破り入牢したり女子は幸ひに死をまぬかれて疵所平愈のよしこの老翁八十にも油断のならぬ位の剛健なる男なるへし六十五歳にて玉門を破る鴻門の會の樊噲よりつよきか也はんくわいのこう門を破りしは謹み史を按するに六十歳にはならざるへし○白骨のことに付林大學頭榎迂のはなしあり品川大崎村に文政の頃か有馬左兵衛佐若年寄を辭して後春秋のなくさめに別業の地をもとめ庭を弘くするとて丘を毀しにうちに石室ありてよしある人の中に置前後左右に引添て殉死せし體也よつて早速如元に土を覆ひてその丘の上は述齋大學頭と相談せし社を建ていろく穿鑿せしかとしらねはとて冥冥君社と云額をかけたりしかるに丘を毀しものみな熱病にて其年のうちに死せしよしよつて左兵衛佐もこゝろおもしろからず其地を賣らむとて彼是いふうちに是も又死せしよし也しかるに又高田の水野土佐守屋敷にては古き池を浚ひしに内々石榔

此度奈良へ
參候長屋の
男へならさ
し一反遣
し候

出て錦のきれかともおもはるゝものへつゝみし首三ツ出たり是も神にまつりけれとも是は子細なし此ヶ條は小笠原太左衛門話天保七年の頃か濱御堀さらひの時にいかなることか夥しくどくろ出たり懸りの御普請奉行大崎丹波守かみなとりあつめて寺に送り法事追善せしにその葬埋の正忌日ともいふへき日又はめい日とも可申日に二度臨時の御褒美給はり一度は轉役せしと丹波守語りき御普請方鈴木治兵衛か話にては百はかりもどくろ出たりみな其頃のはなしには從來潮のうちよせし水死人の死骸なるへしと事也とそ一は災あり一は福あり一ツはことなし人々の運次第かもしれす解すへからず強

論せられぬ事也
○十七日 雨 きのふ長屋の男ならへ來りたりとて廿七日附に母上様を
御狀其外 御殿を文等たまはりものまで來る先以 母上様御機嫌よろしと御事恐悦此上もなく奉存候御文に福をつゝむと御記し遊はし候ことくいかなればかくとおもひ候はかり私もおさとも母上様の御文拜見

の時は必ふくをつゝむ也去年は丙午にてかきもなしとき御文なれと去年
ほと又ふくをつゝむことはまれなりふくにてもこのふくはふくれつら同
前にてなきこそよけれと申候ひし○かしらの白きからすを御覽ありしと
の御事古歌に

山からす頭もしろく成にけりふるさと歸る時や來ぬらむ

とかいふ古歌あしり脱カかと覺へ候へは 母上様の御信仰の蓮師のためしの如
くめて度いさましく歸り度と奉存候しかし當年位にめつた成ことにて歸
りては借金の淵なるへければ今しはしなとゝおもひ候義に御座候鳥の白
きはなしは史記に燕太子丹か楚噲わかのちかひにありしと覺へ候へとも
からゑ例はもつともいやなりこれはいつれにも日蓮宗にいたし度と奉存
候

ふるさとの歸さ急げはやまからす頭しろしと聞も頼母し

今日は拜戴の柚の花を取出し御養父母様おさと其外うちより江戸はなし

とり／＼の事にて御座候ひき○このほと過日の日記におさとは撫牛のこ
とくとかく蒲團の上はかりにて立はたらきは少く市三郎は百て買た馬の
ことくよくねてはかり居候由申上候ひしか撫牛もこゝろよく百文の馬も
借馬位には相成候わたくしは勿論少もわたつらひ氣なしいかなれはくた
ひれ不申候歟と不審に存候位に御座候人は四十以上ならては丈夫になら
すと久須美佐渡の申せしを存當り候今日のことを御安心のために記す今
朝例の通一番からすにて起槍のすき及ひきのすふり居合等いたし畢
易の彖辭の和解一章したゝめ候是は家來の講釋承り候もの有之候に付其
下よみを序にかな書にいたし候故辨書のこときものを日々仕候其上明の
程篁墩か心經附注へ句讀いたし候事十五枚晝飯給白洲はしまり博奕打盜
賊等々吟味三口入牢もの十五人申渡明十八日は御用日に付目安裏判物三
十七口一覽孫子十家注二十枚温公通鑑二十五枚千蔭か万葉略解十枚契沖
か万葉代匠記十六枚夜に入歌四首よみ候得は五ッ時に相成候又茶をのみ

拜戴の菓子を給候。この日記にかゝり申候。○酒のこと猪口に五ツ位給候様。御沙汰難有候。御承知被遊候。通私の酒は何も弊は無之候得とも。とくためし候。このみ候と不飲に。はからたの様子いかにも不飲かた丈夫に。物のはきはき覺とも不飲かたよろし。よつてこのほとは誓て酒をのみ候義を定め。春日御祭濟の日正月一度養父母の御方の酒奉る日十一日并別段。わげに。與力共の酒給さする日等其外無余義譯。日二日右の外はのみ不申候。積尤酒をやめよと申人の申ことはきはき。可申候得共右の上は尙又まし候。のみ可申と。義はきはき。不申候積例。自誠録に記し置候。右之通に。凡一年之間に十二日か三日位酒のみ候日可有之。右に。は體にあたり申間敷と相定申候義に。御座候書物をよみこゝろをなくさめ候はよき保養に相成候間。夫故に旧年已來のことに出逢候。も少も相替候義無之候哉と奉存候。此ほとは夜に入父上とおさと兩人に。御酒たへ申候其節二合之酒。内おさと小猪口に。二ツ半より漸三ツ迄。其余を父上被召上母上は御禁酒故酒は

なきも同前に相成申候

○十八日 晴 良右衛門か悴の明日は七夜也。こゝにては六日目に祝ふなり。よつて名を乞ふ健之丞と附遣したり。高鼻濶目如玉男兒也と云也。

○十九日 晴 二月堂を御守札來る。是は前にいふ空海か筆の多羅尼の板木の火に不焼をおしくるゝことにて望めは五百疋ツ、奉行所には五枚くるゝ也。先達を御代官小田又七郎を被頼五百疋にてもらひ遣したれば。わか方に。あれば引札同前也。とて遣したるに。夫はわか流義也。御信心は。あらずとも大切に被成候。方奈良奉行の勤役中は。よかるへしと。のこと申來れり。尤成事也。○けふ東大寺の旧記寫をみるに。寛文三年四月十六日井上河内守加々爪甲斐守の旧記を出せし書留をみるに。蘭奢待并紅沈の名香を天正二年三月廿八日信長卿の御所望ありしこと。みゆ。これはよにもしる所にて。しかるに慶長七年六月十一日に。勅使烏丸辨參向にて御倉開封奉行本多上野介大久保石見守允長者學光名香御所望由有増旧記に相見候。御倉之前に。勅

使々御殿作事奉行并 勅使御馳走中坊飛彈守に被 仰付候事といふこと
みゆされは 東照宮も右々香を御所望ありしとみえし也和漢年契に信長
卿のことはみゆれとも 東照宮のことはなし

○廿日 雨 けふ龍助は儒者と同道に卯月の瀬の梅を見に行たりこの月
の瀬といふ所はならより四里あまりあり溪の左右へ三里はかりの間梅を
うゑてありいつの頃のものなりや苦むし合抱以上々古木也といふ也風景
ことによき所也といふよほと雨故兩人共困りたるへし龍介奇人也先頃
雪の日に用部屋に來れるを俊藏かかれにさむきおもひさすへしとて先
生けふなと内に居るといふはいかに我等ことき詩歌も出來す不風流のも
のならばやみもすへしことしは雪のすくなきにけふのけしきいとくめ
つらし春日野三笠山のけしきを内の巨燧と取替にすとはいかに脱アルカ
き先生にかゝることのあらむとはといひしにたちまち立歸り小さくら染
の立つけを着し用部やに來り唯今々しはしの御暇を玉り候へ雪見に參る

とて出行しと也よつて跡にてみなく絶倒せしといふはなし也○ならば
江戸より暖氣也二十日はかり以前よりき瓜のなりたる鉢植を八百屋さか
なやかくれ又けふ竹の子を買ふに目かた一貫目二百五十文也百五十文に
あは少々豆腐を加て一家内の菜になる也○此ほと十歳の盜賊あり昨年親
の勘當受たることよし幼年もの心も定まらぬものを勘當することや
ある幼年もの盗は無宿と平人にては大に差別あること也とて村役人共
呼出し尋みしに人こゝろつきたるより盜賊のこゝろありていかに折檻し
てもきかす嚴敷を越てあるときは墓所につれ行石塔へくゝりつけ一夜置
なとせしかともきかす其上才ありて衣類をうり其錢にて物給人に被奪候
體にて往來にて泣居欺て人より錢貰ふのいのことしはくにて嚴敷叱
り候得は幾日も不歸はや昨年出奔いたし江戸見物して歸りたり親族打よ
り此惡にして此才あり往々はいかなることかあらむとて右々旨御代官へ
具に聞へあけて勘當せし旨書付を以申立るこれらは生れつきたる賊の秀

才なるへしこの度の盗は首をつくなれ共兩三年中には刀のさひなるへし
ならの盜賊には十七歳位にて四度も御仕置に成首きらるゝか昨年來三人
もある也關東にては聞かぬ事也

○廿一日 けふも又雨ふりてはる雨とはいひなから五月雨の如く也 遠
國はとかくに雨の夕なとうちしめりかちなるものにて後にみな打よりて
もち飯やかせ茶のみてものかたるにも殊に故郷なつかしく夫而已いふこ
となりわれも其筵には加へられてその時しはしは書見もせぬ也江戸へ歸
りたしとのはなし又おもひの外のかなしみありと折ふしみたりし貫之か
土佐日記の京へかへりてのことをかけるにさて池めいてくほまり水つけ
る所ありほとりに松も有きいつとせむとせの内に千年や過にけむかた枝
はなくなりにつり今生たるそまされる大かた皆あれにたればあはれとそ
人くいふ思ひ出ぬことなくおもひ哀しきかうちに此家にて生れし女兒
の諸ともに歸らねはいかゝはかなしき舟人も皆子抱てのゝしるかゝるう

ちに猶かなしみにたえずしてひそかにこゝろしれる人といへる歌

むまれしも歸らぬものを我やとに小松のあるをみるか悲しき

とそいへる猶あかすやあらむ又なむ

みし人を松の千とせに見ましかは遠くかなしきわかれせましや

いにしへも今も子を失ひしものゝふるさとへ歸たらむ日はかくならしと

てけふのさひしさに彰常かことまておもひ出てしるすなり

子をおもふ故に昔もしのはれてうたてそぬるゝ春雨の袖

なきたまは妻子にわかれよみの國にひとりさひしきたひねなすらし

○廿二日 晴 龍介月^て瀨より歸て聞にならを去こと四里五十町木津川
のかみ笠置のわたりの上にていとまさひしき山家にて途中雨ふり出たれ
はつれのもののみな半にして歸り龍介計行たり雲梅嶺を掩ひてけしき又
絶倫也奉行所は炭をつけてくる問屋のかたより夕飯を給たりうたをこ
のまれければ懐中なる硯たにさく取出して書たり附書院の上にあものか

きしにそこは貴人のこしかけの料にとて造りまうけしものと云かまこと
かいひしかは龍介われもしらねと書院といふは物かくことのある故也こ
はその料なるへしと答けるとなむこのことわれに云故龍介か話ると粗同
し貞丈か四季草に玄關書院のことありみるへしといひ聞せたり途中墓所
をみれば狼の出で堀穿たる所ありて新葬の所はことによく手當してある
といふ也しかし近頃はこの月ヶ瀬に文人墨客多く遊ぶ故に農家にたくさ
く詩作等多くあると云梅の木にさるをかせといふものゝ多くかゝり居と云
故山家なることおもふへし以前きそ山の極深山へ行七尺のさるをかせあ
るをとり歸りし雲深きところほとさるをかせ多き也月ヶ瀬とはいへ共却
ち其最寄の村によき梅山多しといひし也○奈良の奉行所へ出入町人へ取
締役といふものより歌をこひければ 茶室へかけるといひし懸物のかた
濁りなきころにかざる木の芽煮てとはに樂しめしつか成よを
朝夕の戒のことをいひしかたに

人をめくみ身をつゝしむそつむ寶いやさかえ行もとる成ける

祝のときのかげ物といひしに

巨徳保吉は佐保の河邊のさゝれ石とよみもつくさし萬世滿天茂

と記し遣したりわかかけるものを何にすへきみな 公方様の御めくみの
うちそかしあな難有のことや龍介かうた

山里の軒端はくもに覆はれてふる春雨をしづくにそしる

あけぬとてともし捨たる松の火のけふりにつゝくみねのよこ雲

みな月瀬行ときの吟也

○廿三日 雨 このほと一重さくらよし馬場のはなはめつらしき大樹な
れと葉はかりにてみるへくもあらず

いにしへは八重と聞しかおとろへてはなも名のみならのふるさと

なといひしことを柳介男にかたりしに例の流義なれば即坐に雨を凌きて
東大寺へ行て山さくらのよきを一枝もらひ來りて歌をへて出したり返しに

はなとゝもにかをりそふかくしのはるゝ雨もいとほて手折こゝろは
手にとりていつれをめてむ香そふかみことのはなの花山さくら花
とおもひしまゝ記して遣したり龍介かはなの山守へよみて歌を遣しさく
ら一枝こひ來りしも奇なり東大寺わたりのことにてけにならのふるさと
ゝそおもはるゝはかりのことなりき

○廿四日 くもり 前の條に記せし幼年のものゝ盜賊を我一たひよくた
ゝさむとてよく吟味してみればみなしこにて養兄といふものにむこくさ
れ日々牛を牽馬を追ひて數里のみちを歩行かせられ養兄の妻といふもの
もよからぬものにて盜賊と其子と口論せしをいたく叱りたるより宅を出
て知る人の世話にて人のかたへ奉公する積にて參り居内に盜せしにて盜
金にて買ひしものもいろはのうたかるた或は手遊の戸たなゝとの類にて
可惡所置にはあらず前にいふことく書記して訴へしは家へ再び歸さしの
こゝろかにていかにも可憐のかきりなることにて兼おおもひはかりしと

はかはり涙落はかりに不便におもひて再び又村役人等を尋さすることに
はなしたり幼年ものゝ少しく才あるものをあしくそたてたらむにはみな
かくの如くなるへし何事も手に取吟味してみねはしれぬ事也

○廿五日 晴さむし 四十度にて薄氷霜ふるけふ龍介かうたに嶺と峯と
をみねに差別して書かたを問ふ故にわれ答しは抑日本に字なしみなから
の字をかりて當推量にかくといふか古きならはし也岸に雉をいひてしに
手師といひ夫々義之をも二王をも大王小王をもてしといふ類かそふるい
とまあらず夫は所謂假名にてかり名つけたること故左もあるへし全に字
を用るに誰もしるからになきといふさくらに櫻又朝鮮うくひすとかいふ
ものゝ誤にてうくひすに鶯あさかほに檣靄といふ字のかはりに霞を用ゆ
るの類いにしへんのことにてかの當推量にてすみ來れる故さもあるへし
これは隣國の字にて用を達す故かゝることに成れる也しかればいかに字
の穿鑿をしてうたをよむとも前にいふさくらかすみなといふ字にいたり仕

かたなしよつてとくふるく用ひ來れる字は構ふへきことにあらず寶曆の頃縣居眞淵といふ人希代の間氣天縱の才を以ひのもとにては人鷹已來の人出來ていろ／＼のことを改られこの人は文字をはことはの奴として遣ふとまていはれけるか夫より傳はりし本居の宣長等か三十四の頃までは漢學を醫者のかた手間にして居し人のふと眞淵か弟子になり日本のことをあきらめ頻にからのことうらやましく山崎派の人いひしことによりて夫をたねにて周公仲尼をもわるくいひはしめさていろ／＼のことをいふなれ共あまりにいへは天下に御法といふものゝあるに私に法を立るに恐入たるわけ刑人にもなる次第に成行也たとへは御諱さくすることは續日本記延曆の頃の詔にもありけるか後は御構なく既に御諱の一字を被下といふ例に成居るにからめきて欠畫なとするものもある也それにては私法也よつて何にあも今の法に不背様にこゝろかけ字などももりを柱とかくも古くあらはかくかよしいかにいひても櫻うくひすといふやうな

る常に用ゆることを直すことの出來ねは近くいふときは家老用人はさら也其末々までも名のちかひてあるを夫は捨て中間厮養のるいの名のことゝをいふはつまらぬ也されとこととはのことは日本にて人にかりたるにはなきを誤りては誤らぬ方に仕たきもの也壽永已來學問衰ける故にや既に俊成卿のさびたるといふことを歌の判詞に書れしを定家卿か刀などをこそさふるとはいへ共といはれしことのあるとか聞寂をさふるといふは古くいふことなるを定家卿のかくいはるゝにて其頃いにしへの穿鑿なきをしるへき事かこれはわか一己のことなれ共汝か問によりていふと答へき○廿六日 晴 四十度のさむさ也きのふの如し○庭に手とゝかす霜かれのまゝにていふへくもあらぬ體也よつて日傭をいれて掃除する也芝生には火をつけてやき立まつ葉の類はみなくまてにてかきよせやく也去年よりのかれくさに火つきもゆるさまおもしろし精一など大さわき也築山も泉水のほとりもみな茅やねにふるかや用ひてふき改しかことくあるはと

らねこのいろにも似たるやうにしたりかよう成庭の掃除は江戸にてはならぬ也そのはつ也泉水のふちのみを廻りみるに二百歩に過たりわれ宗次郎にいふはひまのあれはそのひまのなき様にせぬといろくのわるきことのある也この庭にかゝる草のしけりて天野のことくなるは地のひまのある故也朝夕掃除せはよき庭になるを捨置はひまか害をなす也汝らこの節此庭のことにし大成ひまあり其ひまに書をかき文をよみ武をも講すへきをすて置とひまにいろく成あしき草はへて最上かひるねにて身をもちあつかい夫々は女色を討論してくらし酒をのむにいたり其上はいふへからさるにいたる也よつて庭にくさのあらぬ様に汝らも身にくさのあらぬ様に藝にて掃除すへしといひ示せし也論語原壤の篇をよみ聖人にあひたらは世には向脛を杖にてうたるもの半に過たるなるへしわれを嚴敷といふなよ聖人は他人にてさへに杖にてうち玉へり等閑ならば家來かすねは六尺棒にて打ともくるしからししかし今時にこの法を用ひは骨接のな

くらをかへ切になくては家來はつかふこと難かるへしといひて笑ひし也○けふは江戸ならば玉落といふ譯にゐいろく混雜也爲替なと取組に付急に江戸の書狀出すわけに成たり御米は一石九拾匁余にうれたり銀六拾四匁替に付十分ならねとも皆米に付又よろし米下直に御張帟より引込やうならば大變也しかし奉行はふちこはし袖乞にもなられまし絶倒○おさといふわか日記におなしことあり再ひはなきやうにといふ也これ例のめんみつにゐよく覺るくせある故かくいふなるへしこの日記もとけふのことをけふ今のことを今江戸にて母上の膝下に御物語と同しくおもひ出るまゝを書故に定而右を通再ひも三たひも同じことあるなるへししかしよの中に同じはなしせぬものやあるとて笑ひしけしからぬ戲は母上の御笑ひの種なればよけれとこゝに當惑せしはおもひ出のまゝを記す故定而あやまりも多く覺違尤多かるへしこれも著述物ならば引書もみるへけれとはなしなればくるしからしみる人間違は間違にて糾へし尤余人に

より却御任せはありたれと御叱りはなかりきあの人の下知を聞かすは銘々いか様に被仰付るゝやらとみな恐れて軍令も立この位ならはと孫子も一ツ吳王をためして置いてしたるもの也そのはつ也万一間違は天下へ恥辱をさらし一生涯を無にして討死せねはならねは也しかるを孫子にまかせられたれは吳王も覇業をなしたり夫とかはり唐には末世に至り軍に鑿軍といふものを置いて万事夫と相談する様に成ければ郭子儀かことき名將にても敗軍したり下りて明末韃韃の強きころ明の名將を治世の弊にてみな大將にまかせす其上前にいふ鑿軍はなかりけれとも明末の役人都にてたゝみ水練のことをいろゝいひ又は小鬢とかめのことをいふ故に勇烈なる人は討死し又はわけもなく獄に下りて死たるも多き也この時被遣たる人は一向主人のためにもならずむた死也むた死なりとて其職にあらは詮もなきなれとも六ヶ敷時節の大將などにはたれもなるへきわけなき也故にいにしへの人孫子かことの出来しは格別左もなければ名將は時をしり

て引込て天命をまつわけに至る也その時に大將たる人手を下けて被遣るゝ様にすると云ことか行はれぬ故に万一のとき必討死也治世のたゝみの上々しくたりは又もとりかへしか出来なれ共軍旅のことは左は不參もの故名將はみな向より手を下けて頼まるゝまてはせぬ也まして好みて私をといふものは一人もなしあれは大愚と申もの也なるほと孫子か手はしめにおもひ切たることを仕てみせたるはつ也孫子のこのはなし戦國の作物語なるへけれともおもしろき事と感ありて記す也○六半時宅状來ることの返事にするすことは今夜のことにならす明日と漸諸向々書状一覽のこと也

○廿八日 晴 月次々禮受ること例の如し○母上様八日附々御狀○太郎事とかく藥給候由困りたること格別の御世話被遊候由難有候地震の事近頃不存事に御座候文化九申年ころかに大地震有之候ひしか其後被仰下候ほと地震は不存桶にくみ置候水のこほれ候由幸三郎の日記に有之候其

上文化の頃の地震は一度限りにあゆり返しは無之候ひしか晝夜に八度も九度も地震其後も又地震地は静に動き不申ものゝ處珍敷までに地震の有之候はいやなる事に御座候○河野々之書狀は年始狀は參り申候外之義は不承候○太郎か根本迄は歩行に往來いたし候由よほと力附候義と相見申候俊藏かた小女之義は太郎と同年に候得共至る伶俐めつらしき位にて身分の高下を夫々辨別候ふことは遣等いたし可成なる御使の口上はわかり申候過日もおさと私といなりは參り候時あつよりつき參りわか口をならし何か申候間承り候處第一に染か足いたみ不申候様其次は俊藏か痛しやくを起し不申候様と之事其次は俊藏方之下女十六七位したたわけの女也夫かことを願ふとの事也夫は何をおかむといへは前かいたむことかある故にいたみ不申候様との事也みなく大笑いたすよくものを辨別する子故に人かたまし候あいろくのことをいはせ候を立派にいひ人を笑はする也過日ふろしきつゝみを脊負來り候間とりひらき見候處菓子也夫を染かと

のさまいあけよこの内をいたきてはならずといひ附しにたのけふは外の御菓子給はらは夫をも辭し可申哉いかにと問かへしたるよし也おとなしよく云ことをきよく穿鑿する子也幼年の者の伶俐なるは體より氣かつき氣を遣ひ候故病を生することある也よつてそめに申付決而何も教ゆるなとて教へぬ様にする也幼年のものゝ痲勞といふものゝあるは體よりも氣を遣ふ故なるへきかわか四十歳の時刀匠直胤來り男子の四十ころを六ヶ敷いふは尤也その頃體は老に向ひなから身にはしられぬ故に二十歳前後の時のことく色欲などをほしひまゝになしさて四十歳は幼年よりの時おもひ附たることみな實のりてよく氣か附行届てくる故に實のなる木のみより過て枝の折るゝ氣味あり用心したまへといひし金言なりとおもひし也幼年の伶俐なるこれに准する也俊藏か娘のことをいふに附新右衛門かことをおもひ出てしるす也新右衛門は當年四十一也わか小普請奉行被仰付たる年也其頃の養生及ひ酒を痛くのまさりしことなとおもひてよほと御養

生あるへし養生は欲を少するか第一なれと是は大人君子ならては出來す
しかし夫を的にいたし心を遣ひじりくくと成ときはつと轉すへきこと也
こゝろすると少しは違ふなりわれ二十四五の時より眼も齒もよからさり
しか夫を養ひていろく手當をする故か今も其頃も少も違はぬ也○十一日
附之御書おさとの不快御尋被遊難有候この女馬鹿に候は、煩ひはいたし申
間敷候得共前のケ條と同じくこゝろを勞し氣の附こと格別故體たまらず
して弱く相成候と奉存候氣のつき世話の届き候ことは別段故みな病と相
成申候右をなくさみにいたしたのしみにいたし候は、遊女をかひ候もの
、金錢に心をつくして保養に成意味あるへく候得共こゝろ狭く是非とお
もひ煩ひ候故病を生し候いまた文もかけす歌もよめ不申巨燧にて源氏春
曙抄を友たちにいたし居候位のこと御座候間頃日は申付候専ら庭あ
るきを爲致申候庭中にあつみくさ其外女のはらこなしは澤山に御座候さ
くらの木貳本はかりあると存此ほとはなひらき數へ見候得は庭の山には

かり大小八本有之候よつて食後と夕かたは必庭に出ることに爲致申候追
々よろしく三卿藥之外地黄を爲用候處大にするし有之候體に御座候酒の
こと被仰下少々宛は必用ひ候様難有候おさとは猪口三ツは六ヶ敷私いま
た養生にいろく勘ためし候處何分酒はよからず候間平日は給不申候酒
をのみ全に養生に成候にはよほとの人ならては出來不申候氣の散候より
差引べ高にいたり候は體のわるく成か多く御座候間つとめ候酒は給
不申候一年に二度は私のなくさみに酒給可申と存居候間この頃の内一日
給可申と存候得共いまた給不申候昨日など父上の御相手おさと民藏にて
父上はよき御機嫌にて前に記すことくなれ共惣人數の酒にて五合はいら
すと申候こと也わたくし二十八九の劍術を頻に遣ひ候ころ御養父母様私
三人に三升の酒のみ候事有之候ひしか酒にも盛衰のあるものとて昨
日もわらひし也○新右衛門の日記爲替金十兩御受取之由○香典獻上之義
御取計被下候と之事忝候○敬次郎を根本の愛候由左もと存候同し孫なか

ら私は可存太郎の顔をおもひ出し候得は少々覺居候位定る今は大にかはり候事と存申候○松平加賀守嫡子痘瘡にて大切と之事此人は文恭院様の御外孫の内男子の御外孫と申候は此人はかりに付登城の時見受候ことに恐悦のことゝ存候ひし米庵の弟子にて書をよく被致たり八歳はかりとか十歳はかりとかいつれ至る幼年の時大暑登城の時文恭院様を御沙汰にて何か書候へとの御意ありし時筆とりて天下泰平の四字を記しけるよし也將軍家の御前に加賀守之嫡子の書ことさて考のつかぬことなるに前の四字はさても出來たることと毎度感心せし也米庵其ことを聞て感涙をなかせしとのこと故成人せは格別の御人なるへしとおもひ居しに可惜のかきり也○瀧野公の新年作感心いたし候義也夫に轉結の趣向諸侯の御了簡にてこの御様子ならばよき宰相にならせらるへしと感心いたし候義に御座候詩人文人といふものゝ詩の體四かくに書たりし俳偕川柳の類なるか多けれとこの詩は諸侯の御作にてなるほとゝ其氣韻もみ

え感心する也うたといふものはよむことといふことに極りありて至極不由なるものに詩に見合はせまきかことくなりしかし今の清朝などの詩のことくには下らさるかことく千年前の風を追ひ居る也日本には狂歌俳諧といふ自由なることをいふものある故歌かさして卑俗にならすむなれ共詩にはそのこときものなき故にきのきゝたるにはいやしきか多き也そのいやしき體を新渡の詩集にてみてしらすまねる也○太郎か不快一覽中是は痘瘡と驚しか早くおこたり當坐のことにて安心也是も又病身かと歎息する也市三郎なども一月に十日はねる也いかなることによ○戸田寛十郎日光か一柳と入違に相成候由互に結構也うら賀は此節御人撰とみえ候いにしへ土岐丹波守に土岐や阿部遠州などはうら賀相當の人も高といひ人物といひ別段といひし鳥居甲斐など遠州のことはうら賀男也などいひしことありて丹波か又いたつらをいひ人を馬鹿にすることはよせなとゝいひてわらひしことのありける也しかしうら賀は千石高にて二千石

欠所のまか
玉のいろあ
りのあ
青の瑠璃の
類のことき
虫のことき
略の也
解の也
るも
ほと
ふ也
八丈の玉を
人今以玉を
以かさりと
す日本にい
し羽倉のこ
のしへこの
へものちみ
しをみし記

の御役知也と覺し都合三千石にては戸田は難義なるへし○曲玉のことこ
の次のたよりに一ツ奉るへしわれいまたよく研究せすまか玉といふは尻
のかた曲り居る故かなと、おもひ居たりくひにも手にもかくるものをも
みな美玉の稱にてまか玉といひしかいかに万葉略解に圖のありしは竹に
つける玉也夫は細きふての軸の太サにて三寸はかりに切しもの也其眞物
も贗物もあり欠所の時買置て參らすへし古事記に云八尺勾璣マヤサカノ 天
照大神の御手にまとひし也八尺とあるは念珠のこと緒に貫たるか長さ
か万葉に云玉釧玉クは手にとりもちてと云は手にまくもの也まかといふ
眞玉にてかは助字か其假名に勾をかきたるにて美玉の通稱か今あるもの
に末のかた曲りたるをいふにはあらぬかこの次までよくしらへみるへし
○わか夢をうちつゝき御覽ありて御案し被成たるとのこと忝しく候夢の
こと少も御あんしあるまし去年あきつねのことありける前後夢にも何に
もさとしなしされは夢幻泡とて佛家に少もあてにせぬことに極め置し

212626

も尤なること也夢などのこと遠國にはよほと氣にかゝる故よくあしき夢
よき夢ともみるをこゝろにつけてみるにみなしるしなしみな欲心よりこ
ゝろを勞するまでのこと也さて又母上はしめ新右衛門一同歸りのこと思
召よし難有のかきり也われも一日も早く歸り度こと勿論也夫に付るは私
心も加り孝弟こゝろもち少々はありておもひ迷ふことしは、也され共
當年已來少々工夫いたし候義有之候て何ことも樂むこゝろ忘れす朝夕に
少しにてもらく、といたし度と存候とてくるしむこゝろは恥のうち
いたし置候得共左様には參り兼てしは、恥と存候義一日に何度も起り
申候士のうち死と申候こともいやなるいま、敷の上なしに候得共する
人のこゝろにはこれならてはと存候義人のしらぬ樂あれば也志士の溝壑
にあると孟子のいひしは手もなくころひ乞食同前に人のみるめにはみゆ
ること也それとも志士は人しらぬ樂ありてこゝろに存する也たとへはわ
れとし老給へる母上に別れまいらせ嫡子は死し山家同前のならにて鹿を

相手にいたすとおもひ候得はくるしみのこと也以上のことみなわか願ひてすることにあらず人命也とよくこゝろにおさめてみるとのこりはみな難有事はかり也難有おもへはたのしみ也よつてこの樂しみこゝろを先さつと四五年は忘るへからすとおもふ也一大事の極の生死みな天命也天命をたのしむ上はかくなりたしこふしたしといふはみな人作にてよからぬ也江戸に歸るの第一は無病の養生夫はつまらぬ入用のなき様扱御用向を味よく穩當にすることにてこれ又出來さることなれと立起につけてこれをこゝろにかけ人にいはれぬことこの日記にしるしかぬることのなき様にするか第一の江戸に歸るのこゝろかけ也さすれば月日の立もたのしみの内也朝夕行跡をこゝろみるもたのしみのうち也そのこゝろにて四五年立たらは其内に又考も附へき也されはとて今にも不行届にて御用 召のあるましきにもあらず目出度事にて御用 召のあるましきにもあらず夫は天也一向に構はぬ也只みつからくるしみみつから求ぬることのあら

ぬ様に此ほとこのこゝろかけ也以上のいまた十分一も出來たるにはあらず此ほと的也日々せめて小あつちへ中り居るやうに仕たき也なれ共このこゝろある故にや昨年來のことに付哀しみもしこゝろをも勞し夥しく財を費けれとも體にあたりたるとおもふこと一日の間心塞きたることゝおもふことはなし起ればうち消す也起るとき消すと消ことを忘れていつ迄もこゝろに迷ひ居るといふかこのほと出來不出來也この内新右衛門幸三郎等々内新右衛門より江戸の事には少もこゝろを費すなといふ故に安心してこゝろの樂みを養ふこと半に過たり忝きこと也○新右衛門白石ものをみられ候よし白石并貞丈の書は御役に附たることに大に益ありまか玉の辨などおもしろく感佩也この眞物はこの次のたよりにまいらすへし○太郎のこと質直方正なるへきかとの質にてよくしたらは書物も好み可申歟と事大悦御申越えことと天稟を失ひたくなきこと也生死を度外に置て薬用手當朝夕無怠の外はなき也○幸三郎より石塔の鰐被賜大慶也刀脇

差を好むこと捨る積なれともいまた不止おりく出してみてたのしむ也この鏝二百年か百四五十年位のものなるへしよき味なり別々大慶也今一位に山吉などの類にいたるへし目貫は樂翁の書れし異國船に

この船のよるてふことを忘ぬは治れるよの寶也けり

といふにてふちは地水火風空の塔婆につかは野さらしよつて鏝おもひつき楊繼世か作忠鬼補の詩にてよみ歌を一乗にほらせしにかなをごちくと鐫たれはいかにやすへきとおもひ居しところ押かたにて石塔の鏝金味よし圖よし旁とおもひて所望せし也一乗の鏝子孫につたへ可申と之義御斷也今一段手をあげ一琴に鐫する積る也豊太郎か稽古さしか貸刀の鏝にいたし候様御たのみ申候○近藤氏之一條驚歎數日を経て出しは不審也○白魚多しと之義日記にみゆならば見し人もなし九日日暈ありしよしならにてはみえす幸三郎歸鴈の發句實情落涙也つふては十分ならず○二月四日大地震夫々日々少々宛震ひ候由ならには少の氣もなしなら來り地震

かとおもふこと一度也水旱損なし地震少く火事なしにしへ神の都を定給ひし味あることか○この頃惣年寄の所々の届物の運賃に目錄二百疋遣す貳兩貳分ほとかゝる也一貫目に付五匁はかりにあたる也其内にはおけいかくられたる隠元まめ迄かありつまらぬにけしからす入用也飛脚屋は一貫目なみたより十三匁かと覺し也されはよほと年始八朔かのかた大によろしさどにては月に兩三度つゝ無賃の宿次出御用辨のかたはら私用もたすなれと奈良京攝ともに其ことならずこまる也○頃日儒者参りて軍學のことを論せし故に霍去病に武帝を孫吳の兵法を傳へ可申と仰ありし時におもふに方略如何のみ古の兵法を不學と奉對しは兵武穆もまた同じ意かと覺たり凡兵法の入用の所は奇正虚實の四字に不過其四字は其人にありて傳へきものにはあらず所謂玉を買ふもの玉の箱をはかひなから玉をは返すかことく也とて古人の笑ひしは軍學のこと也故に自得の人の好まぬこと勿論也儒生か高砂の論さへに無益なるに兵法のこと自得の人の

學はぬこと勿論也無筆の慧能か法壇經の手際の如くなれば稽古なくして
出来る人のこと也さりながら治世にて兵法の事なくて叶ふること也予か
槍の伎を好みよつてこの伎を以譬いはむに先師より傳ふる所の形とい
ふものは華法中の華法にて全にうそ事也其うそ事も段々と稽古すれば所
謂うそより出しまことにて更にしらぬよりは少しはよかるへしや天下の
人みな中人にホ霍丘二氏のこときは千載中一二人に過す千載中一二人の
人の二々を以天下の中人はとりあいかいぬる故に兵法といふものも
なくてはならぬもの也とおもひぬよつてこの頃は孫子を謄寫して日々の
老婆か經文のかはりにするとてうつし置しをみせたりなるほと徠翁など
の鈴録をか書し其外孫子國字解等深き味ひあることなるへし

○廿九日 晴 きのふ天氣に付おさとの考にホ下女共に貞助方之小兒之
いはひの強飯を庭の築山にて茶をにて給さするみな喜ひておさとかいひ
て鬼わたしなと築山のうらの芝地にてさするめつらしくおさとの笑聲な

と表の居間へ聞ゆる○長澤宗次郎不束有之俄いとま遣す

○三月朔日 晴 長澤宗次郎木辻町之遊女と昨日相對死いたし候哉遊女
を殺し自害いたし少々息有之候旨訴出る同人は七歳のときより召仕ひ殊
に目をかけ遣して給るものもわけてかれへは遣しけるほとなるに當正月
已來遊女の毒しみこみて兩三日已前もとくと異見し所々借財多に付昨日
給金渡へきところ如何之義品々有之に付暇申渡しらへ中之處右之次第に
付一同驚歎今日おさと并下女なとろくく食事いたすものなし不束之も
のなれ共子のことくおもひければ哀しくて涙とめかたし暇遣す上は無
宿同前之ものに付不取敢檢使を出す母上より御狀のことそめに申聞同人
より度々よみ聞せて異見せしことも多かりければそれをしりて染か方の
下女江戸の御隠居様被聞召候ホさそ御驚遊されるなるへしといひしよし
也奈良抱の下女さへに如斯其余とり／＼申すこと也

○二日 晴 昨夜宗次郎か事をおもひてねかねし故におもふは大學に好色を好むかことくこれを自らこゝろよしとすといふとあるは宗次郎か如きことを善事につくすなり人は何といへかといへわれはこれと決斷する所宗次郎か如くならば伯夷叔齊か徒なるへし好色には宗次郎かことき不届ものいくらもありて親不孝主へ不忠つくす故に道にこゝろさすの至りかくならてはならずと近く人の知ところにて大學に教を下せしものなるへしある人詩をあまたわれにみせしに其内に腰間笑撫菊池刀といふ句あり前後勇壯にしてよく出來たりこの詩はおもしろしといひてしかしたゝならぬこと也なにかことありけむといひしに笑ていはす主人の密に被申付たることありけるに急に金川宿を夜八時頃に通りにたゝたのむは先祖より傳へしこの菊池延壽の刀よとおもひし故につくりけるといふ尤其ことはいはさりしか凡に推察せしことありきあるとき人のはらを切るにきり損することあり其時氣を動かさす潔するはいかにといひしに其人の答しは

士にけしからぬ御尋を蒙り候ものかなしかし御懇意に付極内々可申上候某も死する時いかにかといろくためしあるときは短刀をはらへ當深夜にこゝろためしなとせしことありきしかるに与風四十六士のはら切圖をみしに古圖なりしかみな顔をしかめ苦々敷躰の様子を書けりしかれは死をみる歸するかことき從容死につくなといふ類はこゝろにて急病人か良藥の至極に苦きをのむかことくいかに悦て露の間を遅しとはするなれ其のむ躰は苦きなりいのちあらむかきりは苦しきか當り前かとおもひしかまたある時わかき男女の相對死を潔するをみて今までのことは過てり大學の好色を好むかことく道にこゝろを置なは正しきことにて死するに何の勞することかあらむその時相對死の男女にはおとるましとおもひ究はやすからむと悟り其後は只其ことを不忘大切にのそみ道を忘るへからすのみおもふ也しかし士か腹を切ことを苦勞にするといひては外聞あしく候間急度わか名をつゝみ被下候へとくれくれいひわれも人にかたらしとい

ひしかは美事なれと名はしるさすこの人國より參府すれば必兩三度は尋來りわれに得益のこと多かりき大藩にて賢明の主に大に用られ治國のことにて人にもしられしか五十に不及して没しぬ可惜こと也一昨年の春か没せしか其主人日々なきかなしみておしみ人といへは必くりこといひて落涙するときゝきわか方々來る藩士の内に三四人之人に誠實は第一にみえし男也人のいひしは新井筑後守は臍下へ拵ほとなる灸をならへ居て火を一度につけられしこと度々也人の何故と問ひしは笑ひて答られさりけると也まことにや○長澤宗二郎きのふ九ツ頃に息絶けるといふ也わか方に暇を遣せしあと其上に相對死のこと故に死骸は取捨也可憐のきりにて惡みなから落涙とゝめあへぬ也○死骸のわきに遊女の書置あり正月廿五月初初惣次郎に逢ひ此人とゝもに死なむとおもひ定めしにけふ願のかなひけるよしをしるせり剪燈新話に幽靈か牡丹の燈籠を下ケ美人に化けて少年をあさむき終に其少年をつれ行ておのか葬られし穴に引こ

みかさなり合て死居たること其外少年の血色のあしきことを友たちか異見加へしことなとみえしかと幼年のころよみてかすかに覺居れり新話は實事を怪物はなしにせしにて宗次郎かこと少もかはらす信州に狼害のありけるときわか親しき岡本近江守其頃はそこの縣令に狼字分看是良犬といふ詩をつくりて狼害のやみし例をおもひて天ハわかき女ハおこの二字を合すれば妖怪の妖字と成なる程人の迷ひもし化されもすること也とて合せみよ天ハき女の二ツ文字あなおそろしきすかたならずや佛に外面如菩薩内心如夜叉のことあり妖字又しかり白檜ははるの半に落葉して定めなきよをしらせ良なる

○三日 晴 大書院におゐて上己ニ禮受ること例の如し○過日内藤紀州ニ邸ニに見たるといふは段々尋ぬれといひおこされしこときまかたまはあらす古事記に左右御手各纏持八尺勾璫之云々といへは皇太神宮儀式牒トに云八尺鬘乃曲玉謂貫玉之糸長八尺とあれは小なる玉を念珠のことくに貫

ぬきたるものには紛あらし曲のまかを眞弓ますら男などいふことくのまにみたる説もあるへけれとも今あるもの現にまかり居て日本にてこそまといふへけれと文獻通考に日本王子來朝青き曲玉を捧るとあれはまを美のこゝろとも定かたきか越たる圖と備前のすやきなるかことくといふを合考れば世にいふ行基かはしめて陶器を作り初たるといふ壺にはあらずや何故行基やきといふことはしらねと先年尾州へ行しに尾藩の武藤銚三郎といふものゝ話に熱田のわきにしら簗山といふかありて其山より近く行基やきといふすやきの陶器山のくつれ所より出しを如元納め埋しといひ近く西東兩門の御争ひに而協坂の懸りに而しらへし覺如上人のたひの灰のいれありしも行基やきといふ壺へ納ありしと申立ありしかと覺へし行基は和泉國の人にて續日本紀曰基姓高志和泉國人也泉州に陶山あり陶器村あり五畿内志に陶器營は寛永二年小出氏初而營とあれは今も諸侯の陣屋あるへし同書に延喜式を引て其調貢酒壺燈盞水瓶酒造水瓮其外陶器數品をあげてあり行

いにしへ墓
のうちに其
人の平日常
に用ひし器

基か陶器造といふことはみえねともわか江州莊村へ行しとき其隣村に河原村といふありて行基のはしめて瓦やきたる所也といふよし百姓の語りき何事も聖徳太子空海行基を事を始し人のことくいふ故に行基の名をかりしにて行基やきとは古き銅器を宣徳といふの類にて明宣徳年中より遙に古きもあたらしきもあるへきを骨董家かせむとくといへはみなかくいふ類にて行基やきとは古陶器の惣名なるへしこの頃万葉三大伴坂上郎女かうたに齊戸忌穿居いはひへをいはひらするとあり千蔭か注にいはひへは酒瓮也紀に嚴瓮忌瓮イッヘイッヘなといへり契冲か代匠記には神武紀に天香山アノクサの埴土を以八十の平瓮造る又は天皇往嘗嚴瓮イッヘイッヘ糧といふことを引たり今の備前やきをいむへやきといふもこの遺言かもしるへからすしかればまか玉壺といふはまか玉とにもに多く古墳なとより出るもの故に骨董家かまか玉壺と号しにて實は神武已來いはひに用ゆる目出度陶器のまねゝに今もなほ傳へしにあらすや必まか玉の墓所より出るによりてかく目出度器を穢たりと定むへからさる

類を納めしめし類ありし類の墳
汲郡の古墳
古書出類
多外日命
其倭彦本
宿禰の野見
合様子の異見
合へき事か
西大寺の古
銅器は周の
世の古くよ
來りも日本
へ傳へし出
寛政に土中
器出たり陶
器朽れしか
故に千餘年
つたふるな
墳より出む
へのと定む
へのと定む

か以上は五畿内志其外万葉などに引ある書又は手覺より抄出せし故誤も
多かるへくまか玉の考雲根志などにもあるか友野先生定而いくらも考あ
るへければかく尋ねて内藤の壺は神武紀已來にみゆる神を祭るにもちゆ
るめてたき酒壺と定たき事也前田夏かせ今江戸にて日本のことに明なる
人にて水府又は福山侯などへ出て日本の書を講ずる也書もまた見事也こ
の人にこの壺の記をかゝせていはひへの神かめとせはおもしろき事なる
へし備前のいむへは所の名なるへけれども陶山陶器村の類いくらも其も
のによりて地になつること甚多し今も江戸に照降町あるにあらすや
○四日 くもり きのふは天氣よき故に一年に兩度はのむへしと定めし
酒を例の山の上のほりてのみたり酒のみて多く宿醒と成は酒のこなれ
ぬ故也よつて市三郎を相手にしてきのふ芝原にて早走りしてこゝろみし
に二百歩はかりの所を三篇ほど走りしに市三郎は息きたり又三十間は
かりなる所を十二篇かけもとりたれば市三郎又息きたりこのときは前

ほと早くはあらさりし也市三郎何分虚弱なるところありわれこのくらゐ
のことにては少もくるしからすこれは平日の稽古の故かもしらぬ也士は
極に身を用ゆることなくはかけて息をならし置たき也かけくらの出来る
ほとにては酒も多のめす翌日もよく躰にあたらぬ也

○五日 晴 大和に大柳生小柳生といふ所ありこは柳生但馬守の出所也疋
田文五郎か出し所か疋田村といふも小夫村といふもあり小夫淺右衛門か
出し所かとおもひて花井隆慶といふ醫師は御役所附之ものなれはとひ試
しに其小夫淺右衛門と申は則某か先祖にて柳生新陰流の遣ひ手也紀州に被
召子孫にいたり家斷絶し某は母方の姓名乗て花井とは申す也紀州に今も
縁ありて行也小夫か刀術の傳書等持傳ふれとわけしらねはよみくれよと
いひし故にわれも酒井良祐殿につき直神影を學はさるうちは中野又兵衛
か父中野樂山殿につきて紀州より出し柳生新陰を遣ひ樂山殿の末子に
又兵衛か養子と成し中野金四郎を皆傳を受しよしものかたりしに其柳生

但馬守といふ人はいかにと問ければ世には劔術を以名あれとも劔術は其
 余業も同前にて大猷院様へ刀術のこと御傳まいらせ其刀術のことによ
 りて天下の御政事のことを助まいらせし人也よつて卒してのち武士に近
 くめつらしき御贈位のことありしかと聞けり世にいふ所はみな但馬守か
 皮肉也骨髓のこと一をかたらむわれ幼年の時藩翰譜を好みてよみしに其
 内にありきむかし天草の役起り板倉内膳正を被遣けるよし聞て夜に入し
 をいとほす城に登りて内膳正かいきて返らすあたらしを一人御失ひ可被
 成よしをいひき其大要は九州の大名寄集りての軍也寄集りての軍はいふ
 所てんや椀やにて出来ぬもの也然るに内膳正威權輕し必ことの行はるま
 し其時には討死するよし仕かたなしとの意を段々につくして申上たり果
 してはつかの百姓一揆に慶長元和の古兵も少しなから残り異國の黒船を
 やき打にするなどいふ日本の御武威盛成極の武士九州の人々不殘寄集り
 てとしを越して落城せず終に内膳正は討死したり但馬守が了簡と少しもか

はらすこれこの人一人相手の劔術遣ひならぬ證にあかの易にいふ師興尸
 とあるを程伊川が大勢大將かありては船を山へあくるの類故に其誠也と
 てもろくつかさるとよみしわけ也今大力の人五十人よりて一本の材
 木をはこふにてんや椀やにて引はりくらをせしならは大力の人だけ害に
 なるともいふへし小人數にてもきやりをいひよんやさといふとうむとい
 ひて鳶口を同じ拍子に引は十人は十人二十人は二十人の力を合する故に
 材木動く也これを以ても大勢の寄集勢の六ヶ敷をみるへし但馬守は易を
 よまれしこともなければとも其妙理を得られしは不思議なる事也と常に感
 動するよしをかたり遣したり文化三年の大火に増上寺の御靈屋危かり
 しか防の大力不及引返すところ也けるに御老中の御出馬の躰をみてと
 つて返して防きとめけると人のかたりき何事も頭取なくてはならぬも
 の也きやりの説は徂徠か孫子國字解兵勢篇にかいはれし説也感服するこ
 と故に天草のことのはなしに引てかたりし也○大和は孟宗竹下直也とて

醫師にかたりしにこの竹は宇治の万福寺を傳はりて早く山城大和にうゑしと聞といひし是も今も眞竹は御勘定帳などにも唐竹とかき則うたにいふ吳竹にてからより來りしものなるか孟宗竹も隠元まめといふ類に唐僧と傳來也かとおもふ也北海の人孟宗竹をしらす外國を漂寄を唐よしといひ葭茅の一種とす可笑ことなれともこれにても孟宗の至る近きものなるをしる江戸に盛になりしは六十年はかりの事也

○六日 晴 入墨後の盜に紛敷ものを重敲にてゆるせしか落着の時難有々々といひて拜みし也夫を此節又召とりて吟味せしに追剝押込等數々ありて良民の害を多くなし人をも殺せり一人の惡黨をしはし助けて大勢の良民の難義をさするかゝる不陰徳のことはなし政にあるもの姑息の愛あると必世の害を生すいたくおそれし也○此ほと風聞には彦根に御備場の義被 仰付たるよし也會津も同様かといふ也大切之御場所たしかにて恐悅の御事也まことに恐悅と感服する也

○七日 晴 御用狀來る宅狀來る御沙汰書の寫に御備場のことみゆる實説也ますく恐悅におもふ也 母上様も御快然にて新家婚姻も整ひたるよし目出度事也○さくら候より參候羊羹目かたものに付 母上様被召上被下候由別難有御事也第一に私孝行のうちになり扱又羊羹の類目かたものに付凡壹本七拾匁あるへし五本にては先三百五拾匁也箱の目かた五十匁也都合四百匁なるへし十日限狀壹通壹匁五分大封狀貳匁三分狀箱三匁四分五厘昏包類貳百目迄四匁五分壹貫目に付拾五匁也右之返禮拾匁目かた貳百五拾匁參り候運賃五匁八分羊羹之返禮代拾匁右之運賃五匁八分羊羹之參り候は運賃六匁都合に貳拾壹匁八分に相成候貳拾壹匁八分あれは奈良はいかに魚類高直にても家來迄給さする也又羊羹ならば貳匁ツにて十本に成也よつて給物は都而以後共御廻し無之方よろしく御座候母上被召上候歟新右衛門子供の給候歟又は外に被遣可被申候松魚を貰ひて松眞木を添て往來へ捨しものあり人驚ひて問ひしにわれ此上の酒と醬

油の費をはふくといふに近し惣年寄の時はよろしそれも 御殿がいんけむ豆の干たるを越したりけしからす高直にあたりたり惣年寄の時にあも只爲持越候ゑは奉行役不相立入費之上道中の骨折の禮をする故に凡三兩余に相當る右は一貫目に付五六匁に當るといふ兼ゑ家來共々追々申出に付其ことを今般之羊羹の廻らさりし難有さのあまりに記す也○夏蔭先生を七月已來文通も問ひに遣しけることも歌の直しも來らすあまりのことに少々怨みウラミをいひ遣したり今般の書狀をみれば十月九日附十一月 日附十二月廿七日附あり廿七日附には何卒當年中に被遣度などありされは先生はうらまれます昔ある人酒を下直に升目をよく賣しに外の店より不繁昌なりとていたく世をうらみかこちしに友のはなしにてよく聞は世間にてはあのみせは酒もよし升目もよしなれ共店に飼置犬かくらひ附故に恐れて行かぬるといひしと也是は例の韓非か偶言なるへけれとも上たるもの人を遣ふよふになりてはこゝろあるへき事也

○八日 雨 夕かた堀田備中守殿家來福與倉右衛門倅備中守殿の伊勢の代參として参りたりよつて京攝ならぬも來りたりとて尋來りて豊藤五助の書狀出す逢遣すいろく江戸のはなしなと承る所々にあわか取沙汰を聞しに裁斷公平にて速なりとてならの近邊の評ありといひし

○九日 晴 直胤かかたより書狀を添て津輕之儒生來り面謁を乞ふ逢遣し菓子など遣す昨今はめつらしき所々のはなしとも聞けり

○十日 くもり きのふの書生所々の大儒に逢ひて又再ひ江戸へ往て師をもとむるか誰にかせむといふ故に我は不學にて殊に儒者と交を結ひしこともあらねはしらすと答しに達ゑとひて心得を聞たしといふ故にわかこゝろ得をもいふへきなれとも足下のこゝろ得も又きゝたし何故にかくはくるしみて所々を歩行よといひしに頓悟のことありてこゝろに得むことを欲す何も書物にはかゝはらすと云故にそは不思議なることを聞ものかな足下は累代の士と聞は先士壹人の用に立親も祖父も先祖も主人の祿をは

みたるものならば其報を主人にせむとの學問こそ簡要ならめ頓悟することよしや禪僧の達磨慧能かことくなりたりとてその國にて一の清僧を得しはかりにて主人の爲にはならしわれならば主人に累代の恩を報ふへしとおもひて夫かために壹人に敵するは二人に敵し治國のこと經濟のことに心を委ねてなるならば味爽より夜四時までは夫にかゝり切にいたし度居ならば其積累のうちに頓悟のことも生し可申陳白町かことき人山水を樂しみてみちを得しとは聞とこの人天下の書に讀はぬはなき上のことなるへし殊に祿を世々にする人は第一にわれは武士也といふことを割出さねは先學問の見ん頭か相違するかとおもふ也陸象山か憤發して弓馬をせらしなといふこともある也堯舜のみちは孝弟のみといふにはあらずや何も遠く所々の師を求むることはあらしといふことをおしひるめていひしに其人まことかいかにはしらねと承伏せし躰に歸りし也○東大寺開帳に付三倉より出しある古書の風入いたすと云事也其書目をみるに 聖武

帝の御時の民部省の書物其外にて四十三冊國分あり同し御世の古文書唐櫃に六棹と書出したり天下無双の珍書也江戸に御用になりても可然もの也○十一日 晴風 けふは父上東大寺へ御參詣也駕は御迷惑との事なれ共家來共一同御歩行に而は相成間敷との論にて御駕也御供は市三郎用人に而民藏其外御近習として誠一郎御供のかとに而平吾等被召れたり此ほとは東大寺に而は開帳よほとすの所徳の積なれ共左程とは聞へす湯嶋の平日位の人にみゆるといふされ共東大寺二月堂大佛にかけてはけしからぬ廣大成地故人少みゆるなるへし日々參詣人一万人以上に見込なりといへ共無覺束奉納物など土地に風聞取沙汰等大造に云故に先格に無之大造成義いたす間敷由等は觸書をも差出し置候故か市三郎など歸りて笑ふ也こもにてつくりしつりかね或は幽靈の靈寶とも可申挑灯など可笑のいたりといふ也土地にては至而自慢に而大造に云故に土地の潤も不減様いたし度内に又仰山成事ありては濟まぬ故觸書をも差出せしなれ共其氣遣はなし

とて江戸ものはみな冷笑する也行基の年忌には大佛の像手の邊まで昇らるゝ様にすることのよし手のひらに七八人はよりにて酒くみかはしもなるへきほとひろさ也といふ也雜司ヶ谷に行とは違ひ人のこみ合ところへは御出なき故に大佛の堂も外より御のそき靈寶物は御覽不被成候而歸りに元興寺の塔に行て御上り被成候而所々御覽夫わかくさ山の鶯の陵といふ碑のある所市三郎其外一同のほり其うらのかたの更に人氣なき所にて握飯を父上も被召上御供の人々も被下候而七ツ時頃御歸宅也この鶯の陵といふは五畿内志などにあれとも誤なるよし古書を引て奈良坊目拙解にみえたり 帝王の陵にあらぬよしなれ共武藏野の前にて三笠山へつゝき青筵敷つらねたることきよき芝山にてのほり十町より十二町前後ありいつみ河今木津川といふ也ふしみの大池邊まで山城國よほと目の下にみゆるまして大和は眞景の密書をみるかことくみゆる也江戸ならばよほと勝地にて人の錢を遣ふところなるへけれともこゝにて蕨を多く摘來りしに

てさひしきをみるへし〇けふ江戸より取寄し七書を突合みむとてみてのるに一冊不足也驚て江戸より來る目ろくをみるに一冊不足のまゝ來れりこれは一の孫子の所は常に彌吉か書案の上に出しありし也尤佐藤の塾生へかしたる事もありしなと彌吉かはなせしこともあれは不足のまゝ仕舞置に成しことなるへしよく穿鑿之上を御越可給候佐藤之悴たのみてもしるへし唐詩礎のこといかにみれとも不來詩韻珠璣を持參りし故やめに成其まゝ帳面に記せしなるへし是又今一應穿鑿ありたし少も無理ならぬ事みるもいや位のことなれ共彌吉のこのありしさわきにて必は本出來なるへしいかにも幸三郎に氣之毒なれ共一應目錄へみな書物をつき合もらひたき也奈良は少々持參り候本惣次郎は預置候處甚敷亂雜成こといたし置たれば惣書目をつくりたり兩三日大にさわきし也

〇十二日 雨 穢多より革鍔きたえ來るかさね五分もあるへし精牛皮を以三枚かさねにせし故すき通り鼈甲のことくにて鏡のことし決而切れぬ

積なれ共ためしくれよとの事也いかにも可切とはみえずよつて先ッ貞助
か所持之古刀の信國とみゆる七寸はかりの短刀にて切しに九分通りきれ
たり俊藏か差居たる一尺二寸ほどの重き短刀にて切しに水もたまらず臺
へ深く切こみたり已前もためして覺ありしか此たひのは別段の鍛にみゆ
る故にためしに如斯度々のこと革鏢決る用ゆへからさる也この穢多銘
人の細工人に而此ほとふち頭など造りかゝりたりわれは木柄のかはりに
精煉のつか木つくりふち頭までもつくり出しにせむとおもふはいかに○
元興寺の塔は聖徳太子のはしめて御建被成たるにて千有余年になれ共火
災に逢ことなければつゝかなし人のふむところ足あとたけ壹寸も其余も
深くくほみ居る也軒の玉水の石をつらぬくためし今にはしめぬことなか
ら數のかゝるは可恐もの也これに引くらへみればこゝろは形なき故か修
行してみれ共いつもく昔のことくにてしるしもありしところなしなら
へ來てつくりしすこきの槍の柄めあての下け置糸にあたり先よほと丸み

つきたり漸三十万本以上のことなれ共數のかゝるはけしからぬもの也これに
てもこゝろの修行の六ヶ敷をおもふへし邵子か無口過易無身過難無身過易
無心過難といひしの尤成ことをしる也元興寺の塔はしめて建とき大唐の大
工らか來りてひなかたを造り天子の窺覽にいれし百分一の塔今以極樂院
にありし也いにしへのことも今のこともひなかたおこし繪圖の類ならて
は貴人の普請の談判はならぬ事とみゆる也○ならの大佛は豊臣殿下のつ
くらせ給ふ京の大佛やけしのは日本一躰の佛なるへし豊臣殿下は大佛
か地震にて傾きたりしとて弓にて射給ひし躰なれば玩器の大成ものなる
へきか松平伊豆の智恵にて癡物今かたもなく成たり奈良の大佛は銅のま
ゝ故今以 聖武帝の隆佛のこと後世にのこれり残念のこと也いくたひも
やけしかと首のとけて落るはかり軀はつゝかなし木ならばはや灰に成て
千年に近きものなるへし伊豆の智恵をおもひ附て後年木につくり替る大
器量の人もあるへしやしかし此ほとは土地の人氣に拘る故に少もわるく

はいはす信仰のつもり也○俊藏か方の少女うたふを聞はならの大佛さまの小便たこけた道理で町中はしゝたらけといふ也風來山人狂文集にとてもするならば大成ことしやれならの大佛の穴しやれ

といふ童謡を漢文に書てありいにしへより似たることをいふもの也俊藏方の少女伶俐驚こと多しこの頃吳服やより單^{ヒト}もの地をもち來り女共かかれこれといふに交りておなしことをいふ故におさとか戯にそちもみなくの單物よれといひしにこれはたれくとて予よりおさと御隠居さま御二人其外下女らにいたるまでの單物をこれはたれくとみな撰わけてみするに縞も小紋もみなとすと人とに相應せりことし四歳の少女にはけしからぬ事也とてみな舌をまく也きれいすきにておとなし、痲勞の症を六七歳より十二三までのうちに發せぬやうにこゝろつけたきこと也よつて何も教ゆるなどいひきかせ置也○市三郎おさと此ほとも江戸とかはらすとかくに臥かち也市三郎はきのふ往返一二里内外のみちを歩行けふは

つかれて弱りて又臥せりおさとは二月下旬は二日三日大によりしか惣次郎一件にて又くゝわるくし節句にもものあたりをして又くゝわるくし其上風邪はかたらすけるくゝはなければとも市三郎ともに互にねたり起たりにて居る也よつて御文などの義に及ひかぬると申也

○十三日 晴 家來の内龍介か日々易を一多ツ、持出してあさく論する事也けふは升ノ卦也升はすゝみのほるといふ卦也升みのほるに大善にて吉を得更にうれふることのなきといふはいかなれはといふに巽を入とす順とすいかにも順にして入は出るの反なれば出はりたることをせずよく人に隨ひ坤を柔とし地とす地のことく手ひきくいたし柔ならされは升ることはならぬ也巽下坤上のみなすゝみのほるにこゝろなきものに升ることをいひありてさて今にてもものほる人の升りてあふなけなき人はみな柔順にて出はりたることをせぬ人也よくなりたくてかくするにはあらず自然のみちかくすへき事也と段々論してみればいかに間違て予か結構に

もなりしやこれにてはしくしる筈の事とふかく恐入たり○きのふの穢多
來りて革鏢一枚を持來り御ためしを願とて差出たり鏢下地也厚サ六七分
もあるへし只の牛皮也三枚合に亦よくすき通たりなか／＼切へくともみ
えすしかし只もかへされすよつて貸刀の海府にて切らせみしにはじのか
たに當りしは切落したり中は三太刀程みな八分九分落にて二ツにはなら
すされは鍛方かたにもよるか也穢多大に悦ひ此躰に亦は少もきれぬ様に
はならずとも壹分貳分切位迄に亦鍛上又可願御影にて大に心得に成たり
皮鏢は切ぬ計聞しにとて厚く謝して行たると家來のかたりき大和は武器
の穿鑿なき所なればかゝることのある也此穢多余程志有之もの、躰也
○十四日 雨 先達亦紀州に御家來之内に昔明智左馬之介か冑を求得しよ
し談話ものにみゆ今もあらは寫もらひ度よし森下孫兵衛にたのみ遣せし
にこの冑今は紀州の御寶庫に納られたればとて其旨一位殿に聞へあけし
にわか家のものを左衛門尉などか聞知りて寫望み乞ふこと満足せりとて

書工に仰られて寫出來たりしにこれにてはあし、かくせよとて三たひま
て御世話にて書改しとて圖を孫兵衛持來りてくれたり繪によるときは頭
なりの八枚はりのこときもの、山か谷かさたかならぬものをはりかけた
るにてうらに朱にて日根野織部正明智左馬之介に授與すと朱漆にてしる
しあり甲の緒は木綿さなた也左馬之介は反賊光秀か臣なれ共主人の爲に
潔よく死せし故に其遺物を御三家にて御秘藏となさるゝに至る也つたへ
聞昔細川三齋の明智光秀か方々行向ひし時与風左馬之介をみられて家來
にくれよと所望せられしに何の見所ありて御所望やあると問ひしにこの
御家來は御主人の御居間の外を過るに平服して恭敬のさま實に嚴君の前
にあるかことく也かくかけにても主人を敬ふものなればうしろ目たきこ
とはあらしよつて所望する也といひしにあればとしわか、れともわか左
右手にかふるもの也とて斷られけるとなむ今おもへは滋賀の湖を馬にて
わたりはな／＼敷ことに亦名を万世にあけしも常に主を敬ふことゝるの深

きより起るなるへきか車の聲を聞て 天子は冥々のために行ひを改とすとて遠伯玉なることを南子か知しと同一ことにて一拜之内に忠死のことを三齋のしられしもおもしろく朱子か敬は徹上徹下の教也といひしもおもひあたる也左馬之介賊臣に隨ひて不義をとみにす備るを君子に求るといへは可惜こと也され共死の躰なとたくひなき見事なること也きよつて今も人のかくはいふ也士の死する場所は六ヶ敷もの也去年か久世のたのみ本多中務大輔の家にある佐藤繼信の冑の寫をもらひしこの繼信といふ人只一度戰場に出て矢に當り死せしはかりなれ共豊臣殿下の明を以中書忠勝ならては日本に此冑をきるものはあらしといひしは一瞬の間に死を決して忠死せし故なるへしくれくも士の死ところは六ヶ敷もの也されはとて練りては出來ましおもひ附たる即坐かよかるへきか夫には平日のこゝろの養ひかた第一なるへし

○十五日 晴 盛姫君様隠させ給ふこと江戸を申來りしよし所司代達

しあり鳴物停止等之事夫々の觸るゝ○奈良の學問此ほと興起せさらむにはいつをか期すへしとて儒者か申旨もあり與力共々町々々の共學問所の罷出候様ふれ可申旨申に付我こたへしははしめこゝに來り學問所を梶野か建しか名目のみに成居をなけき居且わか代に學問の世話あるといふもよきことにて江戸のきこえ等もよからむとおもへは潤色する政にはよからむかなれ共この土地の學問の被行様には奉行の深好めるもの十五六年以上勤つゝきて自然に化せしめたらむには猿樂の十分一も被行へきか今わかいたつらに世話するとも一たひ御用召にあらざるを復古し又はつか成ことるへし夫々前々の學問所の出る先格の等閑なるを復古し又はつか成こと成は學問所の多く出席せしものは少なりとも褒美を與て利に成か名聞に成かより引いて誠をもて教たらはうそより出るまことゝやらむに其内には書物を實によむもの出來かも品に寄するへからざる也わか子供家來の世話をやき教みるに誰も出精せすまして奈良の町中々の共々學問

事實の世話二年三年にて可行届ともおもはねは古格之流れたるを復古するは格別外に新規之考に軍役にあり出すかことなることをゆめくすへからすといひ遣したり與方同心之内に四書五經以上をよみしもの三人なし奉行所之講釋にわれ奈良奉行已來一度の欠座もなくはしめより畢りまで敬而手をつき頭をさけてきくことなるに與方同心共の講釋聞に出るもの青二才二三人に不過この躰にありなから市中之もの書物之世話決而行届かぬ也よつて數多く出るものには褒美を遣し引出し其外かり出すことは止させたりかゝることよく聞へてつまらぬ弊をのこし下々に徳はなくて難義すること多き也みな遠國奉行所之ふり合こゝに不限かゝるもの也○學問所之出席帳を月々爲上て一覽し并去年中多く出しもの三人に當正月手もとより褒美遣したることありしよりかゝること言出しとみえたり

○十六日 雨 けしからぬあつさ也八十度に至るこの頃脚氣に足に腫氣みゆる藥なくして治すへしとおもひて麥と小豆はかりを給たりされ共はれ引きらす無余義例の唐厚朴の入し大承氣湯を用ひしに一ふくにて治たり世に脚氣のもの小豆麥はかりに此藥を用ひは雪に湯をそゝくか如くなるへしこの頃考少の不快に而も必藥用する少も病なければ早くこゝろつけてくすりを止へし病とくすりとつり合せて藥か過れば酒をのみて度に過るの害より甚しかるへしされ共全身に凝かたまりたるものなく實に無病なるは並の人には先ツは少し無病といふは多く不穿鑿也

○十七日 雨 あられふる けしからすさむし夜はみなこたつ也○けふ例の通御清なればなにも食はぬにくわいを煮てひる飯の菜に仕たり例の通菜は食せぬことなるとて咎しに菜にはあらず御水氣御藥也とおさとの答ければくわゐの水氣のくすりたることはきかぬこと也汝此節不快なればくわゐにて惡水をはらはせむといふかこはなさけなしと怨したればみなとつといひて飯を嘔たり笑ふことを嘔飯といふ熟字の實物をみたり

○十八日 晴 さむさ殊に甚し例の通拂曉に鐘の素こきに起しに十七日の月まつの木の間へのこりて泉水よりけふりたつ様子寒中のことし○おさとの不快とかくにとはなれせず子細はあらしとおもひながら案しらるゝ故に興福寺の衆徒勝南院宮内といふものは奈良の醫師中の上手にあり一乘院宮の御七をもいたす故に今日呼迎へてみせしに三卿并我が兼ぬいふ通り一毫を不違醫案にて元來躰よりも痼氣強く其痼にて躰ももち居位也今何といふこともなく當時患る所は一通り之風邪なれ共躰弱き故肥立ぬ也しかし不遠こゝろよかるべき也案することはなし元來氣のこりたるなればよく保養して世のことを忘れて二三年も病ひをしつかに療治せは以前のことにくにはならずとも快氣はすへしあまり世話をやくはよからすよつて一日に三度か二度は必庭より馬場を歩行すへしといひて長くはかゝるなれ共六ヶ敷病にはあらずといふ兼ぬおもふ所に少もかはらすよつてけふよりこの醫のくすりに轉し且安心したりわれよつていふわか妻は

美人也よつてヒイトロを以譬へむ玉器を下女に扱せ臺所に出したらは三日四日にて微塵なるへし其器にても手もちをよくしあまり遣はすわたにつゝみ宮に入置様にすれば百年もつゝかなし是天稟のうすきものの長壽すへき證據也といひてわらひし也これにはこゝろにたのしむことなくてはならずたのしむことか少しにてもしれたらは今迄心配とおもひしことみな芝居船遊山と同じことなるへし宗次郎を見すや人の叱をもきかす遊女かよひして果は相對死したりかれ必ス死といふには死ぬうちに大にたのしむことある故なるへし宗次郎かこゝろを善に用ゆること也といひさとせし也され共このこと予にも出来ぬ也樂記ニ樂則安々則久々則天々則神とも中心不和不樂鄙詐之心入之ともあれはいまた樂は出来ねとも生涯の内に樂しみのところまては行く積り也論語ニ樂ハ鐘鼓をいふにあらすと仰られたると同じことに而物をたのしめは物つきて窮する也樂なきを樂の位にいたりて其樂一生涯しはしもはなれぬわけ也

○十九日 雨 けふ人にとこよの國といふことを問はれて雄略紀に蓬萊山とかきてとこよの國とよめりされはとこよの國とは蓬萊山のことなるへしよつていふ蓬萊山はならにて多くみたりわか考にては蓬蒿蒿菜などいふ字にて蓬も菜もくさふかきといふこと也則日本にても蓬生のやとうたによむはくさふかき庭などある家のこと也さて又とこよとは常といふ和言世とは御代御世などの世にて何かしの帝の御世などいふ也いにしへはからも日のもとも天子の御陵は土を高く築きて山のことくせしもの也御はかばかりは其御一代きりならてとこ世なるもの也さて蓬蒿蒿菜のことく蓬生のやとのことくなりて拜み奉るもつゆけきならずや蓬萊山とはもと墓所のことをおもしろく偶言せし方士のはたらきならずや大和にいくらも多きものそといひて笑ひし也人の死して天地の氣の集りたるものちり／＼になれはこゝろの類は身の火と同じく陽に屬し精氣は天に歸り躰のときは陰に屬してみな地に歸すよつて人死して天へのほると

欽明紀に新羅にて伊企羅の殺されし時其妻のうたにのからくにのきのへ世邊にたちておほはこはのまほひれふらすもや大和と邊むきてとあり同時のことにあひれのことたしかなり天平が二百

いふ定ある故に黄帝の天に昇り給ひしなといふことも登遐上仙などいふことをおもしろく偶言せしものなるへししかるをまことにいかのほりの雲に昇るかことくみる／＼天へのほりし様におもふはいかなることそやみな偶言なり偶言は虚言にはあらず旅宿を偶居などいふ類のことをかりていふ也易にも鬼を一車にのすなといひて是も偶言なりといひき其序に書の信しかたきは松浦さよひめ石になりしといふことありて世にいふのみならず今も肥前より石摺すりにして出すをみれば大石のたかひく得しられぬ姿なるもの也これをひれふる山にてさよひめの姿と昔よりいはし筑前國司山上憶良か天平二年のうたにさよひめかことを詳に序文にもかきなから石になりしことはなくのちの人いと／＼のちの人とわけてさよひめかことをよみしうた万葉にみゆれと石になりしことはなし後人の偽みなこの類也よくこゝろしてみよといひき子文に易を講してきかせあとにて前夜のうたを互に出して批評する也その序にかゝる議

年前のことは
なれは混雑
すやい

論すること也 ○おさと不快大にけふはよし又一段安心せし也

○廿日 くもり 江戸の状を出す鹿の何書上置候處品々御尋有之右之様子にふは必鹿のこと評定所は下るへしとおもひ申候

○廿一日 晴 金房正貞ノヤリうりものに來る所持之やりと分毫を不違阿州の豪農の衰しかうるとの事也關阪の兩役へももち行しよし也柄等至ふよし二兩ならば買置へしといひ聞せしに六兩也といふよつてやりに六兩といふ價日本中にあるましといふわけをいひ聞せて返したりしらぬよりのことゝみえし也

○廿二日 晴 與力共に居間にて酒給さするわれも給る元來禁酒なれ共兼ふこのときは別段と定めおけはなりこのころは與力共みな實にこゝろより精を出す様子也先達を脇差を遣したる老人并わかきかうちにて二三人はよほと精を出して覺ゆる積也武藝のこといふ故にわれは決而すゝめすする氣ならばせよ好めるみちなれはともにすへしといふ醉るわかきか

居之間の三之間は稽古場同前にてむかし人の能をせし所を稽古場同前にしておく故にそこへ行て手ならしに重くつくりおける鑿刀を遣ひみていろくいふもおかしきこと也われ酒宴の坐はことに忌きらふことなれと上下和して醉るかうちに其こゝろさしのみゆるもありて樂しみとおもふときはみなたのしむ也酒に醉ふをたのしむにあらす醉るかうちのあやをあらはすうちに樂へきところある也

○廿三日 晴 大佛の開帳にきやかにてひかさすり合ほとこの所もあるよし也そめか小女をつれまうて歸りていふ木綿の裾模様にあかねの湯具にて草鞋をはき子を負ひたるもありあるは背中へ眞わたをはりつけて行もありそれはこゝの風にてそめか方の下女の母來るに白き眞綿を肩へはりつけて來れり歸りてわらひしにこの邊にては上下共に眞綿をいれてきるものなしみなくなるみわた也よつて奢侈にはこるこゝろにてかくわたを背負あるく也わか母はみつから蠶する故も多くわたを貯居て既に背負步行

綿は百目に近しとてほこりし也殊に白きを背負歩行を以壯觀とすることのよし也よつて染かかの下女におさとらか着類にわたの入かた時服拜領のことまでをとき示せしにまことゝはせずかゝる衣あらは一生涯のおもひ出に拜みたきなどいふときゝて大和のことを吾妻のものかわらひと葉は大和ことはいふに至るに時勢也けりとおもひてあつま人大和こと葉をわらへるもうつり行よのさまにそ有ける

○廿四日 晴 このほとかすかの御やしろのふちさかりにて紫の雲の棚引かことしといふ也奉行且は一日一寸出ると一兩宛かゝる故みなはなしにはかり聞也○そめの小女開帳より歸り俊藏の前へ手をつき開帳に行しにほしきものなしあかきこしまきたる女共うらやまし造りて給はれといとゝおとなしくいはれて俊藏叱りもされす錢のいるに頭をかきたりしと也俊藏宅にてねころひしに佛壇のかたを足しせしにこは無勿躰とて教られしと也俊藏夫婦利口の小女にて甚氣かつまるといふ也四歳には出

來過たり壽のことを密にきつかふ也

○廿五日 晴 けふは初對決の公事十口あり八時過までかゝるけふは中宮寺宮御得度の恐悦として使者を出し昆布等奉る使者は二之膳にて濃ちや薄ちやまての御料理下さるゝといふ也この宮御十六はかり也先達御目通せしか至る美女也一乘院宮と御夫婦にせはよき一對のひなの如くなるへきにむたの道具にしてくさらするとはをしき御事也○異朝^ヤ日本傳と呂東萊か全集を小池坊よりかりて一覽する日本傳にはこゝろえになることありておもしろさに四ツ迄目を不放みしに三冊よみたり

○廿六日 晴 異稱^{本脱カ}日傳中ノ二兩朝平攘録の内に小西飛彈守か明へ行ての筆談あり其問答をみれば飛彈守と沈維敬と全になれ合て明の天子をも豊臣殿下をも欺奉りしものとみゆる也それ故に清正はしめの功勳を水の泡にされたるもの也われ夫に付おもふに大家へ行みるに取次のもの必貳人ツ、出る也大家の家老を呼て達することあれば必留守居の添て出る也

是大切のことを聞あやまるへからさるとの爲也しかるに大事の使をたかひに壹人ツ、のうなつき合といふはいかなる事そや尤明より維敬を後には正使にはせさりしかとも^{トウ}純^{ジュン}綉の子弟を向てそれへ維敬を添たる事故よきやうにされたり既に明の勅書を五山の長者か正敷よまぬならば日本も明も小西と維敬の兩奸に陥いれらるへき也異國へかゝり六ヶ敷ことなどは負けすおとらぬもの二人をして書簡などはよませも講釋をもさすへきこと也可恐事也そのころの人々智勇は日本前世比類なき人々なれとも韓文にかけては全に予らか西洋横文字をみるかことき故にかゝる欺にも逢ひし也同書中ノ四二ノウラニ泉州府同安縣嘉禾嶼は厦門ともいひてその雲頂巖よりは日の出に日本を可望とありこの厦門は今イキリスの出はりと成たりされは日本とは極近きとみえたり

○廿七日 晴 御用日目安うら書わたし五十口^{クチ}あり○このほと東大寺の開帳へ五万人も一日に人出るといふ也○おさとけふはかゝり湯を遣ひ

髪を結ひたりしかしいまた全快には中々あらずさりなから元氣等大によろし○日くれかたおさと市三郎をつれ馬場に行かむとせしに御用状來るとの事に順作差出故夫婦椽頬にこしかけなからよみはしめ先以 母上様御機嫌よきを奉恐悦其上此ほとは御休薬との事恐悦中の恐悦也○新右衛門日記一覽候おもひ合せ候事有之候先年調役つとめ候節いかにも浮費の多きを歎きて堀田間部兩侯に密に上書せしことあり其譯ははしめ文政六年に寺社方調役の助たりし時料理向水野左近將監松平伯耆守などみな只のまむちう羊羹位のことにお酒に猪口など用ひしことはなく備後守殿其頃は攝津守と仰られしかこゝにては盃洗へ猪口を浮へ出したることなりしか同十亥年に助役に參りしころはみなこつふにて菓子も十五匁以上にて奉行に入用には二分位の事之由に承候けしからぬ事とおもひしに脇坂中書の再役にお改正ありしかこれも名目はかりに候ひき畢竟遠國奉行と同前威權調役の手に落候お奉行は只轉役而已被心懸候お調役之御機

嫌のよき様を專といたし又調役の勤向も寛政に元濟に見合候は格外に
増長いたし候間よしや一旦は改正ありても名目はかりに可成行候是も無
余義人情に出候事に申サは戦國の軍士も同前に大將もたれかゝり勤候
間自然と氣をとり候様にも成行候事に有之候され共折々引かへし不申候
ゐは大造に成行候頃と當時の様子とは又格別なるにておもひ可被合事
に候調役は寺社奉行を御老中御勝手懸り氣にまつとめ寺社役をは公用
人之積にゐいたし度ものに有之候右心を得に調役よりまことに儉約を
申立候得は被行申候調役に不限都而腕をこき候役人は諂ひ候事を忌みき
らひ候尤成事に夫はさあるべきことなれ共孔夫子の侃々闡々の御様子も
あることなれば夫をもととして一應申述候禮記にも情はのへむこ
とを欲し辭は巧成ることを欲とあれば辭巧はもとより聖人のみち也詩經
に仲山甫の徳を稱して令儀令色と申候間とり廻しよく顔つき柔和成なる
かことゝみえたり其外聖人の孫以出之とあれば謙遜して容易のことはい

はす逞顔色怡々如たりとあるなともいかにこやか成ことに其昧巧
言令色とかはりたることはなけれ共小人は利欲のためにそれをことゝい
たし候間仁の鮮に陥り君子は天下のため又は忠孝のために用ひ候事故
恭敬のいたりつくすものになる事に付新右衛門此ほと御用多に候は、別
ゐ寺社奉行は神のことくにおそれ敬ひ候様と事いのり候われこのこと
に三十分前後に大にこゝろ得違ひありしに謝顯道か剛直なる人なるに前の
説を書おかれしをみていと後悔する故にしるす也○中馬のめの字の訓
は御同意也わか刑方隨筆のうちに延喜式かを引おきしか中馬とかきな
しなのとかよみてありしと覺へし也御覽あるへし乳の字の説はいかゝあ
るへき○龍野侯の別業へ御出に付母上とならの御尊ありて御落涙と事
みて奈良にゐも又落涙いたす也夫に付已前のことをいひて藤左衛門等へ
御教戒ありしとの事至極々々感服々々よきときによからぬことを考へよ
からぬ時に又よからぬ事に貪着せぬを以參り候事歟と覺申候孫子か九變

のうちには智者之慮必難於利害といひしは軍はかりにはあらず平日のことによく通徹すること也馬の稽古至極よろしくと存候馬は數をかけ候も乗候上にも南部仙臺の中次流を追可止こと也可成はてんまはかりのりたし細川藤堂讃岐尾州などによき馬役有之候歟に候岡崎侯は必馬は上手なるへし沼田逸平次か弟子かもしらす若弟子ならば御願ひ候て讃岐よりかりよせ逸平次著述の書物類此節早く御うつし候へ追可鐘三郎など心得に相成悦ひ可申候○關宿へ甲冑御見せ被成候も其通の製作に出來候由右へ甲は宗保工夫にて本家にも形に納り御讓申候甲并此節ならへに參り候甲松平肥前守着用以上三ツならては無之候宗保考にも平士着用へ甲冑三領か出來候内一領二十三兩にも櫻井備中守に遣し候右はしらぬものに被賣候義万一有之候もは可惜之至也重助に御談御試可被成候其頃相談も有之候ひき實用専らへ甲冑にて候二十五六兩までならはよろしく候大草能登守に宗保の陣笠鏢等有之候拙者世話いたし置候關宿侯御父子の事御讓受に

もよろしかるへく候○六日に爲替金之書狀とゞき候由太郎かあまへ候躰等如畫かれこれとおもひやり候○かななきの訓御尤に候○九日豊藤の別莊へ母上御出太郎おしけ等迄參り候由豊藤へ厚く謝し被申候様いたし度候○内藤宿にてわかき妻の死して夢まくらに立夫の陽物を切て墓へ埋めんことを乞ひしは奇談也五雜俎に妬み深き女のことを多くあけて其内妻死し再縁せしあけの日亡妻の亡靈白晝に來りて劍を抜て夫の陽物を切て携去しといふはなしありしと覺しかよく似たること也○まか玉の貞丈の説御申越忝候○このほと醫者のはなしに異國船參りたるとの事うらかへ十艘はかりとの事之由無覺東二三そうならはしらす十艘といへは必いつはりなるへし彦根の御備被仰付たるによりて大かた京都にありまを傳へしものなるへしといひ遣したり今日の狀に彌いつはりをしる已前林大内記かもとへ西國かたの書生より異國船旌旗天を覆て來るといふ文通ありしとてある御人より尋ありし故二三艘と申ならは驚も仕へ

く左様に夥西洋を参り可申譯無之偽とおもひ候へは安心いたし候と申候事のありきかゝることに大造成はなしはみな偽の多也

○廿八日 くもり この節一乘院宮少々御不例也これは全御英氣のくさりて御病の起りしなるへし醫師より申上候而典藥頭等衆評に而關白殿下の御聞に達し御保養のため春日山興福寺地中までは御忍ひに而所々被爲成候由也衆徒にて醫師いたす勝南院方俄に御成に而七ツ頃より御舞樂等ありしよし也勝南院は漸に下女下男の一人ツ、も遣ふ位のもの也夫か宅に御成さを困りたるへしけふ勝南院のおさとか様子見舞に参りてのはなしもおさとは大に快よし動氣大に治り腹大にゆるみたるといふ也この節興福寺南大門等御門主御再興の思召に而内々は紀州の一位殿の御助力あるといふ一乘院宮は已前なら市中の一錢の出してもなければとも此節は當時の宮には一同御歸依申上御世話申上候ものも多南大門等御再建有之は材木等献上いたすへしといふ浪華其外之町人共よほとあるといふ別

段の御才子にて御徳のある御かた故いつ方に而も奉歸服也當年二十四歳被爲成殊に御美僧なり一度御前近く被召候而御咄等承り候と實に御行届には驚く也夫故に人の歸依するとみえたり○良右衛門かたの小兒大人ならば喘息のやうなるものよし馬何とか申病症を發したり早くみせたる故にまだ療治なるへしと醫師の申也○きのふ俊藏東大寺之開帳へ参りたり夥寶物之由大佛之蓮華坐はちりに埋れしか此ほと人の参詣に而琴を拂ひしに蓮のはなひらにいつれも悉佛を彫あり平重衡のみならず天平寶字已來度々兵火にてやけたれともはしめ出來たる時は金のはくを至て厚く押たるものとみえ火氣の少所にはいまたはく少々宛のこり居黄金のひかりみゆるといふ也○金井清宮崎清一郎を近習に申付る其外用人共取計にて中番八助足輕に取立る○市三郎こゝろよしけき刀術遣ひ遣す○醫者の申に寄毎日必おさと畑并馬場の邊まで参るよめなつくしなとにあきたりほとゝきすまつこともなきならのさとたんほよめなをくひつくしけり

といひて笑ひし也

○廿九日 雨ふる よしの川のわか鮎と大成鱒を小田又七郎より贈りたり右之謝に酒二樽遣す大和は鮮魚のなき所にてあゆの類を尊ふ也万葉に年魚とあるも紀に 神功皇后つりたまひしといふもみなあゆ也 神後のあゆつり給ひしは肥前にてめつらしとのたひしま脱カをあやまりてまつらといひ今松浦とかく也

○晦日 晴 さむしみなわた入のかさね着也こゝの人はなしに綿入を着てこたつにあたり蚊屋をつるといひしをいつはり也とおもひしか實事也さむきはよけれと蚊のはやきにはこまる也

○四月朔日 晴 朝ことにさむし乗馬するにわた入にあわせ出す手かゆきまてにひゆる也霜ふりしかと人はいふ也○けふ銀百匁はかりのことにて兄弟の訴ありけしからすおもふ也新右衛門等かこときものもあるにと

おさとゝいひし也○良右衛門か方の小兒こゝろよし

○二日 晴 少々あつく成きのふ醫者に羽織遣し酒給させしにのり地にあいろくはなすを聞はいかなる時にかある宮方の坊官を上坐にて與力とかいふものゝもに酒爲給しに酒たけなはに成て能役者出て舞うたひ興のあまりに布袋和尚の舞といふされことせしにかの坊官か酔るまゝに脇より帶をときたり役者の腹つき出せしをおもしろしといふまゝに終に役者は丸裸に成て舞ひしにちうくの居るかおらぬかはしらねとも鼠いろのトクヒロいとくなよひたるを出し酔顔のうちに赤面を帶たりしに又かの坊官か行てとくひをしりのかたに裾キヨを下たるかことくせしに役者大に憤り坊官に組附たり役者は裸にてとくひをさけ格衣着たる坊主とつかみあふはしめは戯也とおもひければみなはらをかへて笑ひしにははこうし果てうちより引分しかさても酒の理に陥てりてこまりし又ある奉行は狐を好み猫を愛し給人に狐かゝりものありよつて常に來る商人か諂

に春日山の猿をとらへ來りてまいらせしに大に叱り受て五十日の押込に成其商人かあるとき狸を殺して五十日の過怠牢舎になりしと也其人の猫の子には肴代二百疋に二人扶持にて門番にくれたり江戸へ歸なほ二人扶持は來り月々に飛脚して猫の安否を申遣し猫は書狀のかほりに足へ墨をぬりまきかみの上をあゆませて夫を江戸へ遣したりさてもいろ／＼の御方もありけるよとかたりき慶長の頃ともいはさりしか名をは聞洩しつ

○三日 晴 都筑金三郎來る是は同人の麥作見分として大和之支配所を廻村いたし候也日くれより九ツ頃まではなし酒など出す去年々今日のころはならぬ來るとのはなしありて深くてのしみにして居し也互に奇談珍話あるにもあらずみなしりたる江戸のこと也しかししみぬもろこしのはなしよりも面白く夏のよの短きを歎たるはかり也

○四日 晴 このころのはやりものに一昨日ころより腹いたむとて手當をする也家來か出し時折節食事いたしなから御用談せり粥を給けるか

此小刀江戸に於てはめつらしく價も高し
正しくもす
はたのみ置
て下すへし
幸三郎に御
尋あるへし

はや三盃也いなやと問ひしに既に四盃に及ふと給仕するものかいふにて驚てやめたり御不快中にはけしからぬ御食と家來か笑ひし也この頃考に亦不快なれば麥の粥を食ふ也はらの早くすきて藥より効あるかことし

○五日 くもり 千種三位有功卿のつくられし小柄小刀をたのみ置しに京都を今日來る江戸にはめつらしきもの也上方の人々はわきさしなと造らせ此人近來のうたよみなればうたの彫物なとさすれとも小刀まで也一向に實用にはならぬ也たにさく添てあり

やき太刀はさやにをさめてますら男の心ます／＼とくへかりけれ

富士と近江の湖は孝靈四年に一夜のうちに出來たりといふ俗説は近きこと也赤人か富士の長うたに天地開闢のときよりこの山ありといふ意によみあり神のつけ夢のはなしさへにこと／＼敷いふ日のもとの風なれば今いふことの類あらは赤人か定ること／＼敷よむへきこと也○ならにて可成なる町人の弟よからぬものにて無宿に成兄のかたへ來てあはれしと

のこと訴るによりて召捕て入牢せしめ其ことを尋みるに二兩はかりのこ
とを争ひてことに及へる也さてもよからぬ兄哉とおもひてきくうちに父の
あるよしを申に付きのふの吟味は其まゝにて弟を嚴敷叱り置たりけふ其
父を呼出して與力より尋させしに弟はよからぬ奴故兄へ手向もすへしし
かし私には兄よりはなし候事は候はすといふ故に兄へ汝か訴あしきとはい
はすされ共父あるに弟のことを父にとはすして公へ訴るの理やある又はつ
かの金錢を以再ひと得かたき弟を入牢せしめ親をして内心に患しむる理
やある汝と弟のことはわれ既にきのふ弟を嚴敷せしなれ共孝のみちに於
て大にかけたる汝か心はわれ甚おもしろからすおもふ也汝常に孝也やい
かにと問ひしに其父何ともいはす涙なかつかことし事果て立とき父かわ
れへ向ひやれ御苦勞也難有御利害也とて禮をいひき尤兄は其席に
て慈悲願ふ故に追おはともかくもいかぬやつとおもへは弟の出牢はけふ
はさせすよくこらし可遣といひてたせたり父の不嚴よりかゝることも

出來なるへししかし禮をいふさま父のこゝろ可憐也是は與力等にさせて
もよきことなれと孝と忠とのみちを以われなら町を治めむとおもへは親
類相談の異見かてらに直吟味をするよしいひし故に禮をいひしなるへし
○穢多より誂置たる直たね注文のくら出來持參也急に居木迄は間に合
かね居木は木にてこしらへ來れりわか所持くも居木は木也よつて穢
多と相談せよとて爲持遣したり直たね一覽之上氣に入二背共に買入其上
居木迄革のを是非といひて又一背誂たり此職人此ころ決して切れぬ積に
而革鏢をこしらへ來しか海府の氏次の刀に而九分通切れたりこの度はき
れすと一枚きたい來りし故に幸也直たねにみせ相談せよとて遣せしに
直たね方に而弟子に差圖してきらせしに漸半分ほときれたり直たね勃然
として外の刀を以弟子をも取かへて切らせしに是も半分位きれたり刀は
鞘へ不納様成てのりたり直たね大に稱して革鏢の注文もありしとて今朝
穢多來りて禮をいひ歸りしと也直たねか刀に而半分切れる位ならば刀は

かけて勝負の時決してきり落さるゝ氣遣なしよつて鏝ふち頭くりかたの
つくり出しともに誂遣したりねりくらのこと居木共革にゐは中々五兩に
ゐは出来不申はしめの考主故われに一背は可造直たねの分は五兩にては
斷といひしに外にゐは全々直段を以世話いたし可造直たね分は五兩に
造り候へとの事故受いたし來しとの事也わか古きねりくらは四兩にてか
ひたりと覺し也されは本惣ねりくらは五兩にても下直居木は革にな
くとも三兩より四兩までならば新右衛門など古物にゐ買置可然也よく吟
味せぬと半ねりといひて古きに眞は板をいれたるあり彰常とわか分とお
もひてねりくらの論もいたしめつらしきよき細工人もありしかいかいかにせ
む其贈らむとおもひし人はあらずなりて常世の橋にて空しく昔の人の袖
の香をのみそのこせせしは哀しき也○惣してためしといふと臺へのせ惣
身の刀を窮極してうつ也さほとにうつこと勝負の上に決してなく手にも
ちたるもの刀ののるまでには決して行かぬ故ためしにて一寸きるゝもの

は實事には三分か四分のわり也これ實事の甲冑のうすくしてもたもち
刀鎗のよくきれるを可用わけこゝにある也淺右衛門か先祖享保の頃吹上
にて生つり胴を切しに足へ重き石をくゝり附置て拂ひ切にせしと一雲先
生のかたられき新刀かかし刀は格別吟味之上決心したる差料并持來の刀
にゐ決して堅き物をきるへからすさし料にて後若懸念あらは淺右衛門方
に遣しためすへし坐興などにゐ決り切へからさること也良刀をわるくす
る人まゝある也わかされる人にも倫光の名劔を六十兩にゐ買ひかた物を
切齒をわるくせし人あり元來正宗にても堅物へつよくあたればはのるか及
かかくるかする也既にたしか成正宗の刀甲へあたり齒のかけしことあり
といふ也よつていふ士のさし料は備前物關打北國物高田ものゝ良刀なる
へし見事なる相州傳の刀決り士のさし料には無用也高貴の人々其外大勇
の人々などの別段なるは我等か論するうちにはあらず刀をたのみにする
中人以下の人の事也青江一類兼光の類相州の味あるともよかるへし

○六日 晴 昨夜暴雨○きのふ七半時頃に三月廿五日附之書狀來る先以
いつれも不被爲替殊に 母上様殊に御機嫌堀之内に被爲入候而早く御歸
り其外所々御寺詣之時下駄かけに御歸り之御様子御健之躰一同之よろ
こひに御座候石川良右衛門御目見願いたし候而來る廿一日には出府之由
申來候同人壹人之母有之九十才と承候目出度再會みな天爲に御座候只々
母上之御健に歸府之上拜願之事而已祈居候○母上より之御文に御初穂
等相届き候由御丁寧之御沙汰奉畏候三卿之歩行成かね候由こまりたること
入念たることあらは玄順之外有之間敷と奉存候○新右衛門之書狀林鏡藏
の人物をあけ候由うら山敷候同人學問も有之殊に一旦世上之險路の山より
險なる味をしりし故なるへししかし良心の少ものは却る世智かしこくわる
く相成候處よく相成候は全良心のある故なるへし松平豊前井上備前病死
之由氣之毒に御座候上地院と法號を備前はつけ置る御旗本に被殺候節覺
悟いたし候とはなし有之候ひきいかにや豊前は殊に長壽らしき人なり

しか病はいか成事か出來物の發せしよしにも承るまことにやみな命數の
あること也乍然數はかすとよみかすの定りあるを多く遣へは早くなくな
り儉約して遣へは長くたもつをとかく取越候工面はかりに朝夕かゝり居
候もの多く候この廓を踏破り候とよほとこゝろひろく相成候歎に候○四
ッ谷大宗寺の閻王の眼をくりぬき候は奇談にて其偶言の閻摩針の療治其
外ならの大佛の按摩にこしより下の世話尤新奇也大佛の清僧は受合に而
天平寶字以來の坐像に付けんひきにてよかるへき歎昔は手早きことをす
るを活馬の眼をぬくと申せしか閻王の眼をぬくとはいか成ことにや閻王
活閻王にあらずとも罰あたりて被縛しも尤也○御改革にて酒止養生に相
成候と之事至極也寺社奉行所之改革に而酒止候義度々也せめて三年よく
たもち度新右衛門勤中なとよく心して酒はなき様にしたくよほと身の
くすり且上之御奉公也輕きに似て至るかたき事也○爲替金五十六兩無
滞御受取之よしに而右之御わけ書并受取書御越被入御念候御事也○横瀬

兵三郎と申せし先代は予も知ル人に柳之間に出役より長崎手附に成至
る眞實なる人に御譜代の望なりしか不幸にして手附止歸番したり其子
不肖にして又夫によりて薩州之世子を其孫の腹に得る塞上の翁昔も今も
と手をうちて笑ふへしこれらにても新右衛門幸三郎等か御譜代に成し御
恩の難有ことおもふへし○宗次郎のこといつれも驚歎とのいつ方に
驚歎せざるものゝあるへしや從來之恩を忘れ不届之至又不便之至也宗次
郎は親敷兄弟なく父母なし八才の時よりわか手に成生したり右の縁は
と云は宗次郎か母か幸三郎方の地かりの下女たりしといふ迄也天下にわ
れほと親敷ものはあらねとも共に死せむといひしもの程の深切の百分一
もなし夫かために死せしなるへし可憎之至可憐之至也○寺社奉行所之酒
を止たしといひしは寺社奉行所に於ては大名の力に於ることなればはつ
か成事なれとも日々の酒菓子を一日に四拾五匁とおもひ月に廿日之積に
減して壹ヶ月十五兩一年百八拾兩也一年百八拾兩之儉約飲食の上にあす

ることなか／＼決あならず求めすして百八拾兩宛前にいふ數のうちを貯
置いかに可悦之至ならずや左傳に齊の田氏の祖陳完か行末をうらなふに
其身にあらずは子孫にあらむといへりこれ佛の因果報應の説なきうち也
勿論左傳は偽書にて戰國より末か前かの才子かかける演義ものなるへく
かとおもふこともあり韓退之も左氏の浮誇なるといはれ怪物はなしなど
中々以孔門の怪力亂神をかたらぬといふことを親灸する人の作にあらさ
るは勿論なれとも古きことをいひ古き書には無相違易の文言論語の文と
同じくして異なることをあけし様子其外文公か小學にあけられし條等
可尊こと多く杜預ほとの人にてわれ左傳癖ありといふ様子等を以おもへ
はよき書には相違あるましき也しかるに卜筮の辭のうちに右之ことを云
あれは徳の可積福の來る可恐ことかとおもふ也中々佛氏の説によりてい
ふにはあらぬ也○けふは百日目付の被參御用はてゝ居間にて料理を出す
也やきものは奉行みつから引こと也與力の正月の馳走に焼物は用人ひく

也かるき仕來とみえたり○吉原の大門は瓦やねかこけらかといふに江戸の人しるものなし傍になら人かありてそれはかくく、と詳に述たりわれ其咄を聞ておもふいにしへの戦に望む人今のことくに刀のこしらへ等吟味せしことなく甲冑も今のことくなる所には力をいれすこれ戦を専らにこゝろかくれば也今の人は甲冑と刀との穿鑿はかりをする故に詳也なら人は遊女を買ふよりも見物か専なれば却て大門のや根の穿鑿か専なり今の儒者と孔門の顔曾閔子々貢等をはしめ七十二弟子をよせ集て性理未發已發中などの秋毫の末をわかつことをいはずはせばたらは必顔曾のるいみな敗軍なるへしこれ前の大門の瓦屋根を穿鑿せぬ故なるへし身に行はずして話にする故也乍去われいまた其大門をみすなら人には大に劣たる不通人也これは則學文をわるくいひてせぬなか間のいるなるへし

○七日 晴 江戸屋敷出入之傳通院前の合羽や來る屋敷中のものとりとりにいふ也勝手役所に通し與助か對話するを奥のもの共みな透見をする

也地獄ニテ釋尊に逢ひしたとへの如し故郷を思ふことの切なるをみるへしこのわけ故に 母上より賜ひし御文のあまりに難有きにおさとなどは拜見も御受も必袖をすらすこと也よつて御狀の來り御返事申上候跡にあらは多分はつかれて煩ふにいたる也

○八日 雨 きのふ御目付の旅宿に訴狀箱上ケに參る例の通り御目付立合にゐひらきみしに何かありならにて箱へ訴狀いれしこと百年もなしとさくに珍らしとおもへは與力か蟹の柿のたねもらひしといふ手をして何かはさみ出せりみれば小錢一文あり則取捨申付たり是は御目付の旅宿は寺にて箱を門前に出し建札してあれは本堂の勸佛かとおもひあやまりて田舎のもの、錢をいれしなるへし絶倒也○東坡喜禪といふ書あり蘇東坡の佛を好まれし時の書也觀音の利益又は夢の告等老婆か佛を信するにかはらす慧能か法談經などは同日の論にあらず劣りしもの也慧能は無筆にてさへにおもしろきことをいひ既に王陽明か説は慧能を學ひたるとい

ふものもある位なるに東坡か大才子の宋朝にて指を屈する人なるにかゝることあるは解せぬことをいひしもの也一夜かゝりて眼をいたくして大に損をしたり

○九日 雨 きのふの灌佛會に

高圓の山の瀧にや洗ふらし雲井に仰くならの御佛

とよみければ瀧にては甘ちやにはならしと難する故に唐に酒泉あり日本に養老の瀧あれば茶の味の瀧あるもしるへからすといひし大佛は阿彌陀に而釋迦にはあらぬか○二月のはしめ瀧澤か方の侍たりし百姓あはたしく來りてわか病ひをとひたりけふもしらすへ出て外に病人なしといひしに不審顔する故に民藏尋とひしに山に於て木をこり居たりしに同村の者來り汝はしらすや南都の御奉行御病死に而鳴物停止の觸廻りたりと知らせし故に山を直に來りしかかつて其ことなきは恐悅也とて歸りし也是は領主植村出羽守近親南部左衛門尉病死にて領内に鳴物停止の觸ありし

を寺の僧か南都左衛門尉とよみて夫を傳聞せし也けりと此ほと用人のかたりき過に而七里の道をかけ附來れり深切なるもの也

○十日 晴 此ほと當三月廿四日四時信州善光寺邊大地震にて變地いたし人多く死し筑摩河の水つきたりといふことを專いふ也まことにや○このほと毎度大佛の登壇拜のならぬものあり壇に登り拜せむとすれば或ははらいたみ或は目くるめくの類也なら人にも遠國人にもある也このこと富士山信州の御嶽などにも間々あること也佛前には珍らし大像故にころにおくするるか佛の慈悲平等大惠ならば罪障の多きものほとあはれみて登壇をゆるすへきこと也佛の神通力に而一人を驚かして衆人を救ふかしからは盜賊とか大不孝大不忠の人にあるへきに夫にはさして聞へず首伐らるゝものなとよく賽錢を盜もある也東大寺の僧侶のうちの法をうり佛をうり利を貪りて僧にして賊なるものにこのことなし僧父老婆などにあるはいかにこれ神智の凡人にはかられぬことなるへし百年前後例も

なき悪黨といは、大鹽平八郎なるへししかるに平八郎大山并富士の嶺にのほり不届至極之書面を焼て天へ告しかと聞まことならは兩山の神靈を引さきも捨へきことなるに寂としてことなきはしらさりしかいかに○けふ表居間にて常につみ置書物を見るに孫子の前達而のたよりに云遣せしといふ武經開宗之内一冊七書之内にのせてありこはいかにと驚て過日は家さかし同前にせし本のこゝにのせあるは誰か仕業か過日も曾みえぬといふ書のありしに追而与風出しことあり柳助か宅下してよむはよけれ共沙汰なしにもち行ことある故にかゝる間違も出来る也いか成ことや柳助呼とて尋問ひしに一向にしらすといふ也然る時はこの頃みなくうちよりて調しときはいかに無りけむ不審くといへとも詮すへなしよつて先便に申せしことは弃捨になし給はるへし氣のとくのかきり也○當正月十一日丹後國竹野郡大風雨に而一夜之内に木津之中村といふ所に六丈ばかりなる山出來しとてみたるものか圖せしといふを與力共かみせたりま

ことか

○十一日 晴 わか兼元の刀と南紀の重國の刀とは重國のかた目かた重し遣ひみるに兼元のかた重くおもふ也いろく考みるに柄の太キ故なるへし柄太ければ指よく不廻よつて力いりかぬる也幸ひならには柳生但馬守家來出居に付宗矩但馬守法號西江院といひし人のさし料のこと并圖を乞ひしに今日來る戦場は用ひしよしにて太刀一振の圖來る鞘七寶作りに而柄下紺地の錦にあつみ帯取あり元和頃までの人刀はみな陣刀とて別に用ひしことを聞かすことに帯取といふものはやりなき内に三尺以上の刀をも自由に馬上に而拔たぬるものにてぶらくとして元和頃の歩戦には甚敷不自由なるものなるにこれを宗矩の用ひしやいかに不審也もしや御治世慶安前迄存命か嶋原一揆のときなと議論せられし人なれば其ころに儀式につくられたるにやあらずや本庄正宗の御刀又は池田勝入かさゝの雪の刀當時永井家にあるにても其頃のことするへし其外大小拵

書といふもの來れりこれは流義にていふものなるへし大に望を失へり○
八時頃新右衛門よりの文通來る 母上様御機嫌克其外一同之無事目出度
と之事被申越候趣は即刻返書出すおさとけふなどの返書は例の長文なる
へきを三寸はかり漸に書て頻に残念かる也いまたよほと衰居るとみゆは
しめ三行より末ははつと成と云也しかし諸事の世話常に十倍すあひるの
玉子うむより用人給人の子供のくさめ一ツも心配して世話いたし遣す也
是病なるへし

○十二日 くもり 甲冑師より甲二ツ面頬二ツみするいつれも五百年前
のもの也内ザルハチと商人共の云古代の甲あり鍔よからぬとみえよほとく
ちたり夫々年歴は新敷建武前後の後勝山と函人らかいふ十八九間はかり
かの筋甲來るいにしへの宗安か作也と云よほとよく鍔あふらきり居たり
興福寺にある楠の甲集古十種に
ものせしかと同しかた也其時代のものなるへし何ほと
かといひしに俊藏云二兩ともいふへしと云故に其價ならばわれ求へし氣

附の藥用ひて價を聞ケききを潰へしといひしに十五兩也といふ也相應也
かりて新右衛門方は遣し過日被申越候かたの着用に世話するともあしか
らすとおもふ位の甲也十兩ならば以前なら買置也定而大地の寺社よりふ
るく流出しものなるへしこの甲冑師古きそてをみせたりいにしへ紅威緋
威の差別ありて紅は衣類にも人によりならぬ事と覺しかさもあるへし袖
の様子に而は七八百年のものなるに今そめし緋ちりめんのごとくもえ立
はかりのいろ也其内かの緋威といふなるへし茜そめなるはいろ至而わる
くよくわかる也いにしへは織部に定りありて何は何を何々に何を加ると
いふ掟ありていろみたりならず今のごとく路考ちや梅幸ちやなと、いふ
ことを立派なる人か着用にすることはなかりし也

○十三日 雨 けふ盜賊吟味書をみる十八歳十六歳に而十ヶ所以上之や
しり切押込也其内九歳之節を無宿に成十三歳に而刀を抜押込いたし人を
縛り候ものあり勿論京攝并奈良の奉行所に而入墨又は追放に成十八と十

六なれ共みな再々犯もの也けしからぬ事也○東大寺と興福寺とは衆徒共甚敷不和也一乘院宮いたく歎き思召してこの頃東大寺之開帳御參詣の時同寺之衆徒共之内重立候もの三四人被召れ東大寺に御辨當之時同寺衆徒共之内重立候もの三四人被召出候御次に御わりこの之内の御酒被下一同和らきたるとき不和のこと法中に有之間敷と歎思召也開帳の序双方の和を予かとりもつ也如法にせよ興福寺の衆徒らか我意の振舞あらは直にわれに聞へよなと御意ありければ一躰の御才子にて御辯舌など御別段のこと故其御諭に兩山の衆徒共感涙を流して積年の憤みな消散してこの外の外に宮を難有かるよし也毎度なから御別段之御事也御二十二歳宮にはめつらしき御事也

○十四日 晴 冷氣也俊藏方之小女來るあまきものは下されすといふ也少々蟲氣故なるへしおとなしきこと故薯蕷の粉ありければ夫に露ほと砂糖をいれて與んとせしに茶碗をみて逃る也これは毒にはあらずゆるすほ

とに給よといへとはの甘きものはあしといひしに砂糖ありとて泣て食はす珍敷兒也おさといふ徳川太真殿の御息女轉心院殿と申せしは因州の奥かたなりしか婦人中の君子にてことく條理ありし御人なりしよし六才はかりの時にもあるへき御手習はしめありけり御つきの老女か御身からに在せらるれば人々あしきをもよしと申上るよし申上しに御淨書に師たる人佳點して奉れば又もわかあしきはいはすこれにてはよく書はならしとて泣給ひけるよし也往昔肥後守正之か大名の馬鹿にせらるること教へし家來に二百石の加増ありしといふはなしは正之は彼會津の神公と唱ふる人にて四君子十賢人のうちに世に選ひ舉られし人也童齡におはしまして正之と智を同じくし給ひしはいかなる賢夫人にやおはすらむ今この小女かよからぬといふことを惡臭を惡むかことく恐るゝに我らもあやからは早くみちに入へきを恥へきこと也

○十五日 晴 月並之禮受ること例の如し○けふ龍介に釋迦と孔夫子は

いつれかまさると問ければ凡のことそのはかりともものさしとありてこそ
輕重大小をもわかつへけれかゝる大曲尺も斤量もあらねははかること不
能後人のはかるともみな目分量なれば必大成誤あるへし答へきことにあ
らすしかし試に云はむ孔夫子は儒道の祖なればから人に問しならば孔夫
子のまさり給ふと云へし天竺の人か出家に問たらは釋迦かまされりと云
へしみな其道の祖を貴ふいづれも尤なりといひしに夫は遁辭也あなたは
いかゝと云故にわれは日本の將軍家の御家來也 將軍家は上野増上寺
の御靈屋ありて佛も御用ひあれば聖堂もありて儒道も御用ひある故に
其御法の通にこゝろゆる也しかし佛學せよとの御觸はあらず佛者の御稱
しもなし儒道は四書五經の素讀より藝術の御吟味等都る儒道を以第一に
武士に御教被成たる御家風なれば其通にするこゝろ得なれば佛のこと
に平日のことは少も構はぬ積り也と答へてわらひし也○此節はせし出入
之町人之内に墨をいれて黒キ餅を夥つく也當月二日已來のこと也怪敷

こと故内密のこと聞出す長吏か手下のもの不審におもひ手を廻して聞し
に薩州へ異國船一萬艘渡來右に付同家々祈禱のこと頼有之一山の大衆丹
精をつくし祈禱いたし候由と之事也一萬艘といふにて西洋のことしら
ぬ風聞のことよく分るしかし薩州の祈禱には相違あらぬか墨のいたりたる
もち多くつくといふはいつれ金もうけの祈禱なるへし○都筑金三郎來る
○十六日 晴 無宿異名きらすの吉藏といふもの人を殺し盜せしことも
數々にて強惡のこと品々あり漸に召捕たり懸りの與力柔成男なれば吟味
の節勝手のことをいひ押込をして人の女房を強奸せしにかくありきなど
甚傍若無人のことを白洲にていふ也火を附しことやあるあまりに憎き申
分哉一責せめて見よとまてにいひし奴也出生は奈良の牢屋の前の町のも
のにて母はまた存命也頃日奉行所より牽れて歸る途中にて母と往合しに
かの惡黨も忽にいろ青さめさしうつむきて行母は宅へ駈入けるか又も門
邊へ出て牢へひきいるゝまで見送りしと也われおもふはかゝる強惡のも

のにてもおもはず母に行逢ひしときはこゝろに亂るゝものなければ天より賜はりし性の善なるもの忽にあらはれてかゝる様子をもあらはしける也このこゝろをおし廣むれば孝子にもなりぬへし大孝は終身父母を慕ふことかゝるものにも一腔子中に存しける也かゝれば悪事をするは迷ひにて性質にはあらさりける過をみて仁を知るといふとは相反して鬼にもまさる悪黨か親に与風逢てうつもれかくれし良心の端を發せしをみて性善の説のまことなることをしれり○けふ延喜式其外の古書を引しものをみるに 禁廷にて佛法を御信仰なれ共神祭の御時は佛寺をいみて瓦葺といふよし也今もけかれの者をかはら物といふはこれより起るかとおもふ也○旧事記に号石上大神以爲國家氏神とありされは氏神のこと 崇神天皇の頃よりいふこと也氏神の子のことといふにて俗の氏子といふことも出來しか也吉田家にては氏子を産子ウツコといふかと覺し却るより所なきか○十七日 晴 東大寺の御宮に參詣いたす西照寺の 御宮も同斷也拜禮

畢る神酒并強飯頂戴之御初穂金二百疋宛奉るいつれも先格也○東大寺は開帳中に付 御宮の拜禮畢る寶物を見る懸物は第一に 天子の震翰并 東照宮の 御自筆の 御文其外 御代々様の 御書畫あり夥敷ことにて記すにいとまあらず古代の聖像或は 勅額之類あり其内頼朝卿の御畫像あり鼻の様子は太田備後守殿に似たり中高にて耳至る大きく眼は三白にしろめかちにて容貌不凡肖像なるへし後三年の圖八幡殿出陣圖なともしや肖像か少しく似たる所あり董の小さくらのことき革の御手袋を召したる鎧之御像也みる丸の螺鈿のくら并つほあふみ等あり二月堂には古文書類夥し道鏡の書あり能き書也其外天平年号の文書多く出しありこゝには錢かたと世に唱ふるかのかも毛の屏風あり鴨にはあらず轟なるへし夫を大佛に參る大佛高き足しろを作るたゝみをしきて側にあみることくに成しありけしからぬもの也此像大日とも釋迦ともいふ右に付るは神秘あるといふ也よくみるに蓮華坐に細密なる彫物悉あり可驚もの也こゝにも

寶物多し大佛を拜しかぬるものあるといふはいにしへよりいふことゝみえ東大門の古き畫卷物に一卷其ことをのみをしるせしありけふ例にあつくくゝとみるに大像をみあけること故高きより卑きに臨むかことく又銅かねの大成下へ行てうちをよく仰みるといふ氣味にて眩暈の病あることろ小なるものなとに恐るゝと病によりて仰みることのならぬものあるなるへし大佛を拜することのならぬは多く愚直なる善人にあるへしとおもふ也二月堂の觀音 勅封故前たちはかりの開帳也二月堂は眞の正躰はなし正躰は則二月堂の山也ともいふ也こゝより東大寺の八幡に參るこゝにも寶物あり八幡の寶物はあらこもの上に並ありこれ古風とみゆ春日談儀屋の甲冑などみなしかり古き竹のゑひら古き巴又はいにしへの國々よりの訴書納し櫃あり國々のみ出し彫附ありこゝには唐裝束の馬具ことくあり銀面雲珠杏葉など畫にてはみしか實物は今日をはしめとす今からくらの實物あるは日本中こゝのみ也といふ也世にきこえしもの也東大寺にも

こゝにも高麗の樂鞞鞞の樂に用ゆる樂面彫あり天狗のこときものこの羽天狗のこときもの又は今いふしほふきヒョットコなどに似たるものもみゆる也面にみな名あり樂の曲もありて樂人共はこゝろ得居といふ也面のすかたを以みれば雅樂にはあらし俗樂なるへし二十五菩薩來迎會のことは六朝に起りし戲なれ共今は古くより日本の佛事の内と成居る故夫に用ゆる伎樂の面といふもある也いにしへは任那百濟の類まで日本には服從せし故に鞞鞞などの東北韃靼種類か來りしものか唐の玄宗鞞鼓を好ませられし躰にあは唐朝より傳へしものかけふのものには夏蔭又はいにしへ人の貞丈壺井鶴翁などのことき人にわけをきいたきこと甚多しこゝに轉害會に用ゆる樂器あり轉害會のことは何そと聞しに宇佐八幡にてする放生會をこゝにては轉害會と云と神主かたりき興福寺にテンカイ門あり手搔町其わき也手搔一類の刀の銘手搔輾磴天蓋か造れるも万葉に音訓さへ同じけ

れは手師二王雉^{デシテシキ}岸^キなどの類を用ゆる類にて元來は轉害なるへきかなら中の寶物をよくみよく芽齧せは三年もかゝるへし大和の寶物文書は板にしたきもの也

○十八日 晴 此節郡山の松平甲斐守より賀之御備被 仰付候も同人家來共出府の者ありと之風聞有之候○夕七時頃四月八日より之江戸之書狀來る○母上様別々此ほとは御機嫌克と之御事恐悦之至也○おさとの醫者の御尋先ツ相應いたし候様子に之此ほとよほとよろしく候此躰ならば逐日よろしかるへしと奉存候○太郎敬次郎丈夫と之由何よりの御事也○土屋より時々見舞有之と之事不相替ながら深切之程感心いたし申候同人之老母七十七の賀のうた遣し候處返し來る

かきくもる空晴行てひなつるのやすらに巢立時をこそまつ

とあり大膳亮の再ひ盛ならむをこひねかふころあはれ也過日つゝれの錦のたはこ入させるつゝ金三百疋遣し候このこと御合に申上候○太郎の

口を利ならひ候との事昔楊素か父遺言に楊素か舌をさして血をとりしことあり口は不廻ほとよきことはなし祖父にこりて嫡孫にも父にこそ似よとはおもひ候けれ○おけい持病存外之醫者に之快氣いたし候と之事ひろいものに御座候再發の手當第一に御工夫相願候げんみり等參候由是又御序によろしく奉願候○母上様之御勘定書奉受取候○信州之地震の沙汰新右衛門之詳に御申越驚入申候前代未聞とは例言に候得其實に承候義も無之候明暦大火の後二万三万といふ人の天災に之死せしは不承候むさし鑑といふ明暦大火のこと記せし書の末に明暦焼死のことに付唐大和の例を多あけありしか二三万に及ふことは少かりしと覺へし也○留守宅飯米のこと御尤至極也少も存寄無之は勿論大慶之わけに相成候○本多家の刀劔一覽のはなし御浦山敷候正宗は忠勝位の太力にて強く遣ひたらは可折かもしらすとおもふ位也大に刃のかけ居るとのこと前と合せみらるへし符合する也忠勝か鹿角の甲は眞の角には無之柔成皮に之縫つくりしものと

聞也此節よく穿鑿なし置度事也甲冑の全圖貫はれは貫置可被申候○幸三郎
 を地震の詳成書物寫御差越候而忝候忠四郎など早速の出立と御用懸の吹
 聽申越候ひき○きのふはこゝの同心の公事方并盜賊かたえものゝ小書院
 に酒給させ酒なかはに近習をつれ一寸參り小頭兩人は計盃遣しあとの
 もの共はなかれ順盃にせしにことの外難有かり候而わか盃也とて別而其
 猪口にて多のみ小頭などは下口なりしかよほと酒給て御役所の部屋に參
 り一睡いたし候位之由われらか盃に流なとあるとはけしからす我かゝる
 身分にあらずいかにく恐入難有のかきりならずや第一に君の御恩さて
 は御兩親の御恩といたく恐入難有也わか一たひ出て一寸挨拶せしを一同
 悦て御奉行さま難有御所置也此御盃にて少も肴はいらすかゝる御馳走や
 あるとて殊によるこひこゝの風の猿樂などをうたひ舞てことに興に入て
 歸りし也まことに勿體なきこと也○御役宅馬場二ヶ所之内さくら植ある
 かたを少々手入せしに六十五間に成三方高貳間余の大土手あり氣遣ひな

く鏡炮にても試打なる也是は轉役のとき持歸り度也

○廿日 晴 興福尼院へ拜禮に參る惣門の外に役人出迎中門は役尼案
 内本堂前を 御靈屋は住職の尼案内也この尼は堂上方の娘也といふ人品
 よろし附弟は芝山持豐卿の娘にて書をよくし父の風ありて歌の聞へある
 といふ美人也なといへとも住職にあらされは不出○本多家に陣中へ被
 用たるは今の平日指料の刀に拵なとかはりはあらし刀之身何尺に柄
 の長何ほとめくきは中心の穴にみちたるほとふときや中心の穴には不拘
 今のことく柄木のめくき穴をたよりうちしや中書のさゝれしにかきらす
 陣中用ひし人の拵あらは委細に知度候鍵の柄のふとさ並之すやりに
 はしほくひ何分に候哉脇差は鏢ある並之拵に多く何寸位を用ひしや否
 之事

蜻蛉切のや
 りは例にな
 りは家に來
 りは家の並
 りは家の柄
 やりすの柄
 やりすの柄也

○廿一日 晴 市三郎を正南院に藥いたし試候是は何之子細もなく候得
 共おさとの藥相應いたし候様子に付轉法いたし候は、すらくといいたし

可申と云おさと考也醫案は三卿同前也小さい湯に黄蓮ほれいを加へたる薬のことし

○廿二日 くもり 下女共を開帳に参れといへとも奉行所之江戸女也とて市中に立とまり見る又風俗ならとはかはる故に直にわかる故にいやかりて不参今日は漸のことにあまさその開帳に参る江戸風は立白にこもをまけるかことくあひるか犬に追はれたる姿ならてはならぬこととおもひしなるへしならは元來女のみき所にて奉行所之婢のこときは尋ぬることとも珍らしかるへし故にみたかる也

○廿三日 くもり けふは月次之講釋あり

○廿四日 大佛の堂前に宋人陳和卿か造れる銅燈籠あり棹八角に銘文細かに鐫てあり書體見事也よつて摺せみしに所々磨滅其上に八角なればいつくをはしめにせしや不分しかし荒々よみたる所燈籠の利益あるをいひしことし儒者に聞によめす東大寺之學頭は眉間寺なればとひしに漸に

よみて出したりわか考の如し此眉間寺によめぬとなら中によむ人なし文事はなき所也西大寺興福寺東大寺等の僧にろく／＼手帑の出来るものなしこの頃大學を日々よむに心を正しくすること畢るかことくに又又意を誠にするといふことありよつて意をまことにするより格物致知にいたる迄は正心の工夫に於大學は大人の學也故に經に専ら誠をときしこと乾の文言に大人を説て誠をいひ坤の文言に君子を説て敬をいふといふやうなることは万一あらしやと問ふに村學究のみにて折衷して教くる人なし江戸ならば日々のことくに一齋かたにも用ありて人を遣し佐久間修理友野霞舟翁などの常に参られて教もあるに文武のことの師にはなれ候は奈良中の難義の一ツ也閑暇に經義などの涉獵も出來れば人も書籍もなし奈良に大學或問を持し人なし可歎事也以前梶野土佐守の世話なかりしならばなら中に四書五經の注解ある本并歴史はあるまじきに土佐守か世話の残り居て朝夕にみる書物先かなりにありて日々土佐の恩をおもは

す謝する也○けふひるころ中位の地震あり夫に亦も地震の至る少きところなればおとろきて早速御養父母の被爲入所を参りみしにおさとは先に参り居たり再ひ震ひしか中のうちにても少なるかたにてつり置し肩輿はゆれずといふ也かくさはきは善光寺の聞恐故也

○廿五日 雨 地震尤少々のこと也大和は地震の更になき國かと去年來おもひしにきのふ以來三度の地震めつらしけふは予の誕生日に付一同酒給さする市三郎の誕生をもかぬる也さみたれふりて物さひしわか誕生日に亦彰常かことをひとりおもひ出て内心かなし御養父母様の酒奉るわれは禁酒也○江戸にて母上のいかになと頻におもふ也節句或はけふらのことく成日にものかなしきあり家來等にもいはれすおさとなと密にかたる也大あち生か如きもの六十文也江戸ならば百文以上之もの也御養父母様のけふはさしみあけたしといふまくろなとの類更になし大鯛壹尺壹枚來る貳朱也是も江戸より下直也尤あたらし

○廿六日 くもり 都筑金三郎之嫡子御番入之事申來る目出度殊に懇意のことなれば彰常かことをおもふに付亦も金三郎の喜ひおもひやらるゝ也此ほと江戸に亦は御番入の若人等か麻上下着て奔走するをみは母上をはしめ奉り御涙の種なるへしなとゝわか身の上よりおもひやり奉る也○大和添上郡池田村嘉兵衛といふものあり借金公事に亦身代限にけふする積なるに嘉兵衛は旧家に亦申傳ふる所にて千百年來池田村に住するよしなるにはつか壹貫目はかりの事にて家跡滅するおしむべきの限なれば段々尋みるに地頭菩提山御朱印にても古ことはしらねとも太平記頃よりのものはたしかに亦家を段々薪と成ス程なれば旧物地を拂はつかに赤松家の系圖と庭にある松三本至極の大木にて舊家の證也といふ先祖住居の時つくりし二重のから堀のみを殘せしはかり也千百年といへは壺の石ふみの頃なるに其家の潰るゝ可惜事故菩提山にも訴訟人にも及利害其上銀子は内々手元金之内に亦償可遣とおもひしに身代限にならねは借金公事夥出る故に身代限を

却る相手之ものは好む位のよし也よつて再々公事に成たひに奉行之手元金も下_てられす止にしたり數のつきるは仕かたもなき事也大和十津川郷吉野郡へ行は五六百年の家は多けれともさすか千百年なるはなしといふ也

○廿七日 くもり 前の條に松浦さよひめか石に成しこと万葉になきといひしにけふ与風唐人の詩をみれば唐土に望夫石といふものありよつておもへは全後世其詩によりて日本の僞なる物語をつくりしもの也かゝること日本に夥敷多き事也おときほうこといふものは剪燈新話のやき直しにせし類なるへし名高きあな目くくのすゝきのされ骨の目より出しなともからの話を直せし也

○廿八日 晴 月並之禮受ること例のことし大乘院門跡の御父二條左大臣殿御病死大乘院殿御實母はならに而昨日被果候右之御悔として參る

○廿九日 中院殿の御位牌參拜として參る○奈良にやしり切之盜賊多

しよつて長吏に嚴敷申付たるに引廻し以上之もの六人召捕たりよつて少々やしり切滅したり其内之もの一昨日口書に成母と妻と子供に一目逢ひて口書の爪印したきとていかにいひても爪印せずやしりはかりも十ヶ所以上也與力共之手にのらすよつて白洲にて直たしをしてやれく汝は不便のやつ也母妻子に逢度とはもとより人間の常に五常五倫之内也それをおもふは入牢中善心に立歸りしなるへしされ共極刑のもの願によつて逢することのならぬは御法也あはれ汝やしりを切るとき今のころあらはよからむを可惜こと也され共ころにはなしあり汝前非を後悔して我とわか手に御仕置に成しと心得ころに疑ふことなくは良心に立もとりたるにて佛家にていふときは成佛うたかひなかるへししかるに奉行所之法をまけても親妻子に逢たきとは迷ひならずや迷ふものうかむといふことあるへからす凡人といふものは天と地との氣を受けて結ひて人と成し也死して又もとの天地の氣にもとるときあしきころなからぬには必